

日向市所在

むこう ばる なか お

向原中尾第2遺跡(第3次調査)

むこう ばる なか お

向原中尾第5遺跡

むこう ばる なか お

向原中尾第6遺跡

東九州自動車道(日向~都農間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11



向原中尾遺跡群立地状況（東より）

卷頭図版 2



向原中尾第2遺跡 S A 1 出土遺物



I層(表土)

II層(K-Ah)

III層
(縄文時代早期)

IV層
(後期旧石器時代)

V層(AT)

VI層

VII層

VII層(地山)

向原中尾第2遺跡基本層序



向原中尾第2遺跡 S A 1 完掘状況(西より)



向原中尾第5遺跡S区炉穴検出状況（南より）



8号炉穴（SP 8）検出状況（東より）



8号炉穴（SP 8）半截状況（南西より）



12号集石遺構（S 112）（南より）



7号集石遺構配石（S 117）（西より）

卷頭圖版 4



向原中尾第5遺跡出土繩文土器



向原中尾第5遺跡出土粗製剥片石器

日向市所在

むこう ばる なか お

向原中尾第2遺跡(第3次調査)

むこう ばる なか お

向原中尾第5遺跡

むこう ばる なか お

向原中尾第6遺跡

東九州自動車道(日向～都農間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 11

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（日向～都農間）建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査を平成20年度から実施してまいりました。本書は、平成24年度に実施した日向市東郷町に所在する向原中尾第2遺跡（第3次調査）、向原中尾第5遺跡、向原中尾第6遺跡の発掘調査報告書です。

主な成果としては、向原中尾第2遺跡において縄文時代早期の集石遺構1基、弥生時代終末期の竪穴建物跡1軒が検出され、竪穴建物跡からは炭化材や炭化種子が出土しました。向原中尾第5遺跡では、縄文時代早期の炉穴33基、集石遺構13基をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴建物跡が1軒確認され、向原中尾第6遺跡では後期旧石器時代の礫群が2基確認されました。

向原中尾遺跡群においては、先行して平成22年度に3か所で調査が行われ、重要な成果を得ており、今回の調査とあわせて後期旧石器時代から近・現代までの長きにわたる人々の生活の痕跡を確認しました。これらの成果は、寺迫地区の歴史を考えるうえで新たな知見を与えてくれるものと確信しています。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行に至るまで御協力いただいた関係諸機関ならびに地元の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 向井 大蔵

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い、平成24年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した、日向市東郷町に所在する向原中尾第2遺跡（第3次調査）、向原中尾第5遺跡、向原中尾第6遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、西日本高速道路株式会社九州支社の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
 - 基準点・グリッド杭等の設置
向原中尾第2遺跡……………(株)アップス
 - 4 現地での遺構掘削・実測図作成・写真撮影については、各遺跡の調査担当者が行い、菅付和樹・飯田博之・明石宏一・新谷清・松浦朋彦・竹下昭彦・中川みな子・大島昭海・久保田陽香・川俣唱子がこれを補助した。
 - 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
 - 6 遺物の実測・トレースについては整理作業員の補助を得て各担当者が行い、石器実測・トレースについては一部を除き業務委託した。遺物写真撮影は沖野誠・橋本英俊が行い、松浦朋彦・二方和也・山元清春の協力を得た。また、石材同定については松田清孝の助言を得た。
 - 7 自然科学分析のためのフローテーション作業ならびに種子などの選別作業は、埋蔵文化財センター職員の補助を得て向原中尾第2遺跡を沖野誠・山本光俊が、向原中尾第5遺跡を橋本英俊・谷口めぐみが行った。その委託成果については、第2遺跡を沖野誠が、第5遺跡を橋本英俊が編集して掲載した。事実報告分遺物については当センターで保管している。
 - 8 整理作業のうち、以下のものについては業務委託した。
 - 石器実測・トレース
向原中尾第5遺跡……………(株)アーキジオ
 - 自然科學分析
向原中尾第2遺跡（放射性炭素年代測定・種実樹種同定）……………(株)古環境研究所
 - 向原中尾第5遺跡（放射性炭素年代測定・種実樹種同定）……………パリノ・サーヴェイ株式会社

- 9 本書の執筆・編集は、第Ⅰ・Ⅱ章は沖野誠・山本光俊、第Ⅲ章は橋本英俊、第Ⅳ章は谷口めぐみ・福田泰典、補遺は沖野誠、第V章は橋本英俊・沖野誠が分担して行い、その文責名を各文末に示した。なお、複数の場合は五十音順に示した。
- 10 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書で使用した周辺遺跡位置図は、国土地理院発行の1/25,000図（都農）をもとに作成した。また遺跡周辺地形図は、西日本高速道路株式会社九州支社延岡高速道路事務所提供的1/2,500図をもとに作成した。

凡 例

- 1 本書に使用した主な略記号は次のとおりである。
S A = 積穴建物跡 S C = 土坑・陥し穴状遺構 S I = 窪群・集石遺構 K - A h = 鬼界アカホヤ火山灰
A T = 始良田 n 火山灰 G r. = グリッド
- 2 本書で使用した標高は海拔高であり、方位は座標北（G.N.）を基本として一部の遺構実測図は磁北（M.N.）を用いた。
- 3 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財團法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に掲り記述した。
- 4 本書で「尾鈴山溶結凝灰岩」としたものは、「尾鈴山酸性岩類」の主体をなす溶結凝灰岩（WT 1・WT 2）を指す。遺跡で認められる「尾鈴山酸性岩類」には、他に花崗閃緑斑岩・火山角礫岩などが含まれるが、遺物や遺構の一部として「尾鈴山酸性岩類」が利用される場合、厳密な岩石名の特定が困難なことも多い。このため、本文中「尾鈴山溶結凝灰岩」と記載した資料には、溶結凝灰岩を主体としつつも、他の「尾鈴山酸性岩類」を含む可能性がある。
- 5 石器の節理面は1点鎖線で、敲打痕の認められる部分は破線の○で、ガジリ・二次的欠損は黒塗りで表現した。
- 6 石器実測図への使用痕の表現は以下のようにした。また、図面上で明示できない範囲については矢印で範囲を示した。
敲打痕=コ 磨痕=ス 磨減=マ 溝れ=ツ 微細剥離=ビ ※実測図中の網掛けは砥面・強い磨減面を表す。
- 7 遺構・遺物写真などの図版の縮尺については任意であり、統一していない。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 調査の組織 1

第3節 地理的・歴史的環境 1

第Ⅱ章 向原中尾第2遺跡（第3次調査）

第1節 調査の概要と方法・経過

1 遺跡周辺の環境と調査区の設定 6

2 発掘調査の方法 6

3 調査の経過 7

4 整理作業の方法と経過 7

第2節 基本層序と石材分類 8

第3節 後期旧石器時代の遺物

1 分布状況 10

2 遺物 10

第4節 繩文時代の遺構と遺物

1 繩文時代早期の遺構と遺物 12

第5節 弥生時代以降の遺構と遺物

1 竪穴建物跡と出土遺物 14

第6節 自然科学分析の結果

1 放射性炭素年代測定 19

2 樹種同定 20

3 種実同定 20

第7節 小結

1 後期旧石器時代 23

2 繩文時代早期 23

3 弥生時代終末期以降 24

第Ⅲ章 向原中尾第5遺跡第1地点

第1節 発掘調査の概要と経過

1 遺跡周辺の環境と調査の経過 25

2 整理作業の経過 25

3 基本層序 25

第2節 後期旧石器時代の遺構

1 遺構 25

第3節 繩文時代早期の遺物

1 土器 26

2 石器 26

第4節 時期不明の遺構 27

第5節 小結 27

第Ⅳ章 向原中尾第5遺跡第2地点

第1節 発掘調査の概要と経過

1 調査の経過 28

2 整理作業の経過 28

3 基本層序 30

第2節 後期旧石器時代の遺物

1 石器 32

第3節 繩文時代の遺構と遺物

1 遺構 34

2 遺物 42

第4節 弥生～古墳時代の遺構と遺物

1 遺構 63

2 遺物 64

第5節 自然科学分析の結果

1 炭化材の放射性炭素年代測定・樹種同定 65

2 種実同定 68

第6節 小結

1 後期旧石器時代 71

2 繩文時代早期 71

3 弥生時代～古墳時代 72

第Ⅴ章 向原中尾第6遺跡

第1節 発掘調査の概要と方法・経過

1 遺構 73

第2節 基本層序

1 遺構 74

2 遺物 74

第4節 その他の時代の遺物 77

第5節 小結 77

第VI章 総括

第1節 後期旧石器時代

1 遺構 78

第2節 繩文時代

1 遺構 80

第3節 弥生時代以降

1 遺構 83

補遺

向原中尾第3遺跡 85

向原中尾第2遺跡（第2次調査） 88

経費削減による未調査箇所の報告 89

報告書抄録 卷末

挿図目次

第Ⅰ章 はじめに

- 第1図 向原第3遺跡群周辺地形図 3
第2図 向原第3遺跡群周辺表採石器実測図 3
第3図 東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図 4
第4図 向原中尾遺跡群と周辺遺跡位置図 5
第5図 遺跡間地形断面模式図 5

第Ⅱ章 向原中尾第2遺跡（第3次調査）

- 第6図 遺跡位置と周辺地形 6
第7図 グリッド配置図 7
第8図 調査区土層断面図 9
第9図 後期旧石器時代櫛・遺物分布図 10
第10図 後期旧石器時代出土遺物実測図 11
第11図 縄文時代早期櫛・遺物分布図 12
第12図 S I 1実測図 13
第13図 縄文時代早期出土遺物実測図 13
第14図 弥生時代遺構分布図 15
第15図 S A 1実測図 16
第16図 S A 1出土遺物実測図（1） 17
第17図 S A 1出土遺物実測図（2）および
その他の遺物実測図 18
第18図 历年較正曲線図 19
第19図 S A 1出土の炭化材 20
第20図 S A 1出土の炭化種子 22

第Ⅲ章 向原中尾第5遺跡第1地点

- 第21図 後期旧石器時代櫛群実測図 26
第22図 縄文時代早期出土遺物実測図（1） 26
第23図 縄文時代早期出土遺物実測図（2） 26
第24図 土坑実測図 27

第Ⅳ章 向原中尾第5遺跡第2地点

- 第25図 グリッド配置図 28
第26図 調査区位置図 29
第27図 S 区 C 11グリッド東壁土層断面図 30
第28図 S 区 レンチ 1 土層断面図 31
第29図 後期旧石器時代石器実測図 33
第30図 N 区 縄文時代早期遺構分布図 34
第31図 S 区 縄文時代早期・弥生・古墳時代遺構
分布図 35
第32図 S 区 縄文時代早期炉穴分布図 36

- 第33図 S 区 縄文時代早期炉穴土層断面図 37
第34図 S 区 縄文時代早期炉穴実測図 37
第35図 縄文時代早期集石遺構実測図（1） 39
第36図 縄文時代早期集石遺構実測図（2） 40
第37図 縄文時代早期集石遺構実測図（3） 41
第38図 縄文時代早期出土遺物実測図（1） 43
第39図 縄文時代早期出土遺物実測図（2） 44
第40図 縄文時代早期出土遺物実測図（3） 45
第41図 縄文時代早期出土遺物実測図（4） 49
第42図 縄文時代早期出土遺物実測図（5） 50
第43図 縄文時代早期出土遺物実測図（6） 51
第44図 縄文時代早期出土遺物実測図（7） 52
第45図 縄文時代早期出土遺物実測図（8） 53
第46図 縄文時代早期出土遺物実測図（9） 54
第47図 縄文時代早期出土遺物実測図（10） 56
第48図 縄文時代早期出土遺物実測図（11） 57
第49図 縄文時代早期出土遺物実測図（12） 58
第50図 縄文時代早期出土遺物実測図（13） 59
第51図 S 区 S A 1 実測図 63
第52図 出土土器実測図 64
第53図 出土石器実測図 64
第54図 历年較正結果 67
第55図 炭化材・炭化種子 70

第Ⅴ章 向原中尾第6遺跡

- 第56図 遺跡の周辺地形図 73
第57図 トレンチ配置図 73
第58図 旧石器時代の遺構・遺物分布図 74
第59図 土層断面図 74
第60図 1号櫛群実測図 75
第61図 出土遺物実測図（1） 75
第62図 2号櫛群実測図 76
第63図 出土遺物実測図（2） 76
第64図 出土遺物実測図（3） 77

第VI章 総括

補遺 向原中尾第3遺跡

- 第65図 出土遺物実測図 86
第66図 遺跡位置図 87
第67図 調査区略図 87

向原中尾第2遺跡（追加報告）

- 第68図 追加報告石器実測図 88
経費削減による未調査箇所の報告
第69図 向原中尾遺跡群未調査箇所位置図 89

表目次

第Ⅰ章 はじめに

- 第1表 向原第3遺跡群周辺表採石器計測表 3
第Ⅱ章 向原中尾第2遺跡（第3次調査）
第2表 後期旧石器時代出土石器計測表 11
第3表 縄文時代早期集石遺構一覧表 13
第4表 縄文時代早期土器観察表 13
第5表 弥生時代遺構一覧表 16
第6表 S A 1出土土器観察表 18
第7表 S A 1出土石器計測表 18
第8表 弥生時代以降石器計測表 18
第9表 放射性炭素年代測定試料一覧表 19
第10表 放射性炭素年代測定結果 20
第11表 炭化材同定結果 20
第12表 種実同定結果 21

第Ⅲ章 向原中尾第5遺跡第1地点

- 第13表 縄文時代早期土器観察表 27
第14表 縄文時代早期石器計測表 27
第Ⅳ章 向原中尾第5遺跡第2地点
第15表 後期旧石器時代石器計測表 32
第16表 縄文時代早期集石遺構一覧表 41

- 第17表 縄文時代早期土器観察表（1） 46
第18表 縄文時代早期土器観察表（2） 47
第19表 縄文時代早期石器計測表（1） 60
第20表 縄文時代早期石器計測表（2） 61
第21表 縄文時代早期石器計測表（3） 62
第22表 出土土器観察表 64
第23表 出土石器計測表 64
第24表 放射性炭素年代測定結果 66
第25表 樹種同定結果 67
第26表 種実同定結果 68
第Ⅴ章 向原中尾第6遺跡
第27表 後期旧石器時代遺構一覧表 77
第28表 後期旧石器時代石器計測表 77
第29表 その他の時代の土器観察表 77
補遺 向原中尾第3遺跡
第30表 石器計測表 86
第31表 土器観察表 86
向原中尾第2遺跡（追加報告）
第32表 追加報告石器計測表 88

図版

- 巻頭図版 1 向原中尾遺跡群立地状況
巻頭図版 2 向原中尾第2遺跡 S A 1出土遺物
　　向原中尾第2遺跡 S A 1完掘状況
　　向原中尾第2遺跡基本層序
巻頭図版 3 向原中尾第5遺跡炉穴検出状況
　　向原中尾第5遺跡炉穴・集石遺構
巻頭図版 4 向原中尾第5遺跡出土土器文様
　　向原中尾第5遺跡出土粗製剥片石器群

- 図版 1 向原中尾第2遺跡 90
　　向原中尾第2遺跡より日向灘を望む／
　　第3次調査区から第2次調査区を望む／
　　調査前／A T および櫛出土状況／S I 1
　　検出状況／S I 1 配石検出状況／S A 1
　　遺物出土状況／S A 1 貼床検出状況

図版 2	向原中尾第2遺跡 91 S A 1 焼土および炭化材出土状況／S A 1 完掘状況／A-A' 土層堆積状況／B-B' 土層堆積状況／C-C' 土層堆積状況／D-D' 土層堆積状況／調査風景（1）／記録風景（2）	り）／S区集石遺構検出状況（東より）／13号集石遺構（S I 13）（東より）／12号集石遺構（S I 12）（南より）／12号集石遺構配石（南より）／1号竪穴建物跡（S A 1）検出状況（西より）／1号竪穴建物跡（S A 1）完掘状況（北西より）
図版 3	向原中尾第2遺跡 92 向原第3遺跡群の石器／後期旧石器時代の石器／縄文時代早期の土器／弥生時代以降の石器／S A 1 出土遺物（1）	向原中尾第5遺跡 96 向原中尾第5遺跡第1地点出土遺物／向原中尾第5遺跡第2地点出土後期旧石器／第2地点出土縄文時代早期土器（1）／第2地点出土縄文時代早期土器（2）／第2地点出土縄文時代早期土器（3）／第2地点出土縄文時代早期土器（4）／第2地点出土縄文時代早期石器（1）／第2地点出土縄文時代早期石器（2）
図版 4	向原中尾第2遺跡 93 S A 1 出土遺物（2）／向原中尾第3遺跡の出土遺物／向原中尾第2遺跡（第2次調査）の追加報告遺物	向原中尾第5遺跡 97 N区集石遺構検出状況（南より）／N区2号集石遺構（S I 2）（南東より）／S区炉穴検出状況（南西より）／S区炉穴完掘状況（西より）／S区炉穴完掘状況（北西より）／32号炉穴（S P 32）半截状況（東より）／8号炉穴（S P 8）検出状況（南西より）／8号炉穴（S P 8）完掘状況（南西より）
図版 5	向原中尾第5遺跡 94 N区集石遺構検出状況（南東より）／N区2号集石遺構（S I 2）（南東より）／S区炉穴検出状況（南西より）／S区炉穴完掘状況（西より）／S区炉穴完掘状況（北西より）／32号炉穴（S P 32）半截状況（東より）／8号炉穴（S P 8）検出状況（南西より）／8号炉穴（S P 8）完掘状況（南西より）	向原中尾第5遺跡・向原中尾第6遺跡 97 第2地点出土縄文時代早期石器（3）／第2地点出土縄文時代早期石器（4）／第2地点出土縄文時代早期石器（5）／第2地点出土縄文時代早期石器（6）／第2地点出土縄文時代早期石器（7）／第2地点出土弥生時代～古墳時代出土遺物／向原中尾第6遺跡縄群（S I 2）検出状況／向原中尾第6遺跡出土遺物
図版 6	向原中尾第5遺跡 95 5号炉穴（S P 5）完掘状況（東より）／21号炉穴（S P 21）完掘状況（東より）	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道（日向～都農間）19.7kmについて県文化財課は、平成17年度に32遺跡、306,700m²の分布調査結果を提示した。その後、当該区間は、平成17年度末までに関係市町との設計協議等が終了し、平成18年度末には用地買収に着手している。

この間、当該区間の平成26年度供用開始が公表され、用地取得およびそれに続く埋蔵文化財調査にとって時間的に厳しい状況となった。また、平成19年11月には発掘調査対象面積の見直しがなされ、暫定2車線261,400m²と面積が減少している（第69図）。

平成20年7月1日、東九州自動車道関連としては初の『埋蔵文化財発掘調査協定書』が西日本高速道路株式会社九州支社長と県知事との間で締結された。この協定書では、発掘調査の範囲や体制、全体の実施計画、費用の概算額等が提示された。その後、用地の取得状況が進展しないながらも、同年10月17日付で『埋蔵文化財発掘調査委託契約』を結び、着手が可能であった10遺跡、3,350m²の発掘調査に着手した。平成21年1月には、用地取得や埋蔵文化財調査の進展を条件に平成25年度の供用開始が努力目標となった。関係者の努力により平成25年3月をもって、日向～都農間の32遺跡すべての調査を終了した（第3図）。

第2節 調査の組織

本書掲載の遺跡調査・整理報告の実施にあたり、以下の体制が組織された（平成24～25年度）。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 北郷 泰道（平成24年度）

向井 大藏（平成25年度）

副所長 佐々木 真司（平成24年度）

副所長兼調査第一課長

長津 宗重（平成25年度）

総務課長 坂上 恒俊（平成24・25年度）

副主幹兼総務担当リーダー

高園 寿恵（平成24・25年度）

調査第一課長 長津 宗重（平成24年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹（平成24年度）

副主幹兼調査第二担当リーダー

福田 泰典（平成25年度）

調査担当

向原中尾第2遺跡（第3次調査）

調査第一課調査第二担当

主 事 沖野 誠

主 事 山本 光俊

向原中尾第5遺跡

調査第一課調査第一担当

主 査 橋本 英俊

調査第一課調査第二担当

主 査 松本 茂

主 事 谷口めぐみ

向原中尾第6遺跡

調査第一課調査第二担当

主 査 松本 茂

主 事 谷口めぐみ

整理・報告書担当

調査第一課調査第一担当

主 査 橋本 英俊（平成24・25年度）

調査第一課調査第二担当

主 事 沖野 誠（平成24・25年度）

主 事 山本 光俊（平成24年度）

主 事 谷口めぐみ（平成24年度）

調査協力・助言

日向市教育委員会

第3節 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

向原中尾第2遺跡は宮崎県日向市東郷町山陰字山ノ口、向原中尾第5遺跡・向原中尾第6遺跡は日向市東郷町山陰字向ヲ原に所在する。日向市東郷町は宮崎県の北部に位置し、山々に囲まれた自然豊かな町である。

町の地勢は、南方には標高1,405.2mの尾鈴山を主峰とする尾鈴連峰が連なり、また、600～800mの加子山・珍神山といった九州山地に属する山々が周囲を囲み急峻な渓谷や丘陵を形成している。その山々を縫って流れる耳川やその支流の坪谷川、また、児湯方面に流れる小丸川などは、その流域に河岸段丘や小規模な沖積地を形成している。日向市東郷町に存在する遺跡もこれらを中心で分布している。

遺跡が所在する寺迫地区は、日向市東郷町の中心部から東に飛び地のように離れている。地形的にみても異なり、尾鈴山地の東側に南北に長く連なる平坦な段丘地形に立地している。

寺迫地区には、猪渡（いのと）や落鹿（おとし）といった動物の名がつく地名がみられ、古くより狩猟文化との密接な関係を伺わせている。

2 歴史的環境

この項では本書で報告する遺跡周辺の歴史的変遷について時代ごとに述べる。

旧石器時代 寺迫地区ではナイフ形石器と畦原型細石刃核が採集され、向原第3遺跡群では細石刃・細石刃核・ナイフ形石器が出土している。上野原遺跡では礫群1基が検出され、細石刃が出土している。八ツ山遺跡・仲野原遺跡ではナイフ形石器・角錐状石器・スクレイバーなどが出土している。また、仲野原遺跡では礫群10基が検出されている。

繩文時代 八ツ山遺跡では早期の押型土器・石斧・石鎌・磨石が、下水流遺跡・深谷遺跡では石斧・石鎌が出土している。田野原遺跡・切瀬遺跡では石鍤が採集されている。広瀬田遺跡では早期の集石遺構2基が検出され、早期・晚期の土器・石器が出土している。樋田遺跡では後期の堅穴建物跡2軒と後期を中心とした土器群、少量の晚期の土器が出土している。赤松遺跡や下水流遺跡から晩期の黒色磨研土器・粗製深鉢土器・刻目突帶文土器などが出土している。また、赤松遺跡・下水流遺跡・広瀬田遺跡では石斧の多さが目をひく。

弥生時代 下水流遺跡では前期末から中期初頭の亀ノ甲タイプの甕と下城式甕が共伴して出土している。樋田遺跡・下三ヶ八ツ山・日田尾・鶴戸木では石庵丁が、鶴ノ内地区上ノ原遺跡では有茎の銅鏡が

採集されている。樋田遺跡では花弁状住居2軒を含む堅穴建物跡16軒が検出され、瀬戸内系の高坏が出土している。

古墳時代 山陰・鶴ノ内・日田尾地区に所在する3基の円墳が県指定史跡となっている。八ツ山遺跡・羽坂A・B遺跡・蕨野遺跡のほか、勾玉が採集された老谷遺跡がある。

古代 古代律令制下では白杵郡に属していたと考えられ、『和名抄』に見える氷上郷に比定されるという説がある。天平勝宝年間（749～757）頃、百濟王が内乱のために日向に逃れた際に献納したものと伝えられる須恵器の獣が山陰神社に社宝として伝存する。

中世 小野田立山の中腹には伊東氏によって築城された山陰城跡がある。また、坪谷の小丘陵には坪谷城跡が位置している。赤松遺跡からは掘立柱建物跡が5棟検出されている。建久8年（1197）の「日向国岡田帳写」に島津荘寄郡の内として見える。天正5年（1577）に伊東氏は島津氏に追われ、両城は島津氏の配下に入ったものと考えられる。各地区の丘陵には廃絶した五輪塔群や板碑が点在している。

近世 天正15年（1587）の豊臣秀吉による九州仕置以降は高橋氏の領地となり、以降、有馬氏→三浦氏→牧野氏を経て、内藤氏が廢藩置県まで支配した。なお元禄3年（1690）に農民の逃散が起ったため、翌年に坪谷・下三ヶの両村は幕府領となった。

近現代 明治4年に延岡県となって以降、美々津県→宮崎県→鹿児島県→宮崎県となり、同17年には東臼杵郡に属することになった。同22年の市制町村制施行により、4村が合併して東郷村となり、昭和44年の町制施行により東郷町が誕生した。平成18年2月25日に日向市に編入され、日向市東郷町となった。

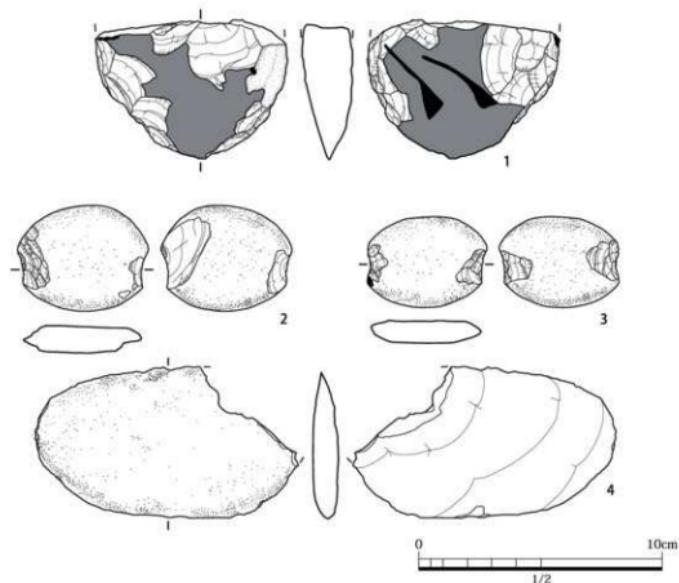
3 寺迫地区的考古資料

向原中尾第2遺跡発掘作業員が表探した石器5点（図化4点）をここで報告したい（第2図）。

石器は、同氏所有の畠から表探されたものであり、詳細な場所は不明であるが、平成16年に日向市によって発掘された向原第3遺跡群の西側にあたる地点と考えられる（第1図）。



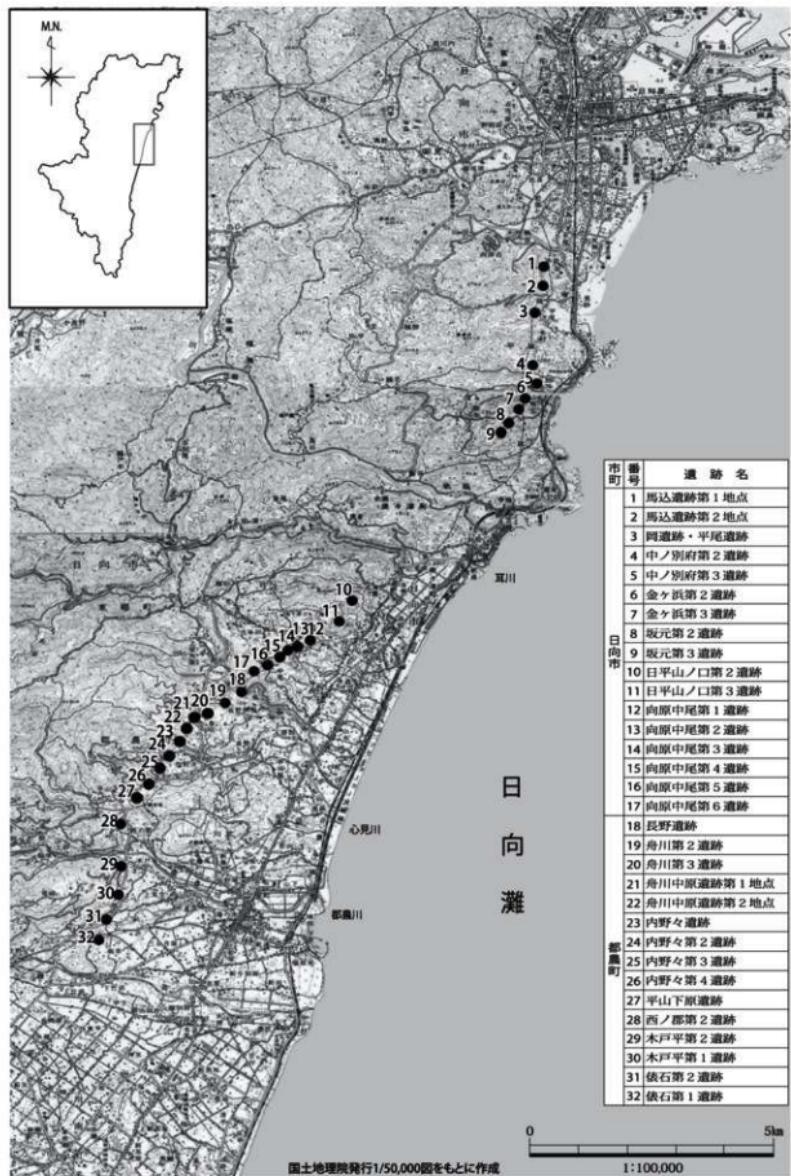
第1図 向原第3遺跡群周辺地形図



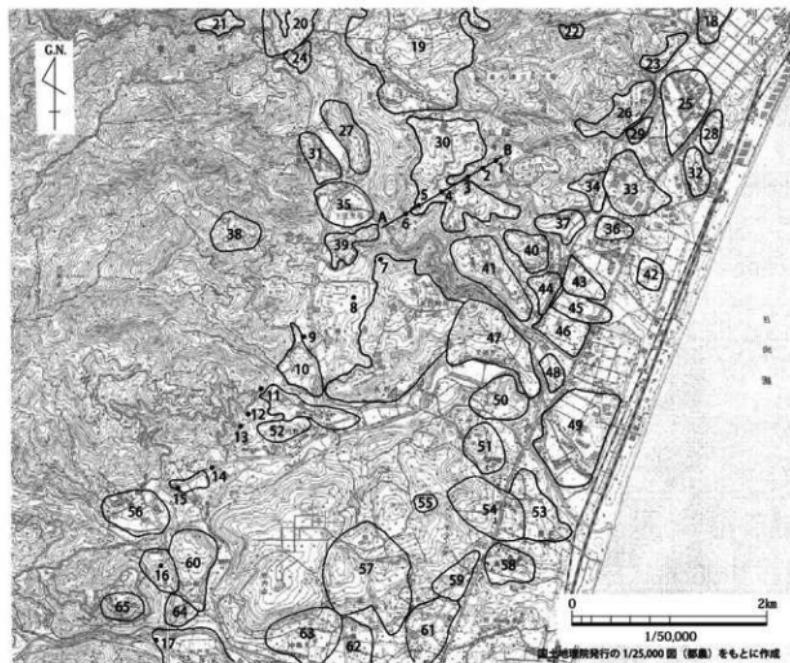
第2図 向原第3遺跡群周辺表探石器実測図

第1表 向原第3遺跡群周辺表探石器計測表

拂団 番号	図版 番号	出土 層位	器種	石材	法量(cm, g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
1	図版1	表探	石斧	頁岩	6.2	8.6	2.3	146.0	上部欠損
2	図版1	表探	石錘	砂岩	4.8	5.8	1.3	50.0	
3	図版1	表探	石錘	砂岩	4.0	5.3	1.0	35.8	
4	図版1	表探	粗製剥片石器	尾鈴山溶結凝灰岩	6.7	11.7	1.2	107.7	



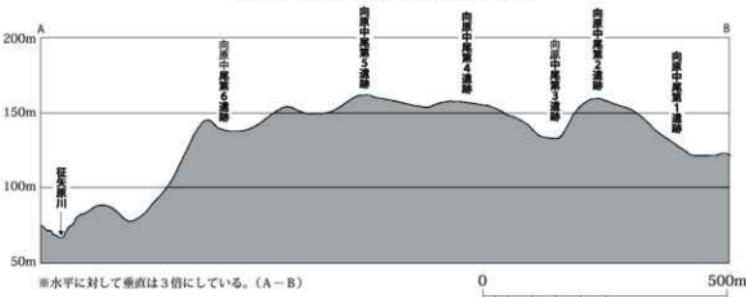
第3図 東九州自動車道（日向～都農間）関連遺跡位置図



1 向原中尾第1遺跡	2 向原中尾第2遺跡	3 向原中尾第3遺跡	4 向原中尾第4遺跡	5 向原中尾第5遺跡	6 向原中尾第6遺跡	7 長野遺跡
8 舟川第2遺跡	9 舟川第3遺跡	10 舟川中原遺跡	11 内野々遺跡	12 内野々第2遺跡	13 内野々第3遺跡	14 内野々第4遺跡
15 平山下原遺跡	16 西ノ郡第2遺跡	17 木戸平原第2遺跡	18 落麻遺跡	19 庭田庭田遺跡群	20 庭田小浜遺跡群	21 庭田小浜遺跡
22 日平第2遺跡	23 日平第1遺跡	24 坂下遺跡	25 高松遺跡	26 日平山ノ口遺跡	27 東平遺跡	28 露島原遺跡
29 久保遺跡	30 向原遺跡群	31 上征矢原遺跡群	32 宮ノ下遺跡	33 前ノ原遺跡	34 山ノ口遺跡	35 下征矢原遺跡
36 中村遺跡	37 寺道遺跡	38 舟川獨立遺跡	39 舟川遺跡	40 向原第1遺跡	41 向原第3遺跡	42 寺道下原遺跡
43 宮川遺跡	44 向原第2遺跡	45 山木大原第2遺跡	46 山木大原第1遺跡	47 又猪野原遺跡	48 心見往還上遺跡	49 心見遺跡
50 旧牧跡第2遺跡	51 旧牧跡第1遺跡	52 内野遺跡	53 上黒萩遺跡	54 白石第1遺跡	55 白石第2遺跡	56 平山遺跡
57 白水遺跡	58 久次畠田遺跡	59 境ヶ谷第2遺跡	60 西ノ郡第1遺跡	61 境ヶ谷第1遺跡	62 黒石遺跡	63 京塙遺跡
64 川神遺跡	65 手平平遺跡					

*1~17は東九州自動車道(日向~都農間)開通遺跡

第4図 向原中尾遺跡群と周辺遺跡位置図



第5図 遺跡間地形断面模式図

第Ⅱ章 向原中尾第2遺跡（第3次調査）

第1節 調査の概要と方法・経過

1 遺跡周辺の環境と調査区の設定

向原中尾第2遺跡は今回の調査を含めて3回発掘調査が行われている。平成22年度に第1次調査と第2次調査が行われ、平成23年度に報告書が刊行されている。

今回の第3次調査は第1・2次調査の調査区と市道を挟んで隣接しており、同じ丘陵尾根上に位置する。第2次調査の調査区と比べ、現地表面、遺構面共に標高が約2m高く、尾根の先端により近い平坦面の一部と西に下る斜面地に位置する（第6図）。

第2遺跡の立地する丘陵尾根は、南北に長く、東西は谷に挟まれている。西に尾鈴山系を配し、東に日向灘を望む（巻頭図版1）。また、第2遺跡西側の谷部に向原中尾第3遺跡、南西に向原中尾第4、第5、第6遺跡を見通すことができる。

第3次調査の調査区は、工事の施工に際して削平される部分に対してのみ設定した。現状で調査対象地となるのは、第2次調査区の南側にはしる市道よりも南側である。対象地の東北部は、第1・2次調査の着手以前にすでに削平されていた。なお、削平されている部分に関しては、基本層_Ⅲ層である

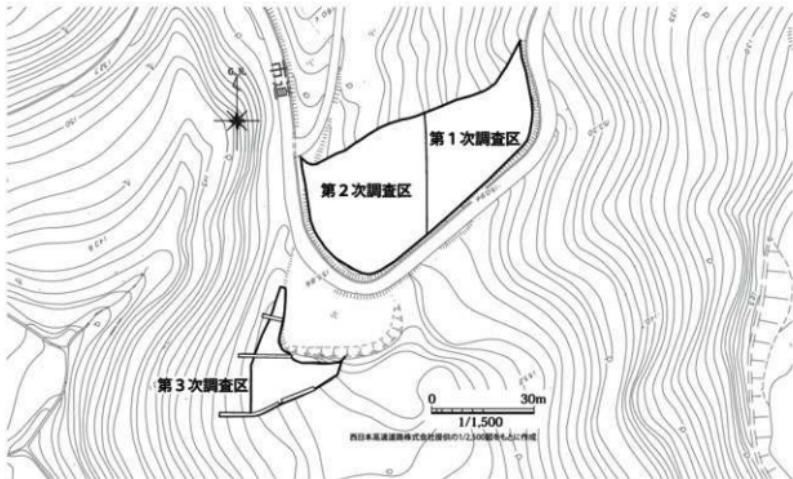
地山が展開しているのみであった。

発掘調査にあたりグリッドは、世界測地系を基準に10m×10mのグリッドを設定した。東を基準として、東西軸をアルファベット、北を基準として、南北軸を算用数字で表した（第7図）。

2 発掘調査の方法

隣接する第1次・2次調査の発掘調査の成果をうけて、重機での掘削を表土のみとし、それ以下は人力で掘削した。表土剥ぎの結果、調査区東端において竪穴建物跡を検出した。竪穴建物跡の埋土上層の掘削段階から遺物の集中がみられたため、埋土中の遺物は、遺構と考えられる範囲を各方位N、E、W、S区で大区分として四分割し、大区分内をさらにa、b、c、dの四分割し小区分として取り上げた。

掘削中に炭化物が検出されたことから、第1・2次調査での建築部材の検出例をふまえ、全ての炭化物の位置を記録した。貼床直上、埋土中の遺物においても、比較的残りの良いものを選定し、図化した。それ以外の遺物は埋土中の遺物同様、竪穴建物跡を大区分として四分割、その中を小区



第6図 遺跡位置と周辺地形

分としてさらに四分割して取り上げた。また、掘削は竪穴建物跡の掘方まで行った。このため、竪穴建物跡出土の遺物は掘削中に出土したもの（埋土出土遺物）、貼床面出土したもの、貼床面から掘方で出土したものに細分した。

また、基本層Ⅲ層の礫と遺物は図化し、遺物のみを持ち帰った。後期旧石器時代の礫や遺物については図化し、礫、遺物ともに持ち帰った。なおSA1の床土、土坑埋土、主柱穴埋土、焼土、炭化物を含んだ埋土は持ち帰り、動植物遺存体の有無を確認するため、フローテーションを実施した。

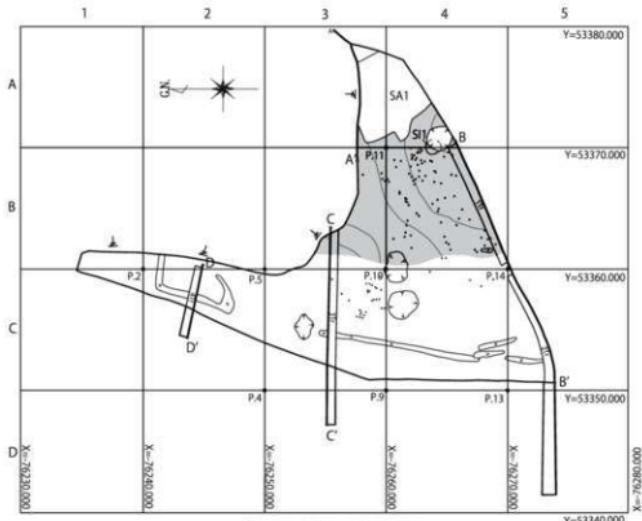
3 調査の経過

第3次調査区は、第2次調査区に極めて隣接しており調査前の段階でアカホヤ層（II層）の存在を確認していた。表土剥ぎ後、掘削前の段階から遺物が散見され、弥生時代以前の遺構や遺物が良好に残存していると考えられた。表土下の橙色土（II層）の検出の際に、調査区東端部において弥生時代終末期と考えられる土器が出土し、Ⅲ層上面で竪穴建物跡が1軒確認された。アカホヤ層（II層）下層の褐灰色土（Ⅲ層）では集石遺構が1基検出された。また、縄文時代早期の押型文土器の出土

が確認できたことから、Ⅲ層は縄文時代早期に位置づけられる。また、A T層（V層）をはさみ上位、下位に遺物が出土している。明確なA T層は、第1・2次調査では確認されていなかったが、第3次調査では比較的良好な状態で検出された。これらのことにより、向原中尾第2遺跡は後期旧石器時代から弥生時代終末期の間に生活空間として利用されていることが明らかとなった。

4 整理作業の方法と経過

遺物は発掘調査の段階でほぼ完形の土器や接合する遺物が確認されていたことから、水洗いや注記の段階で接合できる遺物をまとめていった。注記において竪穴建物跡出土遺物は検出前に竪穴建物跡の直上のII層で出土したものを「埋上」、竪穴建物跡の埋土掘削中に出土したものを「埋」、床面で出土したものを「床」、床面から掘方までの間で出土したものを「床内」と注記した。竪穴建物跡出土の遺物は床面と埋土の土器の接合関係を確認した。包含層出土の土器や石器についても接合関係の確認を行い、向原中尾第2遺跡（第1・2次調査）の遺物との接合関係も確認した。遺物の実測、トレースは埋蔵文化財センターで行った。



第7図 グリッド配置図

第2節 基本層序と石材分類

基本層序

基本層序はⅠ～Ⅷ層に分かれる（第8図A-A'）。

Ⅰ層：黒色土（表土）

Ⅱ層：橙色土（K-A h二次堆積層）

Ⅲ層：褐灰色土（縄文時代早期）

Ⅳ層：ふい黄橙色土

Ⅴ層：黄色土（A T層）

VI層：褐灰色土

VII層：明褐灰色土

Ⅷ層：橙色土

向原中尾第2遺跡では、表土直下に二次堆積のアカホヤ層であるⅡ層が確認されるが、堆積は比較的薄い。そのため、範囲も平坦な尾根頂部に限られており北端部および東端部にはみられない。アカホヤ自体はブロック状に堆積しており、特に谷に至るにつれて散漫な堆積状況が顕著となる。この状況は、縄文時代早期層であるⅢ層やA T層であるV層においても同様な状況がみうけられる。これらは、尾根頂部から谷へ至る急斜度な地形に起因する土の流出が原因であると考えられる。比較的安定した堆積をみせるのが、V層を除くIV層下位の層位である。特にIV層は調査区の全面に堆積し、Ⅱ、Ⅲ層のような土の流出がみられない。これは、各層位に対比しうる時期に微地形の変化があったと考えられ、IV層下位の段階ではその上位層の段階と比較すると平坦な傾斜であったことが考えられる。VI、VII層は、色調は薄いが宮崎県下でみられるMB 2、3の特徴を有しており、いわゆるブラックバンドに比定できる。

石材分類の基準

石器石材は、共通認識を図る目的のため、前回報告した向原中尾第1・2遺跡、向原中尾第4遺跡の石材分類に則り分類した。分類は肉眼観察による色調、礫面、風化の状況や手触り等により行った。

流紋岩…白色に風化し、流離構造が観察されるものも含む。風化面はツヤがあるもの、粉状に風化するものとある。新鮮面は黒色緻密。

ホルンフェルス…黒色でツヤがあるものと、灰白色斑が混ざるものとがある。風化面は灰色、白色ないし黄色であり、粉状の風化がみられる。砂岩系と頁岩系に区別できる。

頁岩…黒灰色を中心とし、薄い層状に剥落する。

珪質頁岩…黒色ないし、黒灰色を中心とし、白斑が混じる。剥離面は鋭く一部貝殻状断痕もみられる。

チャート…青、白、灰、赤等、色調にはバリエーションがみられる。一部無光沢のものも確認でき、節理が多い。

砂岩…黄褐色から黄土色であり、肉眼で砂粒が確認できるもの。一部青灰色のものもあり、礫面は滑らかである。

尾鈴山溶結凝灰岩…新鮮面は灰色ないし乳白色で、白色に風化する。不純物が多く介在する。

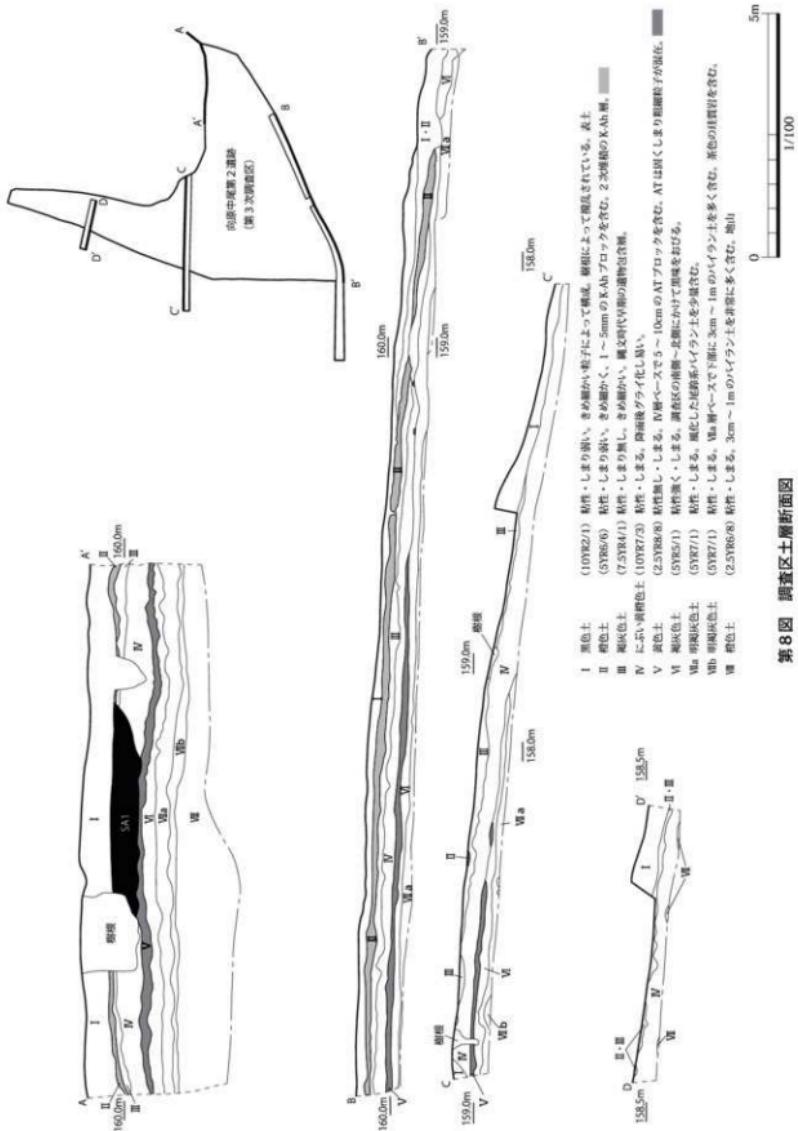
黒曜石①…乳白色および、黒灰色で線状の節理がみとめられる。1mm前後の赤い粒子を含む。（嬉島産）

黒曜石②…透過性が高く、アメ色。白色の不純物や気泡を含む。（桑ノ木津留産）

黒曜石③…黒色で透過性が低い。黄白色の不純物を多く含む。（大口日東産）

黒曜石④…透過性が高く、僅かに茶色をおびた黒色。1mm以下の黄白色の不純物を含む。（三船産）

黒曜石⑤…青みがかる黒褐色。剥離面は磨りガラス状で透過性が低い。礫面はクレーター状の凹凸をもつ。（尾立第2OX群）



第8図 調査区土層断面図

第3節 後期旧石器時代の遺物

1 分布状況

後期旧石器時代の遺物は、概ね基本層序によるIV層からVI層にかけて出土している（第9図）。出土遺物は、基本層序V層（以下A T）直下で検出された7を除き全てA T上位層からの出土となっている（第9図）。A Tは、調査区内において堆積状況に差があり、比較的平坦な部分にのみその広がりをみせるが、遺物の出土もその範囲内におよそ取まるといえる。遺物はスクレイパーや二次加工剥片などの剥片石器が出土しており、石核や敲石も含まれる。利用石材は、ホルンフェルス、頁岩、尾鈴山溶結凝灰岩、流紋岩を素材として利用しており、流紋岩を除き当跡から近隣の比較的採取しやすい石材を利用しているといえる。礫は調査区北側と、弥生時代の竪穴建物跡が検出された東側を除き確認されるが、出土状況は遺物と同じくして、調査区内の平坦部にその出土をみいだせる。しかし、礫、遺物ともに出土数が少なく、散漫な出土状況となっている。

雨天時の調査では、傾斜地のため、谷に向かっ

てかなりの土の流出があった。そのことを考慮すると、これらは本調査区の南側にやや広く展開する平坦部から流出した状況であることが考えられる。

調査はV層まで全掘した。

2 遺物（第10図、第2表、図版3）

後期旧石器時代の遺物は、スクレイパー、剥片、二次加工剥片、石核、敲石が出土した。一部、弥生時代の竪穴建物跡より出土したものも含むが、石材、形態等を考慮して、後期旧石器時代の遺物と考えられるものをここに掲載している。

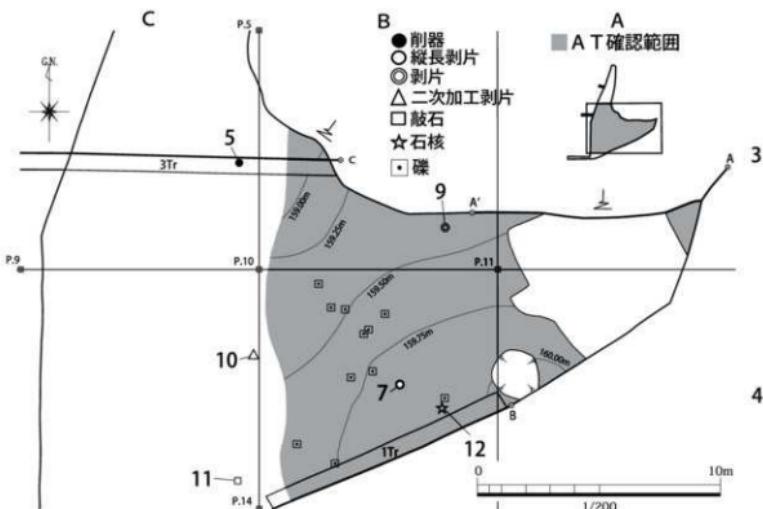
スクレイパー（第10図5・6）

5はホルンフェルス製の削器である。右側縁部に粗雑な剥離調整をおこなう。先端部及び左側縁部を欠損している。

6は比較的良質の尾鈴山溶結凝灰岩製の削器である。背面に石核から剥離される前段階の剥離面を複数残す。左側縁及び下端部に微細剥離痕を有することから削器とした。

縦長剥片（第10図7・8）

7はホルンフェルス製の縦長剥片である。背面



第9図 後期旧石器時代礫・遺物分布図

に自然面を残し連続した縦長剥片剥離作業を伺わせる。8は白色の流紋岩製の縦長剥片である。右側縁

に微細剥離痕を有する。末端部欠損。

剥片（第10図9）

9はホルンフェルス製の剥片である。打点部に自然面を残す。風化が著しい。

二次加工剥片（第10図10）

10はホルンフェルス製の二次加工剥片である。厚手の剥片を素材とし、右側縁部に粗雑な調整剥

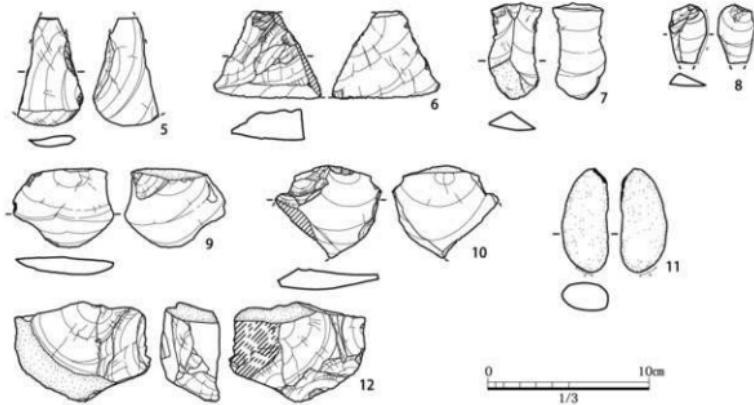
離を施す。背面左側縁には節理面が残る。

敲石（第10図11）

11は尾鈴山溶結凝灰岩製の敲石である。礫の端部に数度の敲打痕が残っている。

石核（第10図12）

12はホルンフェルス製の石核である。表裏にみられる自然面の残存状況から、拳よりやや小さい転轍を利用していっていることがわかる。剥離方向は一定でなく、打点を展開しながら剥片剥離をおこなっている。



第10図 後期旧石器時代出土遺物実測図

第2表 後期旧石器時代出土石器計測表

擇番 番号	図版 番号	出土位置 取り上げ番号	出土 層位	器種	石材	法量(cm, g)				備考
						最大長	最大幅	最大厚	重量	
5	図版 3	C-C'	IV	スクレイバー	ホルンフェルス	6.6	4.0	0.9	20.9	上部欠損
6	図版 3	T1-w 一括	IV	スクレイバー	尾鈴山溶結凝灰岩	5.4	6.5	2.2	66.3	
7	図版 3	B4-d 36	VI	縦長剥片	ホルンフェルス	5.9	3.2	1.1	17.8	AT直下
8	図版 3	SA-1 N	I	縦長剥片	流紋岩	3.6	2.3	0.8	5.6	
9	図版 3	B3-d	IV	剥片	ホルンフェルス	4.9	6.1	1.6	39.5	
10	図版 3	C4-b 14	IV	二次加工剥片	ホルンフェルス	5.7	6.5	1.7	50.0	
11	図版 3	C4-b 1	IV	敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	6.3	2.8	1.7	37.8	
12	図版 3	B4-d 16	IV	石核	ホルンフェルス	6.1	8.3	3.6	197.4	AT直上

第4節 繩文時代の遺構と遺物

1 繩文時代早期の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構は、A 4 グリッドからに B 4 グリッドにかけて集石遺構 1 基が確認された（第11図）。この集石遺構は、縄文時代早期の遺構検出面において最も標高の高い位置で検出された。また、散疎はあるものの、調査区内の比較的平坦な面でのみ散在しており、一定の集まりに欠ける。これらの散疎は、集石遺構と同様の石材であり、赤化が顕著にみられることから、元来は集石遺構の構成疎であることが想定される。

遺物は、土器のみで縄文時代のものと判断できる石器はみられなかった。出土状況としては、概ね散疎と同様な状況で出土しているものと、C 3 グリッドに一定の集まりをもって出土しているものに分けられる。前者の特徴としては、摩滅が著しく小片であり、実測、認定に耐えうる個体は無かった。後者は、多少の摩滅はしているが、一部接合関係がみてとれ、比較的残りもよく、文様も

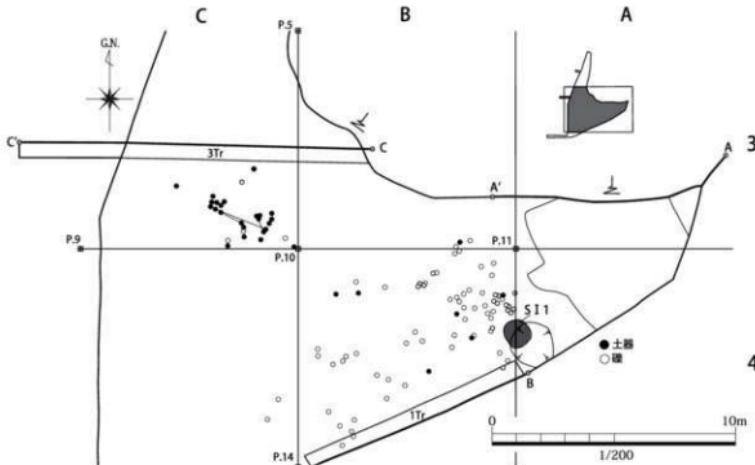
顕著であった（第13図）。

S I 1 (第12図、第3表、図版1)

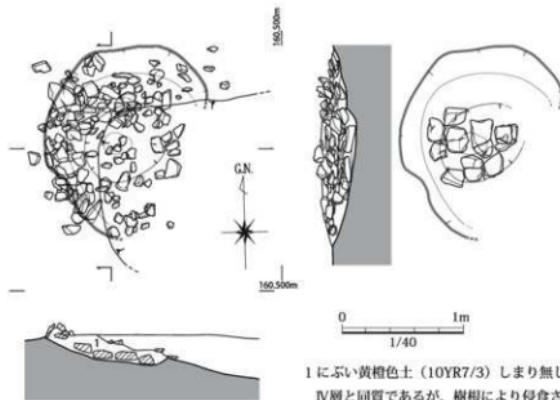
III層より A 4 グリッドから B 4 グリッドにかけて検出した。遺構の上部は、風倒木の横転による攪乱を受けていたが、攪乱の深度が下部構造にまで至っていないかったため、配石は残存していた。やや不定形であるが梢円形のプランであり、明確な掘り込みと配石を有する。構成疎は全てが尾鈴山溶結凝灰岩であり、赤化していた。

土器 (第13図13~19、第4表、図版3)

13~16は外面に梢円押型文を施し、内面は丁寧なナデ調整を施している。これらは接合しないものの、胎土、焼成、調整の諸要素により同一固体の可能性がある。16~19は口縁部である。16~18は内面に長大化した斜位の原体条痕を施している。



第11図 縄文時代早期疎・遺物分布図

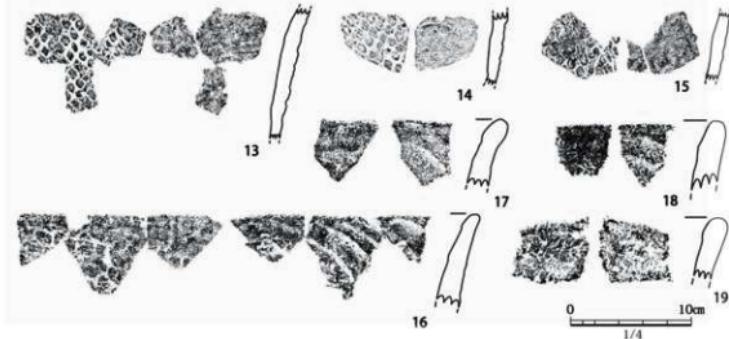


1にぶい黄橙色土(10YR7/3)しまり無し。基本層序
IV層と同質であるが、樹根により侵食されている。

第12図 S11実測図

第3表 繩文時代早期集石造構一覧表

造構名	検出位置	図版番号	礫範囲(m)		掘り込み(m)			配石	備考
			長軸	短軸	長軸	短軸	深さ		
S11	A4～B4	図版1	1.30+α	1.35+α	1.35+α	1.10+α	0.25	複数	造構上部は風倒木によって削平。



第13図 繩文時代早期出土遺物実測図

第4表 繩文時代早期土器観察表

擇回番号	図版番号	出土位置	出土取り上げ番号	出土層位	器種	法量(cm)	文様・調整等			胎土	備考	
							外面	内面	外面	内面		
13	図版3	C3-d	20+31	II+III	深鉢	—	楕円押型文	ナデ	相	7.5YR6/6	相	3mm以下の灰白、褐色、黒色粒を含む 黒色、透明の光沢粒を含む
14	図版3	C3-d	2	III	深鉢	—	楕円押型文	ナデ	相	7.5YR6/6	相	5mm以下の灰白、黒、褐色粒を含む 2mm以下の透明、黒色粒を含む
15	図版3	C3-d	32+25	III	深鉢	—	楕円押型文	ナデ	相	5YR6/6	相	3mm以下の灰白、褐色、黒色粒を含む 微細な透明の光沢粒を含む
16	図版3	C3-d	24+28	III	深鉢	—	楕円押型文	裏方向の沈線	相	5YR6/6	相	2mm以下の灰白、褐色、黒色粒を含む 2mm程度の透明、黒色の光沢粒を含む
17	図版3	C3-d	II	深鉢	—	ナデ	裏方向の沈線	相	10YR6/4	相	2mm以下の黒色粒を含む	
18	図版3	C3-d	19	III	深鉢	—	ナデ	ナデ	相	7.5YR7/6	相	2mm以下の灰白、褐色粒、 黒色の光沢粒を多く含む
19	図版3	C3-d	23	III	深鉢	—	裏方向の貝殻壓縞文か	ナデ	相	7.5YR6/6	相	2mm以下の灰白、褐色粒を含む 微細な黒色、透明の光沢粒を含む

第5節 弥生時代以降の遺構と遺物

1 竪穴建物跡と出土遺物

弥生時代以降の遺構は、A 3 グリッドから A 4 グリッドにかけて、竪穴建物跡を 1 軒検出した（第 14 図）。竪穴建物跡は、第 2 次調査において II 層上面より大小合わせて 7 軒ほど確認されており、同丘陵尾根上に設定された本調査においてもその存在を容易に想定できた。本調査で確認できた竪穴建物跡（S A 1）は、弥生時代以降の遺構検出面である II 層上面において最も標高の高い位置で検出した。遺構からは南北に第 2 次調査区を含む丘陵尾根を望み、東に日向灘及びその沿岸部、西に谷を挟み向原中尾遺跡群の立地する丘陵を一望することができる。

S A 1（第 15 図、第 5 表、図版 1・2）

位置 調査区東端である A 3 から A 4 グリッドにまたがり検出した。他遺構との切り合い関係はない。

規模 S A 1 北側は、第 2 次調査区と本調査区を南北に分かつ市道建設時に削平を受けていた。また南側は調査区外となっているので全容は確認できないものの、その大部分を精査することができた。長軸 5.8m × 短軸 5.6m + α を測る方形プランを呈し主軸を北東に位置する。確認できた総床面積は、32.48m²である。

床面 遺構検出面から床面までの深度は約 20cm を測る。掘り方は地形の傾斜に沿ってやや斜位になっているが、床面はほぼ平坦に貼床が施され床面上部はしまっている。掘り方が V 層下位まで掘り込まれているため、貼床土には検出面である II 層（K-A h）と、V 層（A T）のブロックを非常に多く含んでいた。やや南よりではあるが、中央部には長軸円形の浅い落ち込みが確認できた。壁帶溝は確認できなかった。

柱穴 主柱穴は 8 本確認された。四方に 2 本ずつ柱穴が確認されているが、住居の規模に比して 1 本の直径は約 15~20cm 程度と小さい。柱穴の深さにはそれぞれ浅いものと深いものとが認められるが、検出面の高さや埋土状況などから時期差は見出せず、2 本 1 組で計 4 本の主柱穴であるといえる。

屋内土坑 屋内土坑は 2 基確認できた。いずれも遺構の中央より若干東側に位置しており、主柱穴と同程度の間隔で向かい合っている。屋内土坑 1（P 1）周辺では、検出以前から焼土が確認できており、炭化物を多量に含む黒色土によってパックされていた。また、焼土は P 1 東側に特に良好な状況で確認されており、赤く、非常に硬くなっていた。まるで焼土を搔き出したかのような状況であった。P 1 の形状は長軸約 0.5m × 短軸約 0.4m の不定形なプランをしており、約 0.15m の掘り込みであった。後述するが、P 1 東側からはモモの炭化核が出土しており、放射性炭素年代測定の結果 1770 ± 20 年 BP という年代値があたえられている。その他にもアワの炭化種実、マタタビ属等の種実なども出土しているため、食性に関わる遺構である可能性が高い。

屋内土坑 2（以後 P 2）は長軸約 0.6m × 短軸約 0.58m の円形プランを呈する。深さは約 0.2m の掘り込みで、VI 層まで掘り込んでいるため VI 層に包含されている礫が露出している。形状、位置関係、掘り込みの程度を考慮すると P 1 と同様に考えられるが、焼土、炭化物などは確認できず、露出している礫に赤化等の変化は認められなかつた。

炭化材 遺構の西側及び東側で炭化材を検出した。遺構西側の炭化材（C 1）は、床面直上にて検出した。長軸 30cm 程度の固体ながら残存状況が良かったため、放射性炭素年代測定及び樹種同定をおこなったところ、1740 ± 20 年 BP という年代があたえられている。樹種はシイ属である。C 1 北側には焼土がみられ、細かな炭化物も多く確認できた。

遺構東側の炭化材（C 2）は、P 1 上部にみられる焼土の上部より出土した。小片ながら残存状況が良く放射性炭素年代測定及び樹種同定をおこなったところ、1705 ± 20 年 BP という年代があたえられている。樹種はシイ属である。

【S A 1 出土遺物】（第 16、17 図 20~38、41、42

第 6、7 表、図版 1・2）

甕（第 16 図 20~27、29）

20 は口縁部～底部にあたる。外面は口縁部に横

方向のナデを施し、頸部には工具痕がみられる。胴部～底部にかけて工具痕がみられ、底部にいくにつれて丁寧な調整となる。内面は口縁部に横方向のナデを施している。外面口縁部～胴部中央付近および内面胴部～底部にかけて煤が付着している。21は口縁部～胴部にある。内外面とも、口縁部には横方向のナデと縦方向の工具痕が残る。胴部外面にはミガキを施し、頸部付近～胴部中央には縦方向、胴部中央以下は横方向のミガキを施している。22～24は口縁部にある。いずれも外反し直線的に立ち上がり、横方向のナデ調整を施し、指頭圧痕が残る。25は胴部にある。外面には不定方向のタタキを施し、ところどころに指頭圧痕がのこる。26～27は底部にある。いずれも縦方向のナデ調整を施している。外面には煤が付着している。

壺(第16図28、30、31)

28は複合口縁壺である。口縁部に櫛描波状文を施しており、内面の整形が不均一である。28は胴部外面に縦方向のハケ調整を施している。30は胴部にある。底部外面付近に指頭圧痕がみられるが、それ以外の調整は摩滅しているため判断できない。31は頸部にある。外面には、ハの字を横位に刻んだ貼付突帯を施している。

鉢(第16図32～36)

32はほぼ完形の鉢である。外面は縦もしくは斜

方向の工具ナデ調整を施し、内面は不定方向のナデ調整によって整形されている。底部には一部煤が付着している。33は口縁部～底部付近にある。32、33ともに内外面ともナデ調整は粗雑で、粘土のつなぎ目が多く見られる。34は口縁部～底部にあたる。手づくねにより整形されているが、風化しているため、細かな調整は不明瞭である。35は胴部、36は口縁部にある。いずれも外面は斜め方向の粗いナデ調整を施している。

高杯(第17図37～38)

37は杯部にある。内外面とも摩滅が著しく調整は不明瞭である。38は裾部にある。内外面ともに丁寧なナデ調整を施している。

石器(第17図41、42)

41は尾鈴山溶結凝灰岩製の磨石である。表裏に広く磨面が残存し、中央、端部に敲打痕が確認できる。

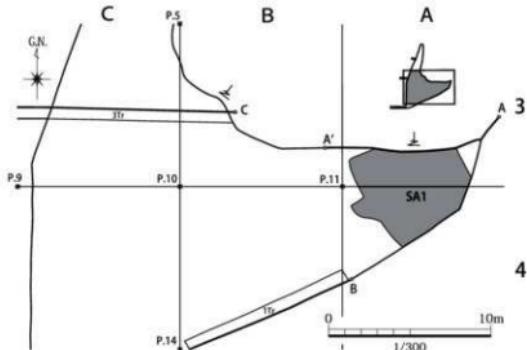
42は尾鈴山溶結凝灰岩製の台石である。

【その他の遺物】(第17図39、40、第8表、図版1)

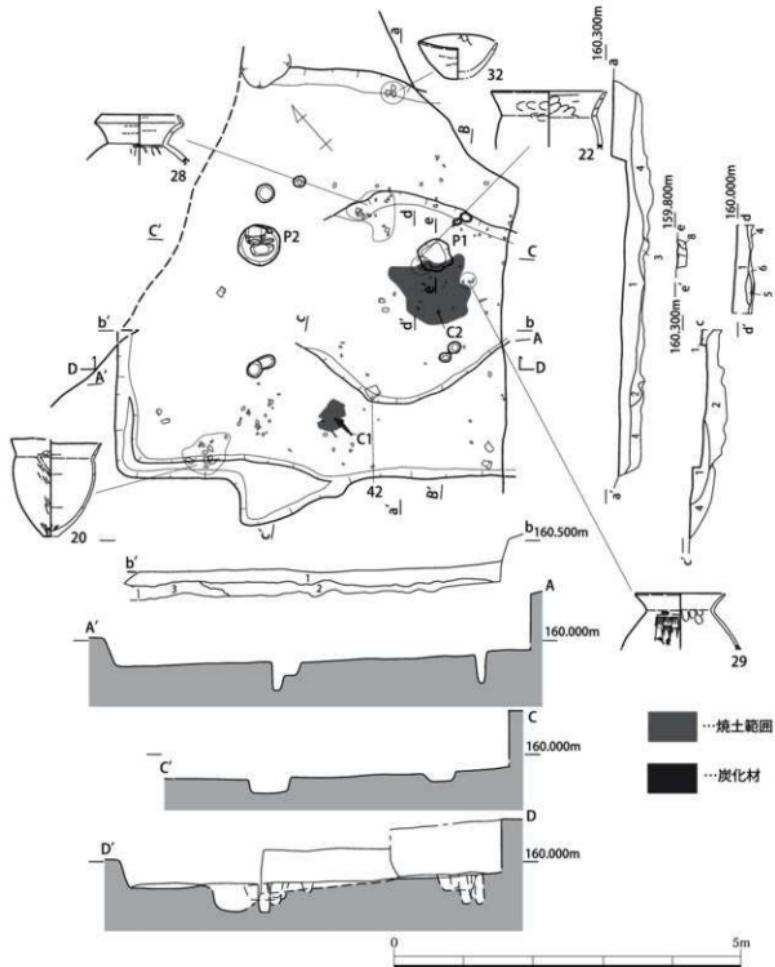
向原中尾第2遺跡では、表土および攪乱より石器が出土している。

石器(第17図39、40)

39は桑ノ木津留産黒曜石製の剥片である。打点部を欠損している。40は尾鈴山溶結凝灰岩製の剥片である。



第14図 弥生時代遺構分布図



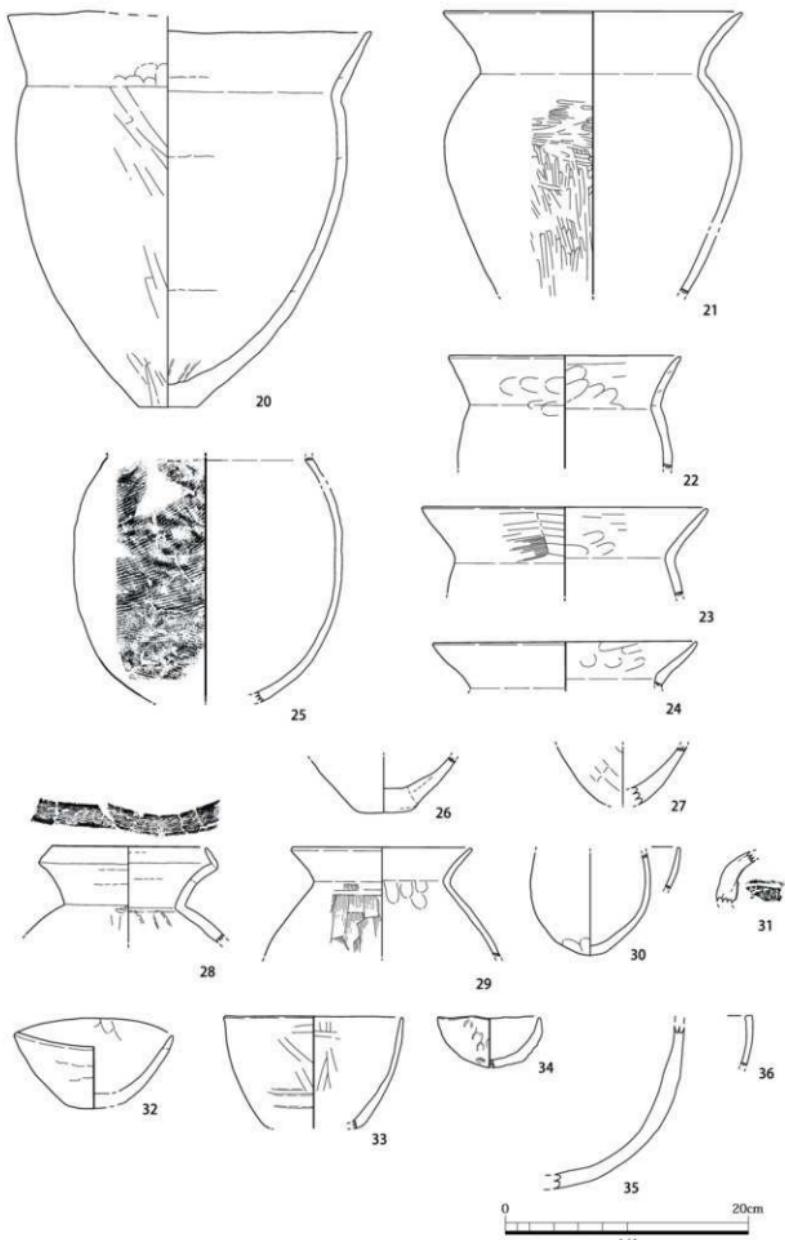
- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性。しまり無し。K-Ah と AT がブロック状に入る。埋土
- 2 褐色土 (10YR4/6) 粘性弱い。1より K-Ah と AT のブロックが多い。貼床
- 3 黒褐色土 (7.5YR2/2) 明褐色土のブロックが少量混じる。5・6の凝ったものか。
- 4 褐色粘質土 (10YR4/6) 2 ~ 4cm 大の AT ブロックと 5cm 大の K-Ah ブロックが混ざる。貼床
- 5 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 粘性あり固くしまる。焼土層
- 6 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性弱い、ややしまる。
- 7 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性無し、しまり弱い。明褐色土ブロックが少量混じる。3 層と同一か。
- 8 黒色土 (7.5YR2/1) 粘性無し、しまり弱い。褐色粘質土が混じる。4・6 層が混じったものか。

第 15 図 S A 1 実測図

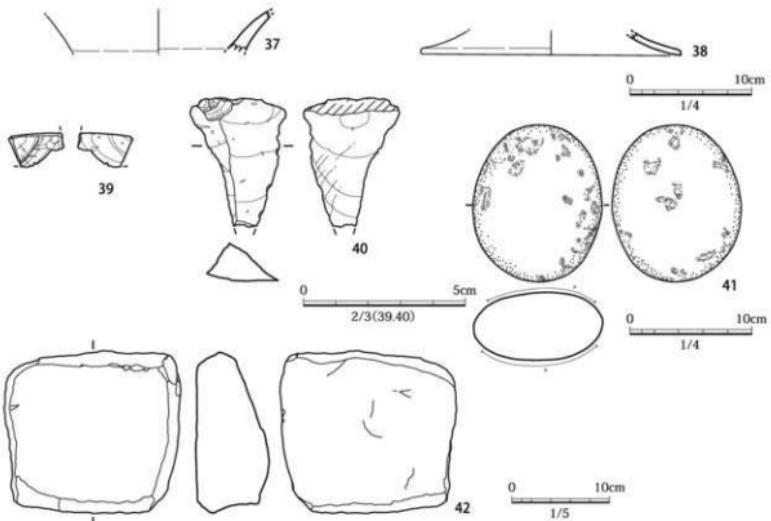
第 5 表 弥生時代遺構一覧表

遺構名	検出位置	図版番号	豊穴部			炭化材	貼床	年代測定	備考	
			プラン	長軸(m)	短軸(m)					
S A 1	A3 ~ A4	図版 1・2	方形	5.70	5.50	0.3	○	○	1770 ~ 1705 ± 20 BP	遺構北側は削平。南側は調査区分。

※年代測定の結果は 1950 年を基点として何年前かを示す（詳細は第 II 章第 6 節 1 に記載）



第16図 SAI 1出土遺物実測図 (1)



第17図 SA 1出土遺物実測図(2)およびその他の遺物実測図

第6表 SA 1出土土器観察表

測定番号	測定番号	出土位置	出土層位	器種	部位	法線(cm)	文様・調査等		色調	胎土	備考
							外側	内面			
20	測定3	SA 1	sondage 1 底	壺	口→底	口(24.6)	[横・斜め方]のナデ 直線ミガキ	[横・斜め方]のナデ 直線ミガキ	黄褐色 (10YR7/4) (10YR7/4)	2m以下の黒、白、灰、褐色を含む	内灰化物付着
21	測定3	SA 1	床+床上	壺	口→側	口(24.6)	[横・斜め方]の工具ナデ、範囲方向の工具ナデ 範囲方向のナデ、範囲方向のミガキ	範囲方向のナデ	黄褐色 (10YR7/4) (10YR7/4)	2m以下の灰、白、褐色を含む	外灰付着
22	測定4	SA 1	床	壺	口→側	口(18.9)	[横・斜め方]の工具ナデ、範囲方向の工具ナデ 範囲方向のナデ	[横・斜め方]のナデ、範囲方向の工具ナデ 範囲方向のナデ	黄褐色 (10YR7/4) (10YR7/4)	2m以下の灰、白、褐色を含む	外灰付着
23	測定4	SA 1	床	壺	口→側	口(21.6)	[横・斜め方]の工具ナデ 範囲方向の工具ナデ	[横・斜め方]のナデ、範囲方向の工具ナデ 範囲方向のナデ	黄褐色 (10YR7/4) (10YR7/4)	2m以下の灰、白、褐色を含む	外灰付着
24	測定4	—	口	口	口(21.6)	瓶口向の工具ナデ	瓶口向のナデ、直線ミガキ 直線方向のナデ	黄褐色 (10YR7/4) (10YR7/4)	3m以下の灰、白、褐色を含む 直線方向、直線ミガキ	外灰付着	
25	測定3	SA 1	墓+底上	壺	肩→側	—	範囲不方向のタタキ、直線面	範囲方向のナデ	黑 (5YR7/4) (5YR8/4)	5m以下の灰、白、褐色を多く含む	外灰付着 内灰化物付着
26	測定4	SA 1	墓+室内	壺	正	正(3.4)	瓶口向のナデ	ナデ	灰 (7.5YR8/4)	4m以下の灰、白、褐色を多く含む	外灰付着
27	測定4	SA 1	墓	壺	壺	—	—	範囲方向のナデ	灰 (7.5YR7/4)	2m以下の灰、白、褐色を含む	外灰付着
28	測定4	SA 1	墓+床上	壺	口→底	口(12.7)	[横・斜め直線状況、範囲方向のナデ]	[横・斜め直線状況、範囲方向のナデ] 直線曲面直面	灰 (7.5YR8/4) (7.5YR8/4)	1m以下の灰、白、褐色を多く含む	墓内直面
29	測定4	SA 1	墓	壺	口→側	口(14.6)	[横・斜め直線状況]のナデ 範囲直線向の[横・斜め直線状況]のナデ	[横・斜め直線状況]のナデ 範囲直線向の[横・斜め直線状況]のナデ	黄 (7.5YR7/4) (7.5YR7/4)	2m以下の灰、白、褐色を含む	外灰付着
30	測定4	SA 1	墓+床上	壺	肩→底	—	直線折曲直面	直線ナデ	黄褐色 (7.5YR8/4) (7.5YR8/4)	3m以下の灰、白、褐色を多く含む	
31	測定4	—	2M	壺	壺	—	範囲直線向のナデ	範囲方向のナデ	灰 (7.5YR7/4)	4m以下の灰、白、褐色を多く含む	
32	測定4	SA 1	床上	壺	口→底	口(13.0)	[横・斜め直線状況]のナデ 直線折曲向のナデ	[横・斜め直線状況]のナデ 直線折曲向のナデ	灰 (7.5YR8/4) (7.5YR8/4)	5m以下の灰、白、褐色を多く含む	ほぼ完成
33	測定4	SA 1	墓+底上	壺	口→側	口(14.6)	範囲直線向のナデ	範囲工具ナデ	灰 (5YR8/4) (5YR8/4)	2m以下の灰、白、褐色を含む	外灰付着
34	測定4	SA 1	墓	壺	口→底	口(3.4)	ナデ	ナデ	灰 (10YR8/4) (10YR8/4)	2m以下の灰、白、褐色を含む	ドブくぬ
35	測定4	SA 1	墓	壺	壺	—	不定方向のナデ	異常面 (5YR5/4)	1m以下の白、灰、褐色、白色を含む		
36	測定4	SA 1	床上	壺	口	—	範囲方向のナデ	範囲方向のナデ	灰 (10YR7/4)	1m以下の白、灰、褐色、白色を含む	内灰付着
37	測定4	SA 1	墓+室内	高床	壺	—	範囲不明	調査不明	灰 (5YR8/4)	2m以下の灰、白、褐色、白色を含む	内外灰付着
38	測定4	SA 1	墓	高床	壺	墓(3.6)	瓶口向のナデ	瓶口向のナデ	灰 (7.5YR8/4) (7.5YR8/4)	2m以下の灰、白、褐色を含む 直線折曲、直線ミガキ	

第7表 SA 1出土石器計測表

測定番号	測定番号	出土位置	出土層位	器種	石材	法線(cm. g)			
						最大長	最大幅	最大厚	重量
41	測定3	SA 1	I	砕石	龍崎山地縞状岩	14.1	11.7	6.2	14.6
42	測定3	SA 1 Wb 中位 S	—	台石	龍崎山地縞状岩	18.4	19.9	8.3	4800.0

第8表 弥生時代以降の石器計測表

測定番号	測定番号	出土位置	出土層位	器種	石材	法線(cm. g)			
						最大長	最大幅	最大厚	重量
39	測定3	カクラン	—	片	丹波石	1.2	1.8	0.5	0.7
40	測定3	カクラン	—	片	丹波山地縞状岩	4.4	3.2	1.9	12.9

第6節 自然科学分析の結果

向原中尾第2遺跡(第3次調査)では、放射性炭素年代測定、樹種・種実同定を実施した。

放射性炭素年代測定は、竪穴建物跡(SA1)の床面から出土した炭化材、床面直上の焼土から出土した炭化核(モモ)を試料とし、炭化材・炭化種実の年代及び、遺構の時期決定の参考にする目的で実施した。樹種同定は、放射性炭素年代測定に使用した炭化材を試料とし、建物構造材や木材利用状況を明らかにし、近隣森林の植生を推定するという目的で実施した。種実同定は、竪穴建物跡(SA1)の床土・焼土のフローテーション作業を実施し、得られた種実を試料とし、当時の遺跡周辺の植生を復元すると共に、当時の植物利用の実態を推察する目的で実施した。

放射性炭素年代測定、樹種・種実同定は㈱古環境研究所に委託した。各分析の方法や結果の詳細については下記に掲載した。

1 放射性炭素年代測定

(1) 試料

放射性炭素年代測定の試料は、竪穴建物跡(SA1)の床面から出土した炭化材2点と、床面直上の焼土内から出土した炭化核(モモ)1点の計3点である(第9表)。

試料No.	地点・層準
No.1	SA1 焼土出土の炭化核(モモ)
No.2	SA1 床面出土の炭化材(C1)
No.3	SA1 床面出土の炭化材(C2)

第9表 放射性炭素年代測定試料一覧表

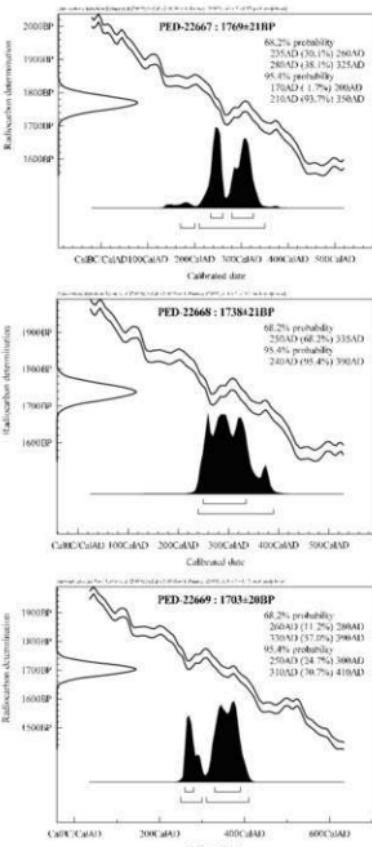
(2) 方法

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法で、樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前まで年代測定が可能である。各試料を超音波洗浄後に、酸-アルカリ-酸処理の後、AMS(Accelerator Mass Spectrometry)加速器質量分析法により年代を測定し、曆年較正した。

(3) 測定結果

加速器質量分析法(AMS)によって得られた放射性炭素濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(^{14}C)年代および曆年年代(較正年代)を算出した。第10表にこれらの結果を示す。

なお、曆年年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal09、較正プログラムはOxCal 3.1である。



第18図 曆年較正曲線図

第10表 放射性炭素年代測定結果

試料 番号	測定番号 PDS	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) ± σ	樹年齢正用 年代(標準誤差)	${}^{\text{C}}\text{年代}$ (年齢) $\pm \sigma$	樹年齢(標準正用代)	
					1 (DB-2標準)	2 (DB-1標準)
1	22667	-27.24 ± 0.23	1769 ± 21	1770 ± 20	AD235-260(30.1%)	AD170-200(1.7%)
2	22668	-29.08 ± 0.24	1738 ± 21	1740 ± 20	AD250-335(68.2%)	AD240-390(95.4%)
3	22669	-26.20 ± 0.25	1703 ± 20	1705 ± 20	AD260-280(11.2%)	AD250-300(24.7%)

*デルタ δ と測定値とは、試料の測定 ${}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 (${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$) のことである。

測定誤差(二乗)は 5730 年であるが、国際的情報により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差(二乗)は 1.0 (0.8%確率) である。なお、下 1 表を示す年代校正用年代表も併記した。

*樹年齢(標準年代)は、 ${}^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の範囲の範囲を較正曲線に投影した樹年の範囲で表し、OxCal の確率法により 1 シグマ σ (68.2%確率) と 2 σ (95.4%確率) を示した。

(4) 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 の炭化核 (モモ) では 1770 ± 20 年 BP (2 σ の樹年齢で AD 170~200, 210~350 年)、No.2 の炭化材では 1740 ± 20 年 BP (AD 240 ~390)、No.3 の炭化材では 1705 ± 20 年 BP (AD 250~300, 310~410) の年代値が得られた。

2 樹種同定

(1) 試料

試料は、堅穴建物跡 (S A 1) の床面から出土した炭化材 2 点である (第11表)。

(2) 方法

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。同定方法は、試料を割折して新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柾目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本的三断面を作製し、落射顕微鏡 (40~1000 倍) で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3) 結果

同定結果を第11表と第19図に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

第11表 炭化材同定結果

分析番号	選構番号	出土位置	結果 (学名/和名)
19	SA 1	WC 1	<i>Castanopsis</i> シイ属
20	SA 1	EC 2	<i>Castanopsis</i> シイ属

シイ属 (*Castanopsis*) ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疊に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型のものが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州 (福島県・新潟県佐渡以南)、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 20m、径 1.5m に達する。材は耐朽、保存性がやや低く、建築、器具などに用いられる。

(4) 所見

樹種同定の結果、シイ属 2 点が同定された。シイ属は、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素であり、二次林も形成する。当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。



1. 分析番号 19 SA1 WC2 シイ属
横断面 : 0.4 mm 異断面 : 0.2 mm 接線断面 : 0.2 mm



1. 分析番号 19 SA1 EC2 シイ属
横断面 : 0.4 mm 放射断面 : 0.2 mm 接線断面 : 0.2 mm

第19図 S A 1 出土の炭化材

3 種実同定

(1) 試料

試料は、堅穴建物跡 (S A 1) の床土・焼土のフローテーション作業を実施し、得られた炭化種実である。

(2) 方法

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。遺構埋土や堆積物などから種実を検出し、その種類や

構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができます。同定方法は、種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した(第12表)。

(3) 測定結果

種実同定の結果、樹木4、草本1の計5分類群が同定された。同定結果を第20図に示し、以下に同定根拠となる形態的特徴およびサイズを記載する。

〔樹木〕

モモ (*Prunus persica* Batsch) 炭化核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

アカメガシワ (*Mallotus japonicas* Muell. Et Arg.) 炭化種子 トウダイグサ科

黒色で球形を呈し、「Y」字状のへそがある。表面にはいぼ状の突起が密に分布する。

マタタビ属 (*Actinidia*) 炭化種子 マタタビ科

長さ×幅: 1.61×1.01mm

暗褐色ないしやや紫色を帯びる茶褐色で、梢円形を呈す。断面は両凸レンズ形、表面には穴が規則的に分布する。種皮はやや厚く堅い。

ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunb.) 炭化種子 ツバキ科

長さ×幅: 3.19mm×2.60mm

茶褐色で卵形を呈し、先端がとがる。腹面には二つの孔があり、背面には先端が梢円形のへそがある。

〔草本〕

アワ (*Setaria italic Beauv.*) 炭化果実 イネ科

長さ×幅: 1.45×1.48mm, 1.61×1.62mm

炭化しているため黒色で楕円形を呈す。胚の部分がくぼむ。

その他 炭化材片、不明炭化物

第12表 種実同定結果

分析番号	出土位置	分類群		部位	備考
		学名	和名		
1	N-c	<i>Eurya japonica</i> Thunb. Charcoal fragment	ヒサカキ 炭化物片	炭化種子	1 67
2	N-c	Charcoal fragment	炭化物片		10
3	N-d	Charcoal fragment	炭化物片		20
4	W-a	<i>Mallotus japonicus</i> Muell. et Arg. Charcoal fragment	アカメガシワ 炭化物片	炭化種子(破片)	1 32
5	S-b	Charcoal fragment	炭化物片		20
6	S-b	<i>Eurya japonica</i> Thunb. Charcoal fragment	ヒサカキ 炭化物片	炭化種子	1 94
7	S-b	<i>Eurya japonica</i> Thunb.	ヒサカキ	炭化種子 (破片)	4 2
8	S-d	<i>Eurya japonica</i> Thunb. Charcoal fragment	ヒサカキ 炭化物片	炭化種子	5 20
9	S-d	Charcoal fragment	炭化物片		4
10	E-c	Charcoal fragment	炭化物片		138
11	E-c	Charcoal fragment	炭化物片		23
12	E-c	Charcoal fragment	炭化物片		5
13	N 燃土中	Charcoal fragment	炭化物片		3
14	W 燃土中	Charcoal fragments	炭化物片		11
15	E 燃土中	<i>Setaria italic Beauv.</i> Charcoal fragment	アワ 炭化物片	炭化果実	2 14
16	E 燃土中	Charcoal fragment	炭化物片		10
17	E 燃土中	<i>Actinidia</i> Unknown seed	マタタビ属 不明種実	炭化種子 炭化種実(破片)	1 1
18	E 燃土中	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	炭化核(破片)	2

(4) 所見

種実同定の結果、S A 1 の床土からヒサカキ、アカメガシワが同定された。また、S A 1 の東側焼土からアワ、マタタビ属、モモが同定された。

栽培植物としてはアワとモモがあり、マタタビ

属は果実が食用になる。ヒサカキは照葉樹林の中低木ないし二次林要素、アカメガシワは二次林要素であり、マタタビ属は林縁に多い。なお、多く認められた炭化物片（種実以外）については、人の活動による遺存物の可能性が考えられる。



第 20 図 S A 1 出土の炭化種子

参考文献

1 放射性炭素年代測定

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, p.355-363.
- Paula J Reimer et al., (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と曆年代較正, 環境考古学マニュアル, 同成社, p.301-322.

2 樹種同定

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造, 文永堂出版, 290p.

島地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, 296p.

山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集 成一用材から見た人間・植物関係史, 植生史研究特別 1 号, 植生史研究会, 242p.

3 種実同定

- 笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 義賛堂, 494p.
- 笠原安夫 (1988) 作物および田畠雑草種類, 弥生文化の研究 第2巻生業, 雄山閣出版, p.131-139.
- 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種, 月刊考古学ジャーナル No.409, ニューサイエンス社, p.15-19.
- 吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出, 月刊考古学ジャーナル No.355, ニューサイエンス社, p.2-14.
- 南木睦彦 (1993) 葉・果実・種子, 日本第四紀学会編 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

第7節 小結

向原中尾第2遺跡における第3次調査（以下第3次調査）では、後期旧石器時代から弥生時代終末期以降の遺構・遺物が確認された。本節では、第3次調査における各時代の様相について述べていきたい。

1 後期旧石器時代

遺物の分布 第3次調査区では、AT直下およびAT上位において石器や礫が散漫な状態で出土した（第9図）。ATの堆積は、平坦部では比較的良好な状態で確認され、今後の調査に層位的指標をもたらすものであった。出土礫は、調査区の頂部付近での出土がみられるが礫群等の遺構は確認できず、石器の分布にはまとまりが欠ける。このような状況は、第2次調査でも認められ、遺構ではないものの礫の集中分布域は標高の高い平坦面であったとしている。また、傾斜地に調査区が設定されているため、遺物包含層の形成がままならない状況であったことから、これらは遺跡の所在する丘陵尾根の頂部付近、或いは比較的平坦な部分より流出したものと考えられる。以上のことから、分布の中心は、第2次調査区を含む丘陵尾根上でも北側、および南側に展開していることが想定され、第2・第3次調査では遺跡の一端を見出したに過ぎない状況であったといえる。

石器について 第3次調査において確認された器種は、スクレイパー、縦長剥片、石核、敲石が挙げられるが、接合関係は無く、それぞれが独立した状況での出土となった。石核は自然面を有しており、遺跡に持ち込まれた礫は拳大程度の転礫だと考えられる。剥片は比較的良好なものだといえるが、碎片や石器製作に伴って作出される剥片などは無く、当遺跡で石器製作が行われた痕跡は見出せなかった。

石材は頁岩やホルンフェルスなどの近隣で採取可能な石材が主体であり、一点のみ、県北で産出する白色の流紋岩製の剥片が確認できた。遺物の出土数が極めて少量であるにもかかわらず、第2次調査と石材組成は変わらない状況であった。加えて後期旧石器時代に比定し得る層位（基本層序

IV～VI層）より出土した礫は、全て尾鈴山溶結凝灰岩であった。

2 繩文時代早期

遺構と遺物の分布 第3次調査では調査区の頂部付近で集石遺構1基（以後S I 1）が確認できた。礫の出土も概ね調査区の頂部付近にかけて散見され、標高の低下とともに減少する（第11図）。出土した礫は被熱を受けて赤化したと思われる礫も多く、元来は集石遺構を構築した礫であったことが考えられるが、明確なまとまりはなく、地形の傾斜によって流出した礫であるといえる。地形の傾斜はAT上位の堆積層とほぼ変わらないため、同様な傾斜を保持していたことが想定されるが、II層以降の堆積は二次堆積ないしはそれに近く、現状地形のみでしか想定することができない状況であった。遺物の分布状況は、遺構、礫とは多少異なった状況であるといえる。遺構や礫の分布に伴って出土している土器は、状況を同じくして散漫で、実測図に耐え得ない程度減しているが、一部そこから離れ、接合関係をもつ土器の出土がみられた。これらは、摩滅しているものの、上述した土器程ではなく、明瞭な調整が認められる。これらの周辺には礫、遺物とも殆ど出土しておらず、遺物の単独性が際立つ。また、胎土も非常に似通っており、同一固体、或いは同様の土でもって製作された土器であることが考えられる。そのため、発掘調査中、その出土状況から遺構の存在を想定したが、明確なプランや掘り込みはなく、加えて土器自体が摩滅していることもあります、遺構としては考えにくいといえる。

土器と遺構の時期 S I 1は、風削木痕により上部構造の南東部を大きく攪乱しているものの、明確な掘り込みと配石を有していた。プランの平面形は不定形ではあるが円形で、遺構上部にみられる集石の範囲は掘り込みよりも狭小である。埋土は單一層になっており、礫の隙間に土が入り込むかたちで堆積していた。また、配石は人頭大の比較的扁平な礫を用い、掘り込みのプランに沿うかたちで配置されていた。集石の位置や單一の堆積層であること、配石の改変がみられないこと

から、作り替えは行わず、使用後はそのまま廃棄されたものであるといえる。集石、配石とともに石材は尾鈴山溶結凝灰岩で構成されており、近隣において採取しやすい石材に傾倒する。近隣の河川等にみられる転砾には、砂岩やホルンフェルスもみられるが、これらは剥片或いは砾石器素材としての利用傾向が強く、集石には構成地盤等から容易に調達できる石材を選択している。なお、集石遺構に伴う砾は全て尾鈴山溶結凝灰岩であり赤化していた。しかし、遺物や炭化物の確認はできなかったため、帰属時期は層位によっての位置づけとなる。検出はⅢ層上部において上部集石を検出し、掘り込みがⅣ層まで及んでいることから少なくとも縄文早期段階の遺構であると考えられる。

土器はいわゆる田村式土器に比定され、縄文時代早期前葉に位置づけられることから、第3次調査にみられる縄文早期段階の遺物、遺構は当段階に帰属させることにする。

3 弥生時代終末期以降

弥生時代終末期以降の遺構と分布 第3次調査では調査区の南東端付近において竪穴建物跡を1軒確認した(第14図)。竪穴建物跡は第2次調査において7軒確認されていたため、本調査においても検出されることは以前より想定していた。これまで確認された竪穴建物跡は一辺3~4m程度で明確な主柱穴をもたない焼失建物であるのに対し、本調査において確認された竪穴建物跡は長、短軸とともに5mを超え、明確な主柱穴を有する。また屋内土坑も確認されており、埋土からはモモの炭化核が検出され、放射性炭素年代測定の結果 1770 ± 20 年BPという年代値があたえられている。これらの竪穴建物跡は、第2・3次調査の成果をふまると、遺跡の所在する丘陵尾根の頂部付近に建てられており、傾斜に伴って減少していくことが想定される。

遺物 当該期の遺物は全てSA1より出土しており、台石、磨石のほかに甕、壺、鉢、高环類があげられる。

甕は、20の様に「く」の字形に緩く屈曲する口

縁部に平底の底部がつく形態が主体であり、底部の設置面はやや小さくなりつつある。また、25の1点のみ、外面にタタキ調整を施すものがある。前述したいずれも、周辺遺跡にみられる在地系の胎土により製作されているが、29のみ胎土が異なる。29は内面にケズリがみられないものの、器形や、ハケ調整、内面には非常に丁寧なナデ調整を施し、器壁もやや薄手であることから、いわゆる布留系の土器であることが考えられる。

壺は複合口縁タイプが出土している。28はいわゆる安国寺式系譜の壺だが、1次口縁部と2次口縁部の接合部は突出しておらず、滑らかに内反し短く立ち上がる。31の頸部に刻み目突帯を貼り付けるものもこれに含まれる。

鉢は4点ないし5点確認されている。35・36を除き、いずれも小型で底部から口縁部にむかい緩やかに外反しながら立ち上がる。内、外面に粗雑な工具調整を施している。36は若干口縁部が内湾している。これらの鉢は第2次調査や木戸平第2遺跡でも確認されているが、当該期にみられるような小型丸底壺は確認できなかった。

以上のことをふまえ、第3次調査における竪穴建物跡は、日向市所在板平遺跡の土器編年(松田・今塩屋2011)でいうところのI期b段階~II期a段階ないしII期a段階あたりに位置づけられるようか。

【参考・引用参考文献】

- 宮崎県埋蔵文化財センター2011「第Ⅶ章総括」「板平遺跡(第3・4次調査)」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第199集
宮崎県埋蔵文化財センター2011「依石第1遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第200集
宮崎県埋蔵文化財センター2012「向原中尾第1・2道路向原中尾第4遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第213集
宮崎県埋蔵文化財センター2012「木戸平第2遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第215集
宮崎県埋蔵文化財センター2012「依石第1遺跡 依石第2遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」第216集

第三章 向原中尾第5遺跡第1地点

第1節 発掘調査の概要と経過

1 遺跡周辺の環境と調査の経過

向原中尾第5遺跡は、平成20～22年度にかけて調査を行った向原中尾第4遺跡の南東側（第1地点）および西側（第2地点）に位置し、心見川支流の征矢原川を挟む対岸には弥生時代後期の集落跡が確認された長野遺跡が立地している。（第3・26図）

向原中尾第5遺跡第1地点と第2地点の調査区の比高差は約170mを測り、北東から南西に延びる尾根上に位置する第1地点（本線部分）と尾根の頂部付近に立地する第2地点（迂回路部分）としては、遺跡の立地環境や性格が異なっている。また、第2地点については、市道付け替え部分

（NEXCO西日本との協議の結果向原中尾第4遺跡の飛び地扱いとした）をN区、本線部分をS区として調査を行うこととなった。調査は平成24年6月27日～10月5日までの期間で2遺跡を併行して実施した。第1地点については、対象面積1,500m²に対し、工事用道路敷設の関係などから樹木伐採後、人力掘削によりトレンチ掘削を行い、土層堆積および文化層の残存状況を把握し、調査区の絞り込みを行った。

その結果、対象地北東側を中心に後期旧石器時代から縄文時代早期の包含層の残存が確認されたため、調査範囲を北東側に絞って重機による表土除去を行った。現地形は、東から征矢原川の流れる西側に向かって緩やかな傾斜地である。果樹植栽や倉庫建設のため東側部分が削平され、II層（縄文時代早期包含層）の残存状況が一定ではない。

調査に際して基準とした座標は、NEXCO西日本が工事用道路建設の際に設置した杭の座標を利用した。

2 整理作業の経過

向原中尾第5遺跡第1地点および向原中尾第6遺跡は遺物出土量が少なかったことから接合までを同時に並行で整理作業を行った。その後、実測まで行った。整理作業期間は平成24年10月から平成25年3月まで宮崎県埋蔵文化財センター本館にて行った。

3 基本層序

基本層序を設定するにあたり、第1地点は同じ尾根上に位置する第6遺跡と共通化を図ることとし、A区北東壁面を利用してした。第6遺跡の調査区は山林及びミカン畑であり、それらを造成する際に削られたため、A区とB区の大半のトレーンチにおいて、表土以下全て尾鈴山溶結凝灰岩を中心とした礫層が堆積していた。

向原中尾第5遺跡第1地点の土層

I層：表土

II層：黒褐色土層（Hue5YR2/1）

縄文時代早期遺物包含層

粘性は弱く1mm以下の黄橙色粒をまばらに含む。しまりは弱い。

III層：明褐色土（Hue7.5YR5/6）

後期旧石器時代遺物包含層

粘性は弱くややしまりが強い。1～2mm程度の黄橙色粒を少量含む。

IV層：明黄褐色土層（Hue10YR7/6）

III層よりやや粘性が強く、淡い色調を呈する1～2mm程度の黄橙色粒をまんべんなく含む。

V層：褐色土層（Hue7.5YR4/6 基盤層）

粘性が強く、しまりも強い。拳大の礫をまんべんなく含む。

第2節 後期旧石器時代の遺構

後期旧石器時代に関しては、調査区北東端で礫群1基が確認された。前述のように、II層上部の削平の影響もあり、検出面は表土下、約15cmのII層中部から下部にかけての確認となった。

1 遺構

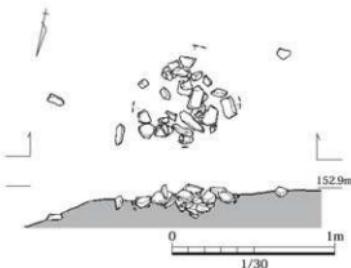
礫群（第21図）

S I I

第1地点北東端のII層下部で確認された。S I IはII層中部からその広がりが見られはじめ、II層下部からIII層の礫を主体とするものであった。

構成礫のすべてが尾鈴山溶結凝灰岩であり、周囲に広がる礫がほとんど赤化していないのに比べて、明瞭に赤化が認められた。遺構内から炭化物

の出土は確認されなかった。第2地点の縄文時代早期の集石遺構が円礫主体で構成されているのに對して、第1地点のS I 1は扁平な角礫によって構成されているのが特徴である。礫群の周辺にわずかに掘り込みと推定される色調の異なる箇所が認められたものの確定するには至らなかつたため、推定線により図示した。当該時期の遺物は確認されなかつた。



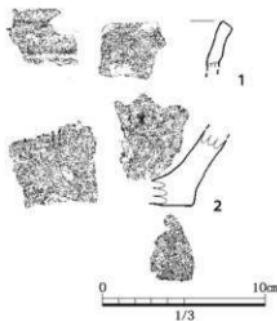
第21図 後期旧石器時代礫群実測図

第3節 縄文時代早期の遺物

遺物の出土点数は少ないが、II層上部から中部にかけて縄文時代早期の土器、石器が出土している。そのうち、5点を図化した。

1 土器（第22図1）

1は深鉢の口縁である。外面はナデ調整が施され内面には横方向の貝殻条痕が認められる。口縁端部は平坦面をつくり出している。2の底部は平底であり、やや直線的にひらきながら立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデ調整である。



第22図 縄文時代早期出土遺物実測図（1）

2 石器

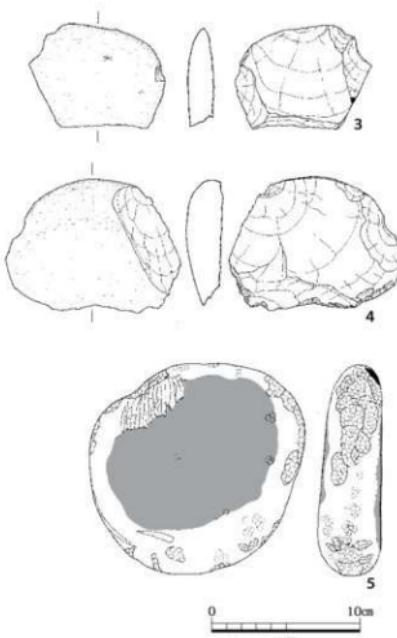
粗製剥片石器（第23 図3・4）

3・4は砂岩製の粗製剥片石器である。共に背面に礫面を残し、腹面は上部からの剥離が認められる。礫面の形状は扁平な円礫状であり蛤形を呈する。

3は、刃部は粗雑な剥離により作り出されている。元来の欠損した刃部を再加工した可能性も考えられる。やや扁平な形状を呈する。4は側縁部にも剥離がみられ、下端には連続した二次加工が認められる。

磨石（第23図5）

5は砂岩製の磨石である。表裏ともに中央部を中心にして磨面が残る。両側縁および外周に敲打によると推定されるつぶれ痕が認められることから敲石としての使用も考えられる。また、外周から中央にかけて断面U字状の研磨痕跡がみられる。



第23図 縄文時代早期出土遺物実測図（2）

第13表 繩文時代早期土器観察表

調査番号	調査区	出土層位	器種	部位	文様・調整等		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
1	5-1	II	深鉢	口縁	ナデ、横方向のナデ 一部スス付着	横方向のナデ	浅黄 (2.5Y7/3)	灰黄 (2.5Y7/2)	3mm以下の灰白色粒、2mm以下の明褐色粒・灰色粒をくずわざかに、1mm以下の透明光沢粒をわずかに含む	外面の一部に スス付着
2	5-1	II	深鉢	底部	横、斜方向のナデ	ナデ、粗頭底	明黄褐 (10YR7/6)	浅黄 (2.5Y7/4)	4mm以下の灰白色粒・復質褐色粒、 3mm以下の灰白色粒・明褐色粒・灰褐色粒、 1mm以下の透明光沢粒をくずわざかに含む	内面に黒既あり

第14表 繩文時代早期石器計測表

調査番号	調査区	出土層位	器種	石材	法量(cm,g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
3	5-1	II	粗製剥片石器	砂岩	7.1	9.2	1.8	168.9	
4	5-1	II	粗製剥片石器	砂岩	9.1	11.8	2.5	318.7	
5	5-1	II	磨石	砂岩	14.3	14.5	4.3	1249.8	

第4節 時期不明の遺構

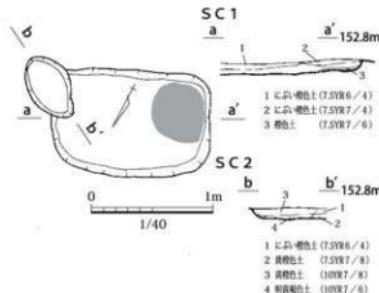
向原中尾第5遺跡1地点の調査区北東端で、焼土を伴った土坑が2基切り合った状況で確認された(第24図)。

検出は繩文時代早期の包含層であるII層の上面であるが、埋土の一部が表土に近い土質でもあり、遺物の出土も確認されなかったため、ここに記載した。

1号土坑(SC1)は不整な円形で、規模は長軸約1.3m、短軸約0.9m、深さ約0.1mを測る。1~2mm大的焼土が炭化物を伴って遺構の西側に集中し、1mm以下の焼土粒が極めて薄く全体に広がっている。東側に位置する2号土坑(SC2)は平面プランが楕円形で長軸約0.6m、短軸約0.4m、深さ約0.1mを測る。断面観察の結果、SC1の埋没後SC2が構築されていることが確認された。

第5節 小結

向原中尾第5遺跡1地点では、後期旧石器時代に属すると考えられる砾群(SI1)1基と時期不明の焼土を伴った土坑2基(SC1・2)が確認された。砾群に関しては連続する丘陵の南西部に位置する向原中尾第6遺跡、焼土を伴った土坑については谷を隔てた長野遺跡との間に関連性を見い出すことができる。



第24図 土坑実測図

確認された焼土を伴った土坑は、向原中尾第5遺跡第1地点谷を隔てて南西に立地する長野遺跡(第3図)の繩文時代早期焼土面1~7と規模および焼土の入り方等に共通性がみられる。

今回の調査範囲内では、包含層の残存状況から遺構の検出はさほど多くなかったものの、当初工事計画範囲である遺跡北側の南向き斜面地では、トレンチ調査時に繩文土器や敲石等の石器の出土が確認されており、遺跡の広がりが推定される。

第IV章 向原中尾第5遺跡第2地点

第1節 発掘調査の概要と経過

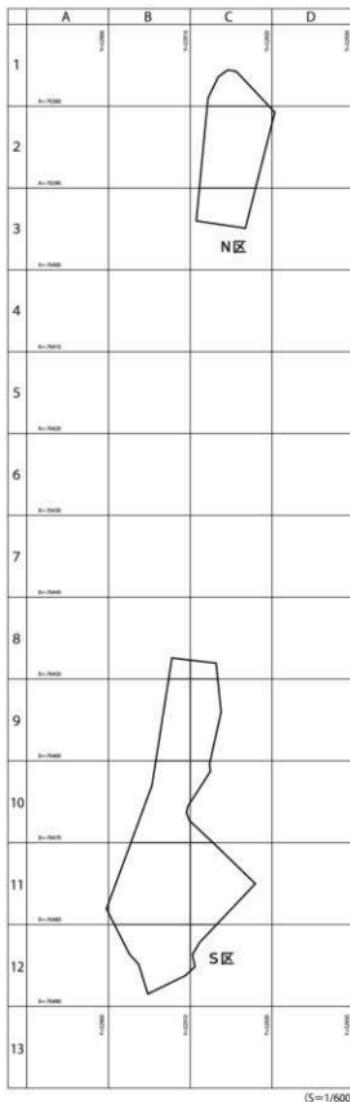
1 調査の経過

向原中尾第5遺跡第2地点の調査は、併行して行った第1地点の調査終了後から継続し実施した。調査区は第1地点の東に位置し標高約170m、第1地点との比高差は約20mを測る。調査対象面積840m²に対し、先行して掘削したトレンチより、縄文時代早期の集石遺構、下部に焼土の残存が良好な炉穴群が確認されていた。調査区は南北に長く、中央部では遺構および遺物が確認されなかつたことから、縄文時代早期の遺物が確認された現市道に接続する調査区北側をN区、集石遺構および炉穴が確認された向原中尾第4遺跡隣接部分をS区と設定し調査を行った。工事用道路建設および土地借用との関係からN区、S区を同時併行して調査を行うこととなった。重機による表土剥ぎはN区より開始し、引き続きS区について行った。表土剥ぎ終了後、N区からS区の中軸線上に南北5m間隔の基準杭を設定し、そこから東西方向に5m×5mのグリッドの設定を行った。その後、先行調査で確認されていた炉穴群保護のため、埋め戻していたS区トレンチ1の再掘削を行い基本層序の確認を行った。

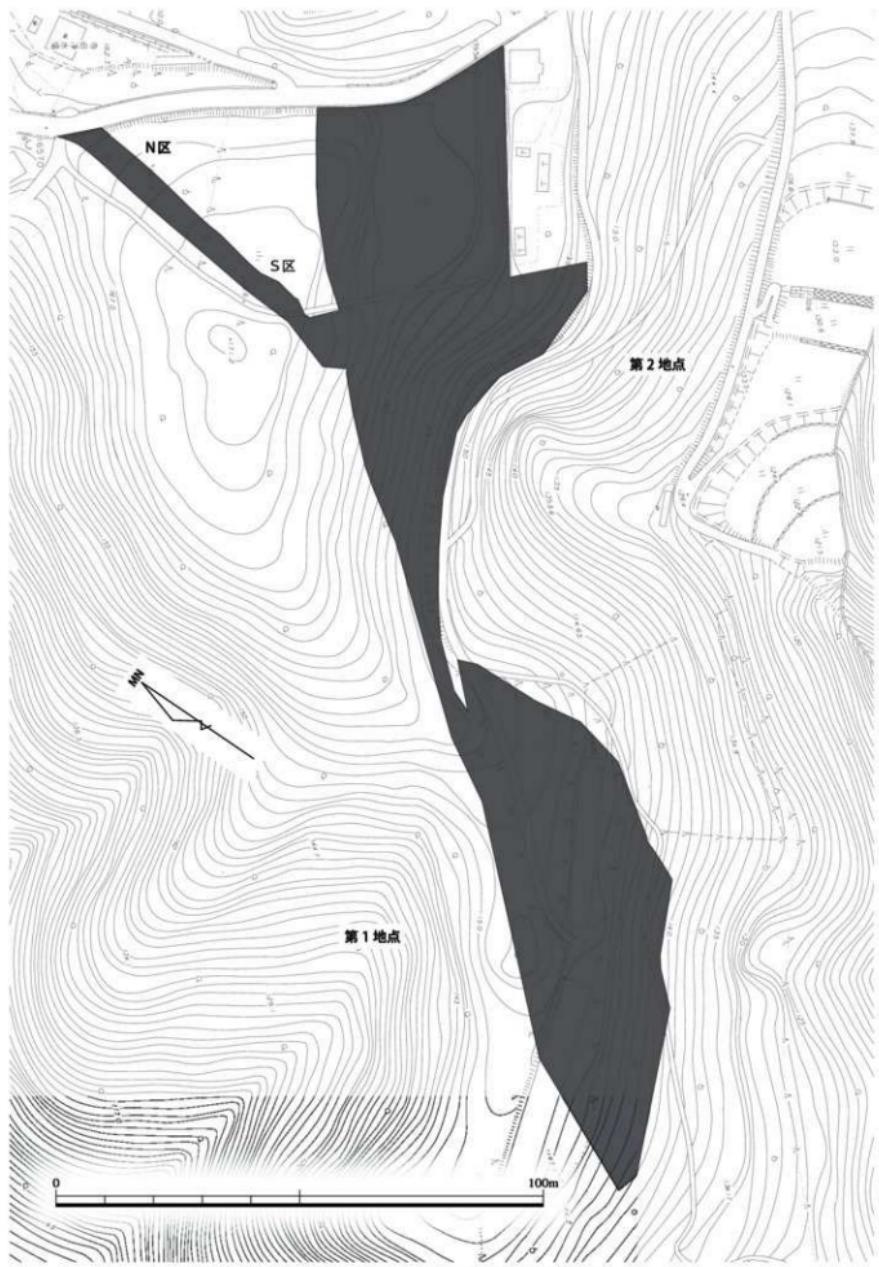
なお、基準とした座標は、東九州自動車道本線建設の際、NEXCO西日本が設置した杭の座標をもとにトラバース測量を行ったものである。

2 整理作業の経過

整理作業は、平成24年11月より第1地点・第2地点をあわせて宮崎県埋蔵文化財センター本館にて実施した。水洗、注記、計測、接合、実測、製図のほか炉穴および竪穴建物跡の埋土のフローテーション作業、回収した種実・遺物等の選別作業も整理作業の一環として行った。石器の計測は法量のほか石材の記録を行うとともに、平成22年度に調査を行った向原中尾第5遺跡第2地点に隣接する向原中尾第4遺跡および、向原中尾第5遺跡第1地点の西側裾部に立地する第6遺跡との石器の接合検討も行った。石材分類は、向原中尾遺跡群内で統一をはかり、分類を行った。



第25図 向原中尾第5遺跡第2地点グリッド配置図



3 基本層序

第1地点と第2地点では遺跡の立地状況に相違があるため、堆積状況が大きく異なっている。そのため、基本層序は第1地点とは別に設定した。

I層：表土

II層：黒色土層（Hue5YR2/1）

弥生～古墳時代遺物包含層

弱い粘性をもち、しまりが強い。一部S区東壁において下部にわずかにK-Ahの堆積が確認できる箇所がある。

III層：黒褐色土層（Hue10YR3/2）

縄文時代早期遺物包含層

弱い粘性を帯び強くしまる。

IV層：褐色土層（Hue10YR4/4）

後期旧石器時代遺物包含層

わずかに粘性を帯び、やや強くしまる。

1～2mm程度の黄橙色の粒子をまばらに含む。

V層：褐色土層（Hue7.5YR4/4）

粘性はなく、砂質。1～2mm程度の白色粒子

を含む。始良Tn火山灰

VI層：明褐色土層（Hue7.5YR5/8）

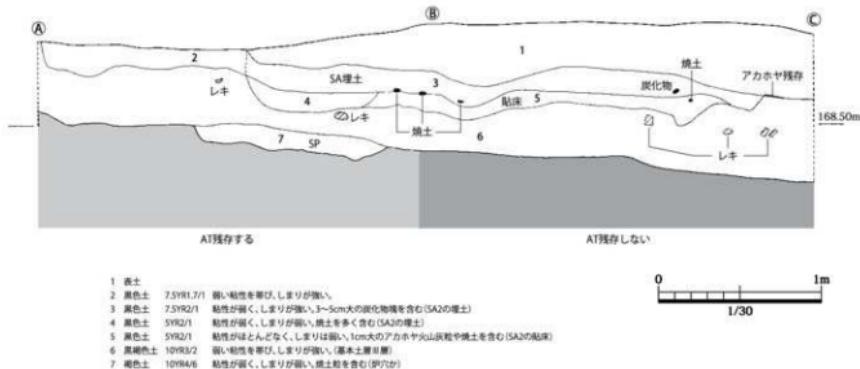
強い粘性を帯び、強くしまる。2～10cm程度の礫を多く含む

VII層：褐色土層（Hue7.5YR4/6）

非常に強い粘性をもち、強くしまる。拳大の礫をまんべんなく含む。基盤層

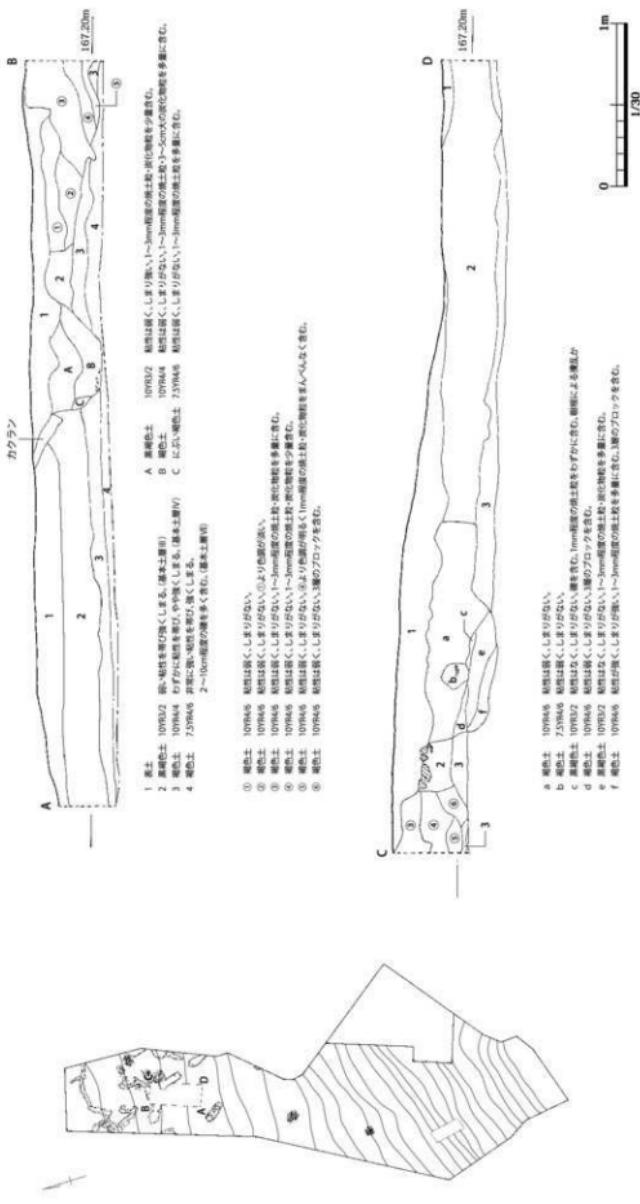
表土下、II層の黒色土（Hue5YR2/1）が弥生時代から古墳時代にかけての遺物包含層である。III層の黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）が炉穴や集石遺構が確認された縄文時代早期の包含層となる。

第IV層の褐色粘質土（Hue10YR4/4）より、後期旧石器時代の遺物が出土している。V層に始良Tn火山灰が確認されたことから、第2地点北側で縄文時代早期の調査終了後、トレンチを設定し調査を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。



第27図 S区C11グリッド東壁土層断面図

第28図 5区トレーンチ1土層断面図



第2節 後期旧石器時代の遺物

後期旧石器時代の遺構は、向原中尾第5遺跡第1地点で礫群が1基確認されたものの、第2地点では遺物のみの出土で、該期の遺構は検出されなかった。

1 石器（第29図・第15表）

後期旧石器時代の石器は全て第2地点S区で出土がみられた。S区の旧地形は南に向けた斜面地であり（第31図）、当該時期の石器が出土した地点は特に、Ⅲ層（繩文時代早期遺物包含層）とⅣ層の境界が不明瞭な部分にあたるため、厳密には旧石器とは判じがたい遺物もあるが、形態的特徴や調整剝離などから抽出したものもここに掲載している。石器は27点出土し、そのうち17点を図化した。確認された器種はナイフ形石器、剥片尖頭器、角錐状石器、台形石器、などのほか剥片、石核、接合資料がある。

ナイフ形石器（第29図6、7）

ナイフ形石器は2点出土し、全て図化した。

6は珪質頁岩製のナイフ形石器である。やや幅広の剥片を素材とし主要剥離面の左側縁および基部に二次加工が施されている。刃部に微細剝離が認められる。7はホルンフェルス製の縱長剥片を素材として利用したナイフ形石器である。刃部および右側縁は折損している。

剥片尖頭器（第29図8）

剥片尖頭器は1点出土している。8は木葉形を

呈する剥片尖頭器で、石材はホルンフェルス製である。幅広の縱長剥片を利用している。風化が著しいが基部は両側縁の背面よりやや丸みをもたせているように調整されている。

角錐状石器（第29図9）

9はチャート製の角錐状石器である。素材の側縁部から連続した調整剝離を用いて先端部が形成されている。基部は欠損している。

台形様石器（第29図10）

10は頁岩製の台形様石器である。ほぼ平行する両側縁に粗雑な調整剝離が認められる。

剥片（第29図11～18）

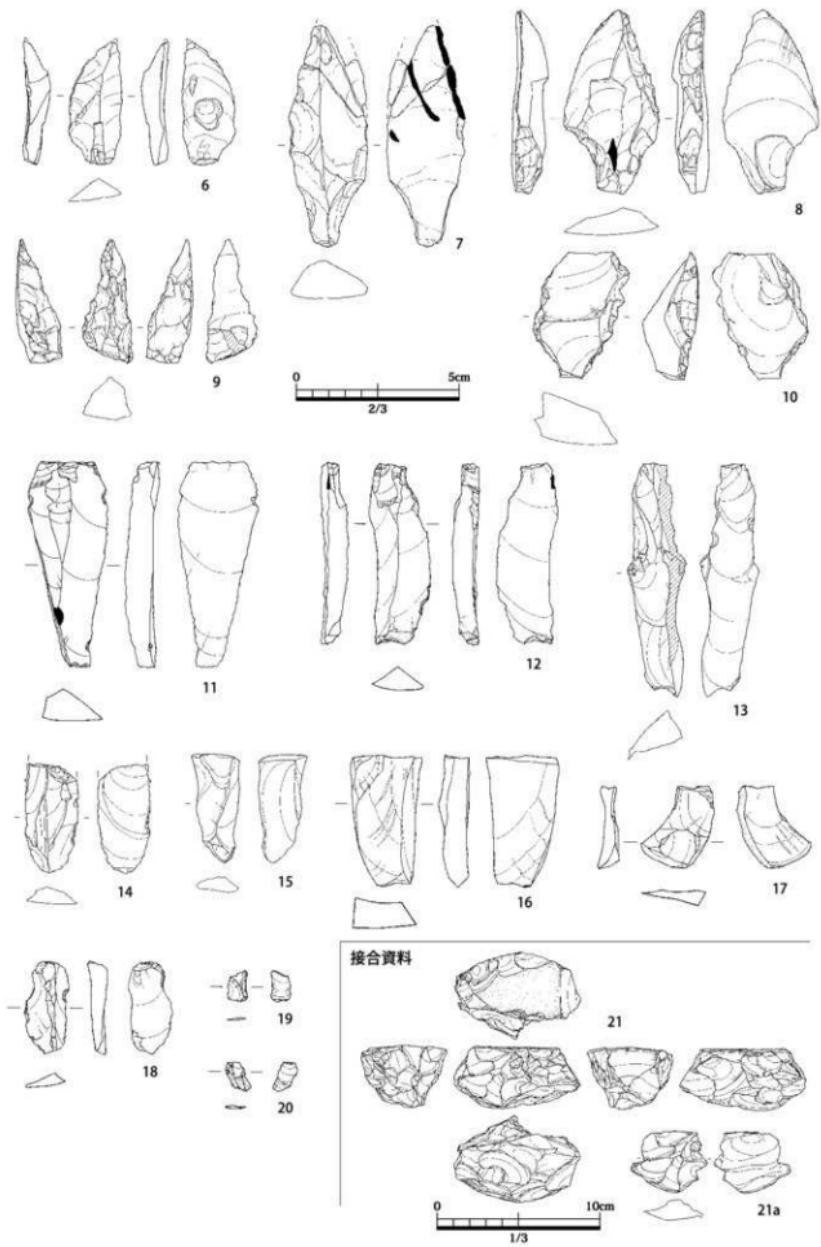
剥片は19点出土し、そのうち8点を図化した。11・12は腹面に平坦な打面とバルブを残す縱長剥片である。ともに石材は流紋岩である。13は頁岩製の石刃である。両側縁に微細剝離痕が認められる。14は頁岩製の縱長剥片である。腹面下縁に微細剝離痕が認められる。15はホルンフェルス製で頭部に自然面を残す両側縁に微細剝離痕がある。16は流紋岩製。17は頁岩製の不定形剥片である。18は頁岩製の剥片である。腹面に平坦な打面とバルブを残す。19・20はチャート製である。

接合資料（第29図21）

21は頁岩製の接合資料で、向原中尾第5遺跡内では唯一の出土である。母岩の側面調整剥片21aが接合したものである。

第15表 後期旧石器時代石器計測表

標印番号	調査区	出土層位	器種	石材	計量(cm.g)				備考
					最大幅	最大幅	最大厚	重量	
6	5-25	Ⅲ～Ⅳ	ナイフ形石器	頁岩	3.8	1.6	0.6	3.6	裏面中央付近に被熱剝離によるハゼ、若干の被熱による赤化が認められる
7	5-25	Ⅲ	ナイフ形石器	ホルンフェルス	6.8	2.4	1.2	19.9	全体の風化が著しく縫隙も消滅している
8	5-25	Ⅲ	剥片尖頭器	ホルンフェルス	5.6	3.0	1.0	13.0	
9	5-25	Ⅳ上	角錐状石器	チャート	3.8	1.5	1.3	5.8	
10	5-25	Ⅳ	台形様石器	頁岩	3.9	2.6	1.3	13.9	
11	5-25	Ⅲ	剥片	流紋岩	6.4	2.5	1.0	13.4	
12	5-25	Ⅲ	剥片	流紋岩	5.6	1.9	0.7	6.7	
13	5-25	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	7.2	1.8	1.2	13.1	
14	5-25	Ⅲ	剥片	頁岩	3.4	1.6	0.5	3.9	
15	5-25	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	3.3	1.4	0.8	29.0	
16	5-25	Ⅲ	剥片	流紋岩	4.1	2.2	0.5	11.2	
17	5-25	Ⅲ	剥片	頁岩	2.6	2.3	0.5	2.2	
18	5-25	Ⅳ上	剥片	頁岩	2.9	1.4	0.5	1.7	
19	5-25	Ⅳ	細片	チャート	1.0	0.7	0.1	0.1	
20	5-25	Ⅲ	細片	チャート	0.9	0.8	0.1	0.1	
21	5-25	Ⅲ	接合資料	ホルンフェルス	3.8	7.8	5.35 (3.45)	162.0 (145.6)	21aと接合、()内の数値は21aを剥離したもの
21a	5-25	Ⅲ	剥片	ホルンフェルス	3.8	4.6	1.3	16.4	21と接合



第29図 後期旧石器時代石器実測図

第3節 繩文時代の遺構と遺物

1 遺構（第30～37図・第16表）

縄文時代早期では、N区、S区あわせて、集石遺構13基、炉穴33基が確認されている。検出層位はⅢ層上位からⅢ層の下位にかけてである。N区ではC-2グリッドを中心に集石遺構6基が分布している。

S区では事前調査の段階でトレンチ壁面に焼土が良好に残存する炉穴のほか、上部に集石遺構の構成礫と考えられる礫が検出されていた。表土剥ぎ後、炉穴の埋土状況と土層の堆積状況を確認するためトレンチの再掘削と壁面精査を行った結果、断面に4基の炉穴と1基の集石遺構が確認された。最終的にS区では集石遺構6基、炉穴33基の検出をみた。

炉穴（SP）（第31～34図）

炉穴は33基確認されている。すべてS区に位置し、調査区の最高所（標高169m）付近のB9～C9グリッドに分布している。

そのうち、単独に存在するもの、切り合ってアメーバー状の平面形となるものとに大別される。

単独のものは検出面からの深さが深く、埋土が固くしまる傾向にある。また、炉部と考えられる位置に焼土や炭化物が良好に残存していることが確認された。そのうち3基の炉穴（SP5・8・32）について炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定を行った（第5節参照）。

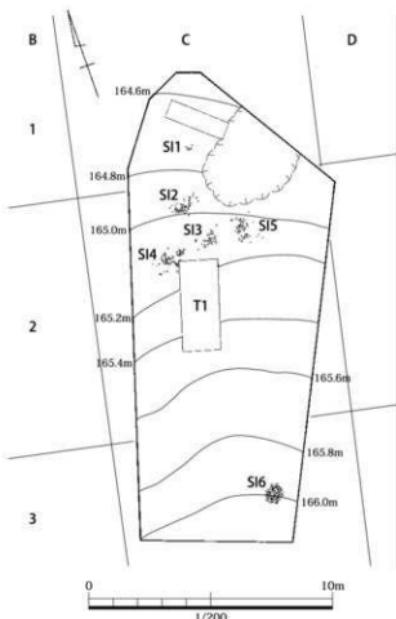
S区北端の炉穴とB9～C9グリッド周辺の炉穴では形態及び規模の点で相違が認められる。

炉穴の検出にあたっては、地山と埋土の色調の差の判別が困難な箇所も多く、数箇所に範囲確認のためのサブトレンチを設定したが、時間的な制約などから、IV層の上面まで掘り下げて検出しているものもある。そのため、床面だけの検出となった炉穴や切り合い関係が不明瞭なものもある。

切り合い関係が確認できたものについては、矢印で先後関係を示した。切り合いは、埋土の色調や焼土粒の入り方、密度の違いをもとに現地で判断した。

S区北端では焼土粒がⅢ層上面に散在した状態で遺構の輪郭が不明瞭なため、焼土部分を断ち割

るかたちで掘削し精査を行った。検出面からの深さも浅く、切り合い関係は断面および底面のレベル差で確認されたものもある。平面形態は細長く、焼土粒が埋土に混じる程度であり、明瞭な炭化物も認められなかった。一方、B9～C9グリッド周辺では等高線に対し直交ぎみの炉穴の分布がみられ、大半は単独で存在している。炉穴に関して、基本的に検出順に番号を付しているが、埋土状況による切り合い関係ではなく、焼土の有無や底面のレベル差による認定もみられるため、掲載していない炉穴もある。そのため、切り合い関係が断面で把握できた炉穴と単独で確認された4基について図示した。なお、自然科学分析の成果と整合性を保つため、調査時の遺構番号をそのまま使用している。



第30図 N区縄文時代早期遺構分布図

S P 5 (第31・32・34図)

S P 5 は B 9 グリッドに位置している。検出面はⅢ層下位である。先行トレンチ掘削の際、焼土面が削平されている。主軸は東西方向で、現存長軸約1.6m、短軸約0.9m、深さ約0.25mを測る。平面形は不整形な橢円形である。内側にくびれる箇所がわずかに認められブリッジ位置であった可能性も考えられる。

埋土は固くしまり、焼土とともに15cm程の炭化物が出土している。放射性炭素年代測定値は9,210±30年BP、樹種はクリと同定されている。埋土中からIX類の記述の縄文土器(59)の出土がみられた。

S P 8 (第31・32・34図)

S P 8 は B 9 ~ C 9 グリッドに位置する。等高線にはほぼ直交し、南北方向に主軸をもつ。トレンチをはさんで S P 5 の東にあり、掘り込みの西側を削平されている。平面は隅丸長方形を呈し、長軸約2.0m、短軸約0.7m、深さ約0.3mを測る。北側に焼土面がみられ、東側の S P 18 と切り合う。検出面はⅢ層中部である。埋土中より貝殻条痕文土器(33)とチャート製でⅡ類の石鏃(88)が出土している。出土した炭化物の放射性炭素年代測定値は9,180±40年BP、樹種はクリである。

S P 21 (第31・32・34図)

B 10 グリッド、調査区内でもっとも南に位置し、単独の炉穴である。ゆるやかな等高線に平行している。平面形は長楕円で、長軸約2.0m、短軸約0.7m、深さ約0.3mを測る。東側、西側の2箇所に、周囲より一段低いテラス状の平坦面があり焼土面が確認された。中央部の床面付近には炭化物粒とともに扁平な礫が確認された。検出面はⅢ層中部である。

S P 24 (第31~33図)

S P 24 は B 10 グリッドに位置し、東は調査区外へ延びている。東端の土層確認のサブトレンチを掘削中に検出された。主軸は等高線に平行し、東西方向である。現存長軸1.5m、短軸0.7m、深さ0.3mを測る。Ⅲ層中部からⅢ層下部にかけて検出された。

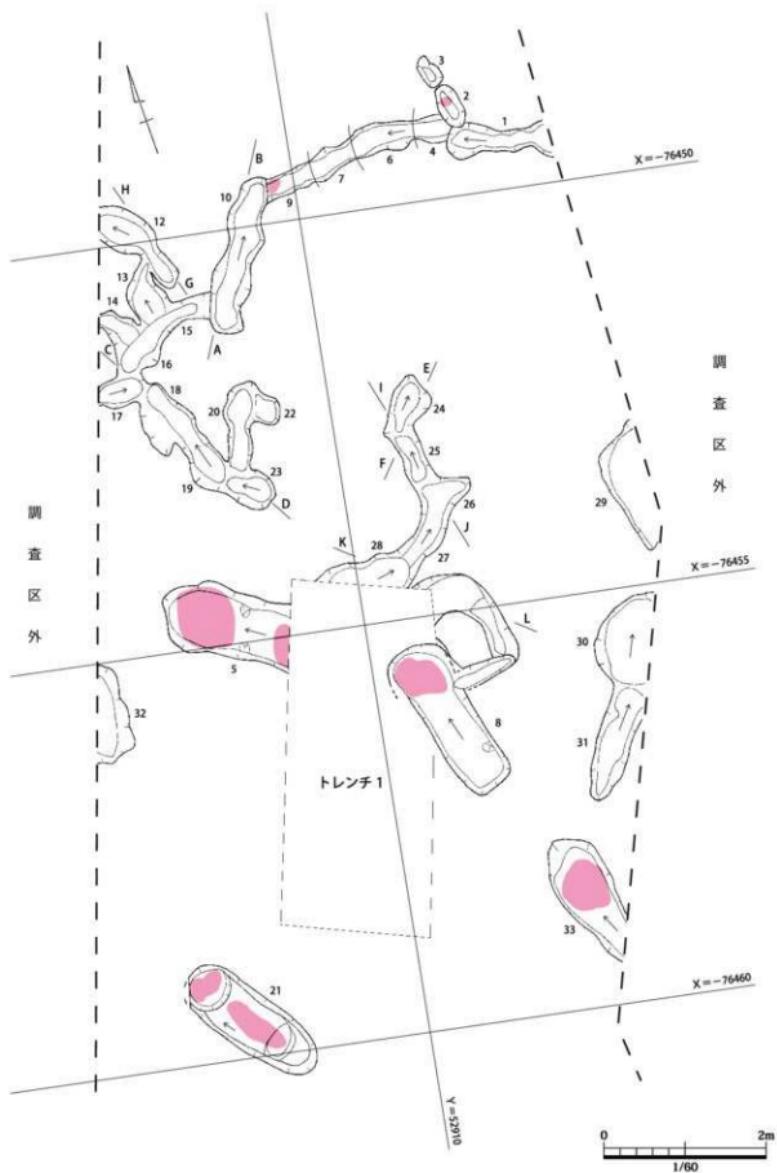
S P 32 (第31~33図)

S P 8 の東側、C 9 グリッドに位置する。S P 27 を利用して南側に構築されている。埋土中から出土した炭化物について放射性炭素年代測定および樹種同定を行った。放射性炭素年代測定値は、測

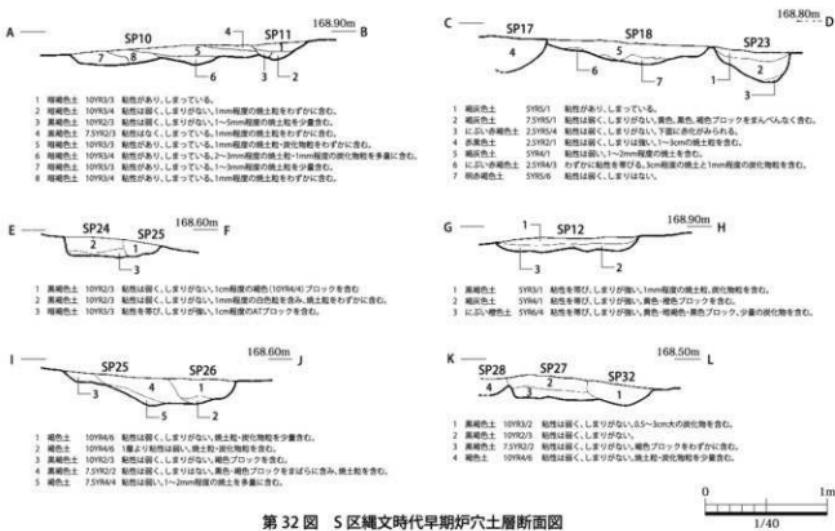
定年代: 8,050±20BPで、炭化材の樹種はコナラ節である。



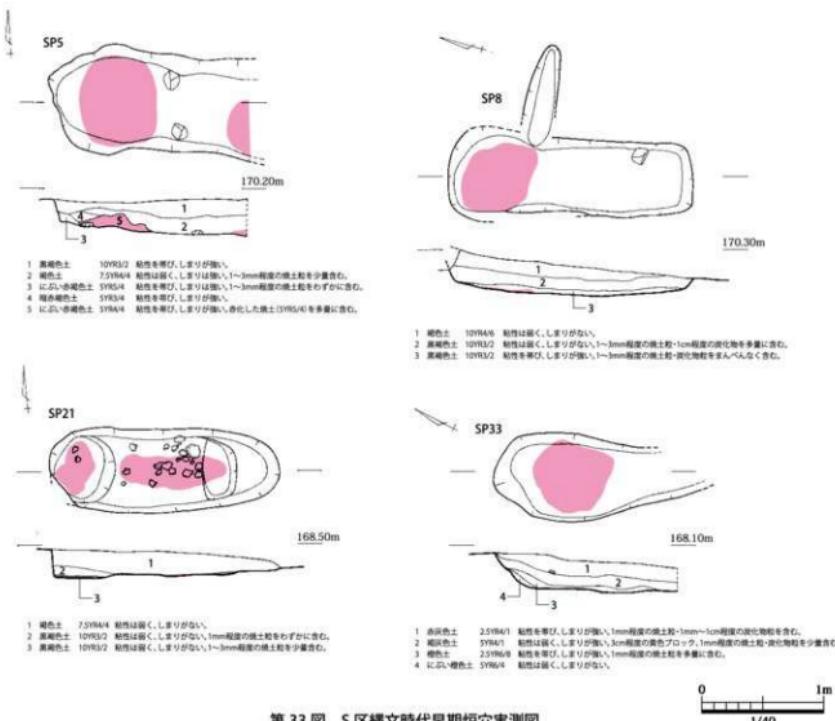
第31図 S区縄文時代早期・弥生～古墳時代遺構分布図



第32図 S区縄文時代早期炉穴分布図



第32図 S区縄文時代早期炉穴土層断面図



第33図 S区縄文時代早期炉穴実測図

集石遺構（S I）（第30・31・35～37図）

第2地点のN区・S区あわせ13基が検出された。

集石遺構の上部には散礫が分布しており、その散礫を点上げした後、礫のまとまりが認められたものを集石遺構とした。検出層位はⅢ層上部からⅢ層中部である。集石遺構を構成する礫のほとんどは尾鈴山溶結凝灰岩である。

N区に位置する集石遺構（S I 1～S I 6）は被熱のためか、ほとんどの構成礫に赤化が認められる。また、S I 1～S I 5は近接して構築され、礫も粗な分布を示し、小さく破碎した礫や配石と考えられる大型の石が混じる。調査区内でS I 6は他の5基より標高の高い地点に単独で存在する。拳大で大きさの整った円礫により構成され、上下の礫間の重なりが密であった。配石の上面に炭化物片が多数確認された。

S区では、S I 10・11は炉穴との切り合いがみられ炉穴が埋没後、その上部で構築されたことが確認された。S区の集石遺構は傾斜が急な地点に位置するS I 13を除き、その大半は炉穴の分布域と重なり傾斜の緩やかな南向き平坦面に構築されている。また、炉穴の分布域から南に離れたS I 12・13に2基のみ明確な配石を有している。

S I 8の広がりを確認中、東側に構成礫が不自然になくなっている箇所が認められたため、調査区を東側境界付近まで拡張し精査を行ったところ、弥生時代から古墳時代にかけての1号竪穴建物跡（S A 1）に切られている。

集石遺構は掘り込みの有無により大別され、礫の密度、状態により以下のように4分類した。

（詳細は第16表のとおり）

I類の集石遺構はすべてN区に分布し、II～IV類はS区にて検出されている。S区で確認されたII類・III類の集石遺構は炉穴の分布域と重なりが認められる。

I類（S I 1～5）（第35図）

掘り込みをもたず、構成礫が散在するもの。

I類に属するのはS I 1からS I 5の5基で、そのすべてはN区に分布している特にS I 1・3は礫の範囲が小さく、密度も低い。小円礫で構成されている。S I 1からは砂岩製の粗製剝片石器

（130）が出土している。S I 2は構成礫に配石の一部と考えられる大型の尾鈴山溶結凝灰岩が含まれる。使用後の廃棄と考えられる。S I 4はやや礫の分布範囲が広く、小円礫のほか破碎礫を含んでいる。いずれの集石遺構の構成礫も被熱のためか赤化している。

II類（S I 8）（第35図）

掘り込みをもたず、礫が密集するもの。

S I 8が該当する。構成礫は尾鈴山溶結凝灰岩である。構成礫の大半には赤化が認められなかつた。1号竪穴建物跡（第51図）に東側を切られている。

現存長軸約1.1m、短軸約0.8mを測る。構成礫の中からホルンフェルス製のスクレイバー（89）と、砂岩製粗製剝片石器（121）が出土している。炭化物の出土はみられなかった。

III類（S I 7・9・11）（第36図）

掘り込みを有し、礫の密度が低いもの。

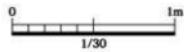
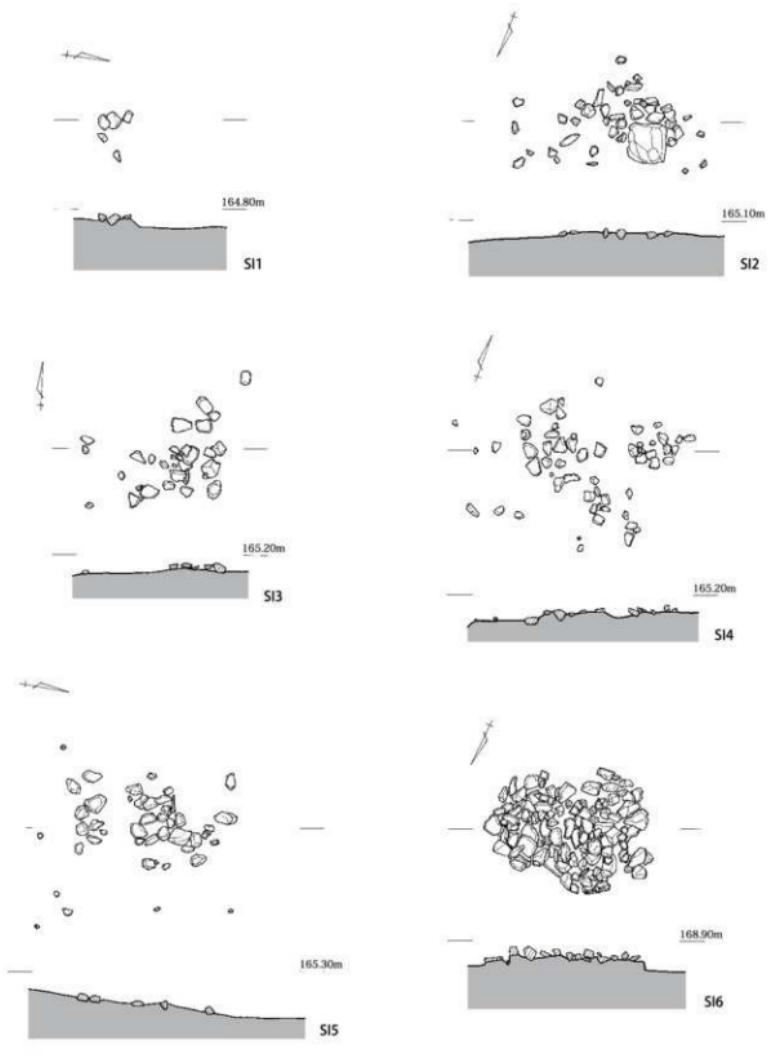
S I 7・9・11が該当する。S I 7は大型で扁平な角礫（配石）によって構成される。バラの花弁状に広がる平面形を呈し外側の配石が立石する。埋土中から尾鈴山溶結凝灰岩製の磨石（183）が出土している。

S I 11はトレント1を掘削する際、確認されていたものである。S P 27の埋没後に構築されている。

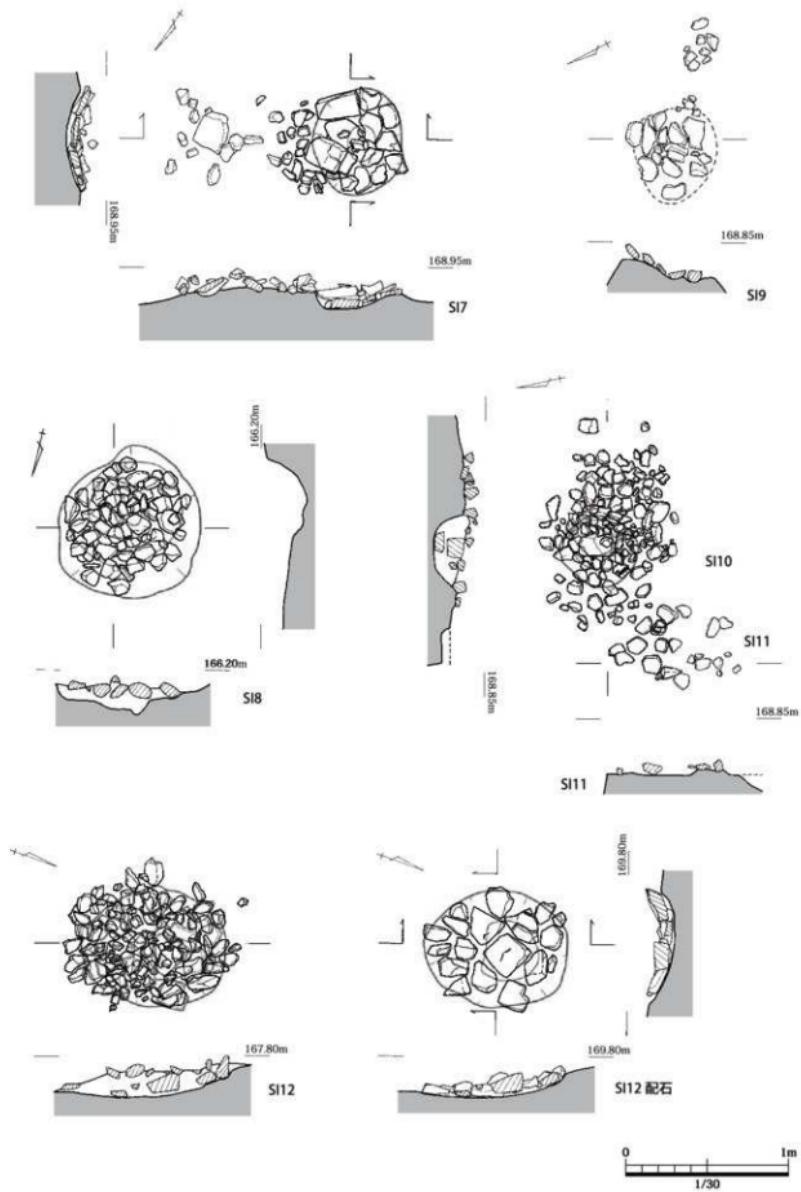
IV類（S I 6・10・12・13）（第36・37図）

掘り込みを有し、礫の密度が高いもの。

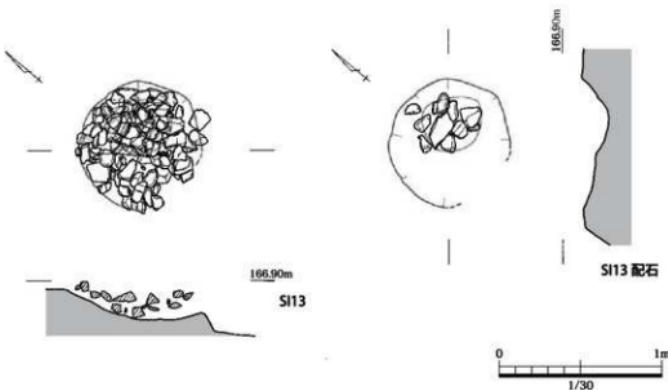
IV類にあたるのはS I 6・11・12・13の4基である。S I 6のみがN区で検出され、配石上面で確認された炭化物の放射性炭素年代測定および樹種同定を行った。測定年代は9,480±40年BP、炭化材の樹種はクリである。S I 12・13は炉穴の分布からやや離れた地点にあり、周辺には当該時期の他の遺構は確認されなかつた。2基ともに、埋土中から少量の炭化物が確認された。S I 12は等高線に平行する側の掘込みに沿うかたちで東西方向にしっかりと配石が敷設されている。



第35図 繩文時代早期集石遺構実測図(1)



第36図 繩文時代早期集石遺構実測図(2)



第37図 縄文時代早期集石造構実測図(3)

第16表 縄文時代早期集石造構計測表

遺構名	検出位置	縄範囲(m)		掘り込み(m)			配石	塙込	形状	分類	備考
		長軸	短軸	長軸	短軸	深さ					
SI1	N区	0.30	0.25	—	—	—	—	×	—	I	構成礫はすべて尾鈎山溶結凝灰岩の焼礫
SI2	N区	1.57	1.00	—	—	—	—	×	—	I	構成礫はすべて尾鈎山溶結凝灰岩の焼礫
SI3	N区	1.10	0.70	—	—	—	—	×	—	I	構成礫はすべて尾鈎山溶結凝灰岩の焼礫
SI4	N区	1.40	1.30	—	—	—	—	×	—	I	構成礫はすべて尾鈎山溶結凝灰岩の焼礫
SI5	N区	1.70	1.00	—	—	—	—	×	—	I	構成礫はすべて尾鈎山溶結凝灰岩の焼礫
SI6	N区	0.95	0.90	0.94	0.85	0.2	○	○	皿形	IV	放射性炭素年代測定: 1,820±20年BP 炭化材の樹種: クリ
SI7	S区	0.70	0.58	0.65	0.54	0.14	○	○	U字	III	
SI8	S区	1.10	0.80+α	—	—	—	—	×	—	II	SA1に切られる
SI9	S区	0.65	0.56	0.59	0.51	0.2	—	○	皿形	III	
SI10	S区	0.50	0.40	0.48	0.43	0.2	○	○	U字	IV	SP27を切る
SI11	S区	0.40+α	0.40+α	—	—	—	—	×	皿形	I	SI10と切り合う SP27を切る トレンチで削平
SI12	S区	0.90	0.72	0.88	0.72	0.19	○	○	皿形	IV	
SI13	S区	0.80	0.77	0.8	0.75	0.28	○	○	皿形	IV	

2 遺物

土器（第38～40図22～75）

縄文土器はⅢ層からⅣ層上部にかけて出土しており、Ⅲ層が中心となっている。集石遺構が6基検出されたN区での出土はごく少量であり、大半は第2地点S区の南向き緩斜面より出土している。

Ⅲ層の残存がよい箇所では上層および下層でも縄文土器の出土が認められ、縄文時代早期前葉から早期後葉までの時期が確認された。

向原中尾第4遺跡に続く調査区南端、B11・12・C11グリッドでは旧地形の強い傾斜と攪乱のため、土層堆積状況はあまり良好ではなく、遺構・遺物はほとんど認められなかった。

文様や調整等の特徴により、I～VII類に分類した。

I類（22・23）口縁部に縦位の貝殻刺突を施すもので、その下位に斜位に貝殻条痕をもつ。器形はバケツ状の単純な深鉢形を呈すると考えられる。口縁は直口し、端部は平坦である。前平式系土器。

II類（24・25）口縁部に横方向の貝殻腹縫刺突文を施し、三角形の楔状貼付け突帯をもつ一群である。25は口縁下位に縦方向の貝殻腹縫文が認められる。器形は口縁がレモン状を呈する角筒土器である。知覧式系土器。

III類（26～35）貝殻条痕文系土器

口縁が直口するもの（26～30）、やや内湾するものの（31・34）、やや外反するもの（32・33・35）に分けられる。26は外面に斜位の貝殻条痕文を施し、器壁は厚手である。口縁は丸く収められる。28は内面に口縁部付近は横方向、下位には斜方向の貝殻条痕文がみられる。3類では最も薄い器壁をもつ。29・30の外面は口縁部に横方向、下位に斜方向の条痕文がみられる。内面は器面調整のための浅い条痕文がのこる。31・32・35は外面に口縁上部から斜方向の貝殻条痕文がみられる。器壁は厚手である。

IV類（36）貝殻腹縫により連続刺突文を数段施すもの。器壁は厚く、口縁端部は丸みを帯びる。器面調整は文様下位に横ナデ、口唇部および内面上部には横方向のミガキが認められる。口縁端部と口縁部は2種類の施文具を用いたのか刺突の仕方が変えられる。中原式土器。

V類（37）器壁に撚糸文を施すもの。37は口縁やや外反し、上面はやや細く仕上げられる。厚手の器壁をもつ。内面は風化著しいが、上部にわずかに横方向の撚糸文が認められる。

VI類（38～40）無文土器である。内外面ともにナデ調整される。内外面の色調が赤褐色をおびている。

VII類（41～45）回転施文系の土器を一括した。

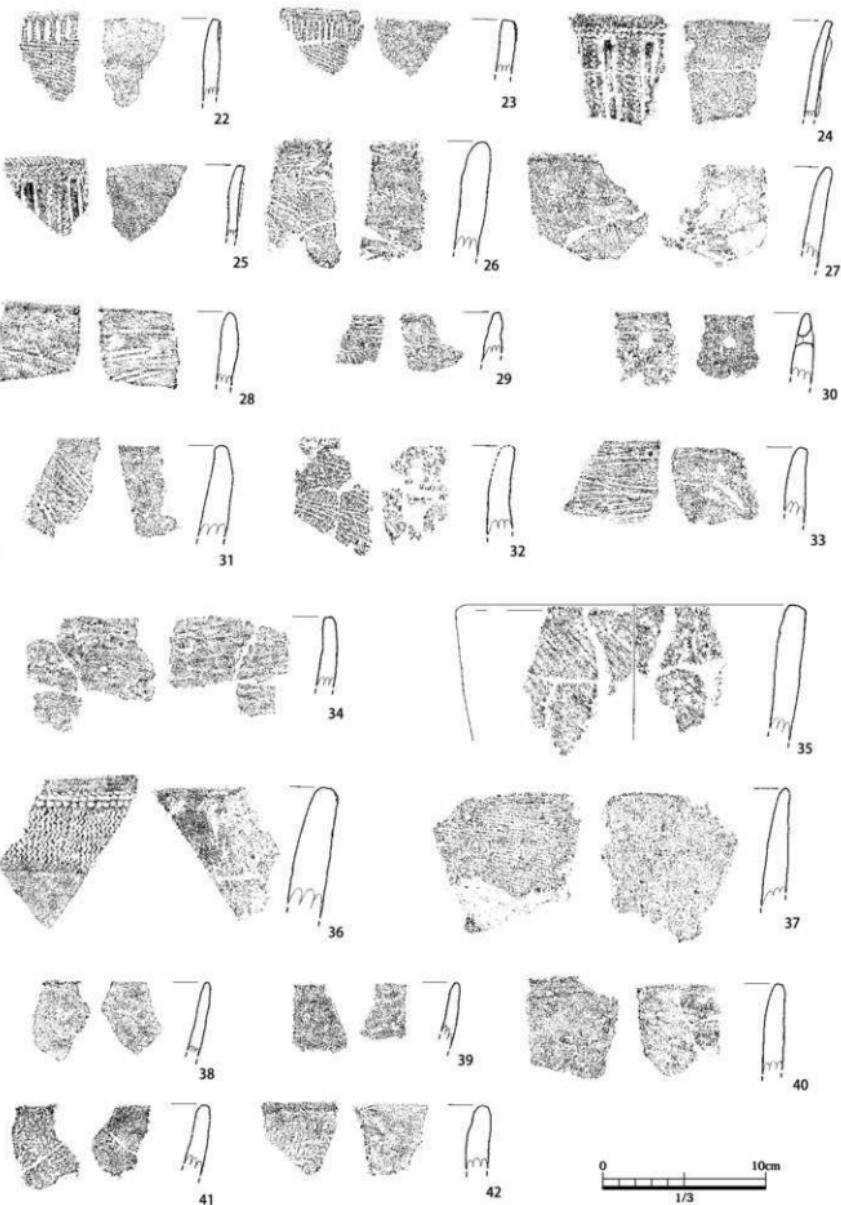
41～43は短枝回転文土器、いわゆる「イチゴ」と呼ばれる土器である。器壁は厚く、内面は丁寧なナデ調整が施される。43の口縁内面には横方向に強めのナデ調整のため、小さな平坦面が形成される。44は口縁上部に横位の、下位に縦および斜位の変形撚糸文がみられる。45は内外面に横位の小さな山形押型文が施されている。内面は口縁部付近のみに施文され、下位には横方向のナデ調整である。

VIII類（46）I～VII類に分類できないものである。46はやや厚手の器壁をもち口縁端部は丸い。外面にナデの後、右上がりのやや深い沈線を施し、口縁部付近でやや浅めの右下がり沈線と切り合いが認められる。形状から深鉢と考えられる。

IX類（47～70）I類からVII類に属する胴部である。47～50は連続した縦位の貝殻刺突文がみられる。47・48・50はII類の胴部と考えられる。49は下削峯式土器か。51～56はIII類の貝殻条痕文系土器の胴部とみられる。56は不規則な縦方向の条痕文が観察される。

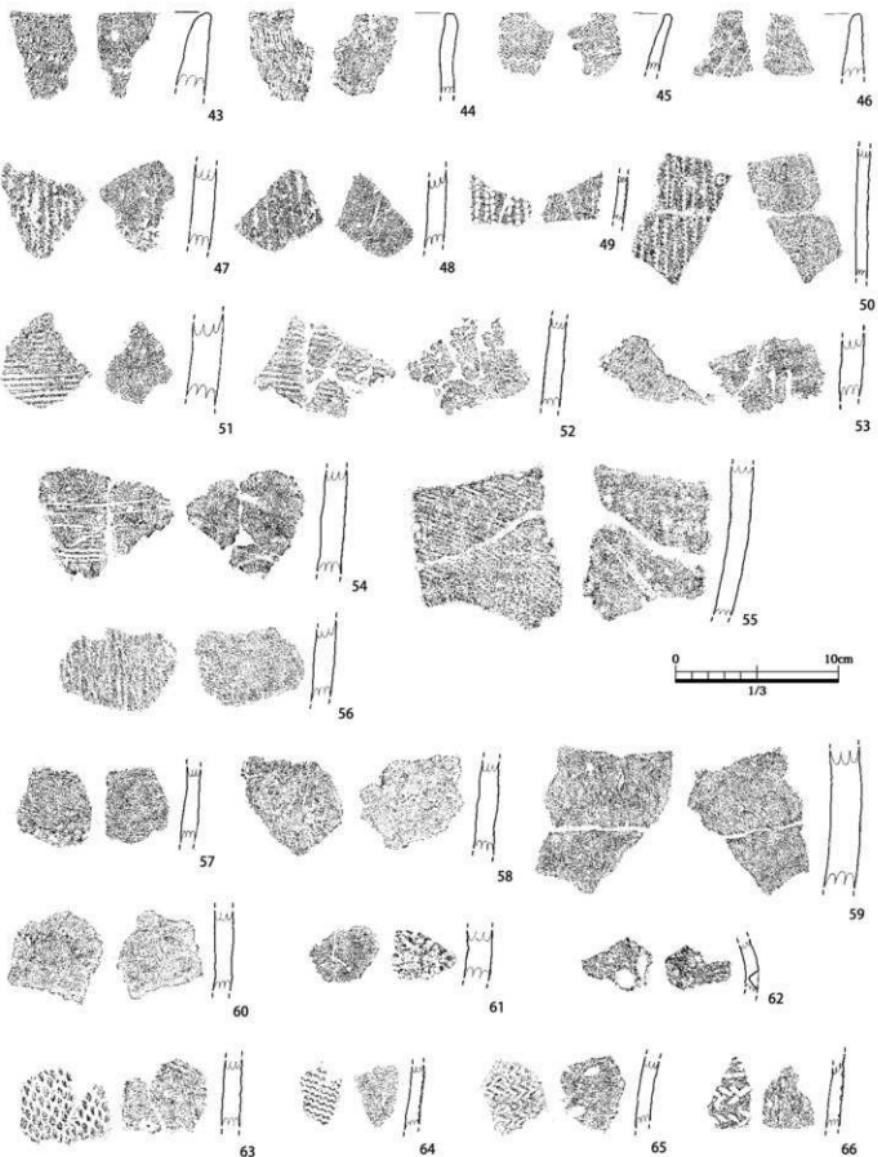
57～62はVI類の胴部と考えられる。61の内面は風化著しく調整が観察できないが、外面には丁寧なナデやミガキ調整が確認される。小破片のため、断定はできないが、IV類の胴部の可能性がある。63～70はVII類とした回転施文系の土器の胴部である。63は外面に縦位の楕円押型文がみられ、内面は丁寧なナデ調整である。64・65は山形押型文土器である。64には横方向に小さく密な山形押型文が、65は縦方向にやや大きめな幅の広い山形押型文がみられる。ともに内面はナデ調整である。66は横位羽状の短沈線が施される辻タイプの範疇に含まれる土器である。内面にはミガキ調整が加えられる。

67は風化のため文様が判然としないが、イチゴの粒状を呈する短枝回転文が施されているとみられる。68は外面に菱形の押型文をもつ。69・70は

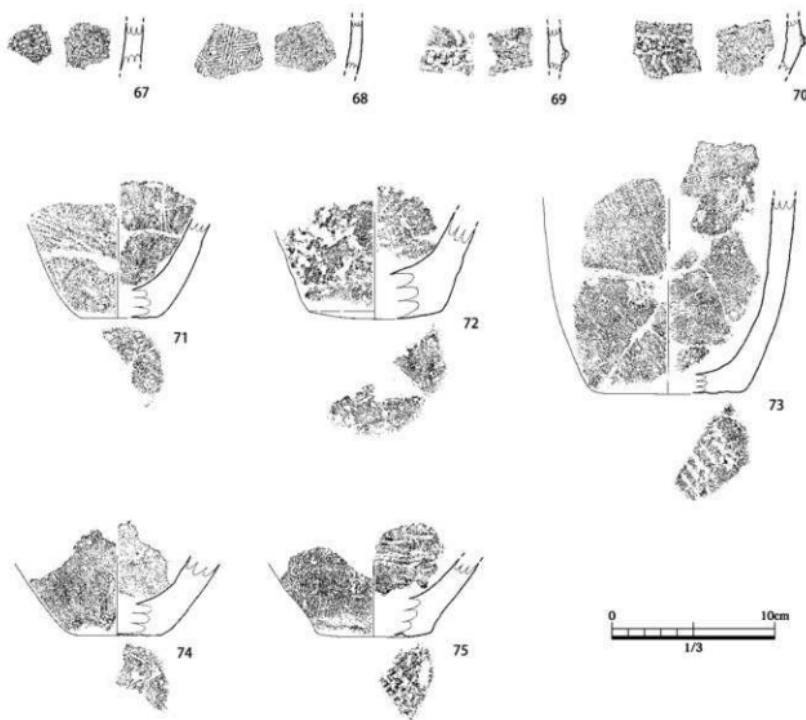


0
10cm
1/3

第38図 繩文時代早期出土遺物実測図(1)



第39図 繩文時代早期出土遺物実測図(2)



第40図 繩文時代早期出土遺物実測図(3)

内傾する胴部に刻目貼付突帯をもち、下部に長大な山形押型文が認められる。手向山式系土器と考えられる。

X類 (71~75) 底部を一括した。

71・73・74内済しながら立ち上がる。71・74の下端は丸みを帯びる。

73は薄く平らな底部である。網代痕と考えられる圧痕がみられる。72・75はやや外方に開きながら立ち上がる。75は底面に深い網代状の圧痕が認められる。

第17表 織文時代早期土器觀察表(1)

標題 番号	調査区	出土 層位	器種	部位	法線 (cm)	文様・調整等		色調		胎土	備考
						外 面	内 面	外 面	内 面		
22	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ 貝殻刷文 横方向の貝殻条文	指ナデ後、斜方向のナデ 横方向のナデ	相 (5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	4mm以下の灰白色粒・3mm以下の灰 褐色粒・1mm以下の透明光沢粒をわ ずかに含む	
23	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ、貝殻刷文、貝 殻条文	横方向のナデ	浅黄褐 (10YR8/3)	浅黄褐 (10YR8/3)	1mm以下の透明光沢粒をわずかに、 1mm以下の灰白色粒・角閃石をこく わずかに含む	
24	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、貝殻刷文、貝 殻貼付突帯	ナデ(風化著しい)	相 (7.5YR6/6)	相 (7.5YR6/6)	3mm以下の灰白色粒を多く含む	
25	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		貝殻刷文、貝殻 貼付突帯	横方向の丁寧なナデ	相 (10YR4/4)	相 (7.5YR4/3)	4mm以下の赤褐色粒をごくわずかに、 3mm以下の灰白色粒をわずかに、 2mm以下の透明光沢粒を多く含む	
26	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ 貝殻条文?(風化著 しい)	横、斜方向のナデ(風化 著しい)	相 (5YR6/8)	灰黄褐 (10YR6/2)	4mm以下の灰白色粒をごくわずかに、 3mm以下の灰白色粒をわずかに、 2mm以下の透明光沢粒を少し含む	
27	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、横、斜方向のナデ	横ナデ、ナデ(風化著 しい)	灰黄 (2.5Y6/2)	浅黄 (2.5Y7/4)	1mm以下の灰白色粒をわずかに含む	外面にス トッピング
28	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ	横方向の貝殻条文	明褐 (7.5YR5/8)	明褐 (7.5YR5/8)	1mm以下の透明光沢粒をわずかに含 む	
29	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、横・斜方向の貝殻 条文	横方向のナデ	浅黄 (2.5Y8/4)	相 (7.5YR7/6)	2mm以下の灰白色粒・1mm以下の透 明光沢粒をごくわずかに含む	
30	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ、横方向の貝殻 条文	ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	4mm以下の灰褐色粒・3mm以下の灰 白色粒をわずかに、2mm以下の角閃 石をごくわずかに含む	穿孔(貫通) あり
31	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ 貝殻条文	ナデ(風化著しい)	淡黄 (2.5Y8/3)	淡黄 (2.5Y8/3)	1mm以下の灰白色粒・黒色光沢粒を ごくわずかに含む	
32	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		貝殻条文(風化著 しい)	風化が著しく不明	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい相 (5YR7/4)	2mm以下の灰白色粒をごくわずかに 含む	
33	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ 横方向の貝殻条文	横ナデ 斜方向のナデ	にぶい相 (10YR6/3)	相 (7.5YR7/6)	3mm以下の灰白色粒をわずかに含む	
34	5-25	Ⅲ	下	深鉢		ナデ 横方向のナデ	斜方向のナデ	相 (7.5YR7/6)	黄褐 (7.5YR7/6)	3mm以下の灰褐色粒を2mm以下の灰 褐色粒をわずかに、1mm以下の透明 光沢粒をごくわずかに含む	
35	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁	口径 (19.3)	ナデ 横方向の貝殻条文	ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	2mm以下の灰白色粒をわずかに、 1mm以下の半透明光沢粒を少し、 1mm以下の黒色光沢粒をごくわずか に含む	
36	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ、 貝殻刷文横 方向の強めのナデ	ナデ(風化著しい)	黄褐 (2.5Y5/3)	にぶい相 (7.5YR6/4)	3mm以下の灰褐色粒を2mm以下の灰 褐色粒をわずかに、2mm以下の角閃石 を2mm以下の角閃石・透明光沢粒 を多く含む	
37	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、変形糸条文	ナデ(風化著しい)	浅黄 (2.5Y7/3)	にぶい相 (10YR7/3)	6mm以下の灰黄色粒・5mm以下の灰 白色粒・3mm以下の角閃石を多く含 む	
38	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ	ナデ	明赤褐 (2.5YR8/8)	灰褐 (7.5YR4/2)	1mm以下の灰褐色粒をごくわずかに、 1mm以下の透明光沢粒をわずかに含 む(内面に多い)	
39	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ	斜方向のナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	2mm以下の灰白色粒・透明光沢粒を わずかに、2mm以下の角閃石をこく わずかに含む	
40	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁	口径 (15.4)	ナデ 横方向のていねいなナ デ	横方向のナデ	明赤褐 (2.5YR8/8)	相 (2.5YR6/8)	5mm以下の灰白色粒・褐色粒をわ ずかに、3mm以下の透明光沢粒を少し、 1mm以下の灰褐色粒・角閃石をごくわ ずかに含む	
41	5-25	Ⅱ～Ⅲ	深鉢	口縁		横ナデ 格子目押壓文	側方向のナデ後、横方 向のナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y7/2)	1mm以下の灰白色粒・透明光沢粒を ごくわずかに含む	SP30より出土
42	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、短枝回転文	横方向のナデ	にぶい相 (2.5Y6/3)	明赤褐 (10YR7/6)	4mm以下の灰褐色粒・2mm以下の灰 褐色粒・透明光沢粒・角閃石を少し含 む	
43	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ、短枝回転文	横方向の丁寧なナデ	暗褐 (2.5Y4/2)	にぶい相 (10YR7/4)	4mm以下の灰白色粒・2mm以下の角 閃石・1mm以下の透明光沢粒をわ ずかに含む	
44	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ 繩系文	横方向のナデ	相 (2.5Y6/2)	浅黄 (2.5Y7/3)	6mm以下の黄褐色粒・3mm以下の灰 褐色粒・1mm以下の黒色光沢 粒・半透明光沢粒をわずかに含む	
45	5-2N	Ⅲ	深鉢	口縁		山形押型文ナデ 横方向のナデ	山形押型文ナデ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	2mm以下の半透明光沢粒・黒褐色粒 をごくわずかに含む	
46	5-25	Ⅲ	深鉢	口縁		ナデ 斜方向の沈線文	斜方向のナデ?	相 (7.5YR6/6)	明赤褐 (7.5YR5/6)	3mm以下の灰白色粒をごくわずかに、 1mm以下の透明光沢粒をごくわずか に含む	
47	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の貝殻刷文 横方向の貝殻刷文	斜方向のナデ	浅黄褐 (10YR8/4)	明赤褐 (10YR7/6)	2mm以下の灰白色粒をごくわずかに 含む	
48	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		貝殻刷文	縱方向の丁寧なナデ	にぶい相 (10YR7/3)	にぶい相 (10YR7/3)	1mm以下の灰白色粒をごくわずかに 含む	

第18表 繩文時代早期土器觀察表(2)

測定番号	調査区	出土位置	器種	部位	法量(cm)	文様・調査等		色調		胎土	備考	
						外 面	内 面	外 面	内 面			
49	5-25	IV	深鉢	胴部		貝殻版面による押圧か?	ナデ	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR7/3)	2mm以下の透明光沢粒をわずかに、1mm以下の黒色光沢粒を白褐色粒をぐくわざかに含む		
50	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		貝殻版面刻文	縦方向のナデ	にぶい黄褐(10YR7/4)	にぶい黄(2.5YR6/3)	1mm以下の灰白色粒をぐくわざかに含む		
51	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の貝殻条文	縦方向の丁寧なナデ	にぶい黄褐(10YR7/3)	にぶい黄(10YR7/3)	1mm以下の灰白色粒をぐくわざかに含む		
52	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の貝殻条文	横方向のナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	黒(7.5YR4/4)	4mm以下の灰白色粒・3mm以下の褐色粒をぐくわざかに、2mm以下の透明光沢粒を白褐色粒をぐくわざかに含む		
53	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		斜方向の条痕	ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	2mm以下の透明光沢粒を多く、2mm以下の灰白色粒・黑色光沢粒・褐色光沢粒を白褐色粒をぐくわざかに含む		
54	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の貝殻条文、横・斜方向のナデ	横方向のナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	黒(2.5YR6/8)	3mm以下の灰白色粒・2mm以下の褐色粒・灰白色粒をぐくわざかに、1mm以下の透明光沢粒を少々含む		
55	5-25	Tr12BII	深鉢	胴部		斜方向の条痕か?上端面に纏化が見られる	ナデか?纏化が著しいため調整不	にぶい黄褐(10YR7/4)	明赤褐(10YR7/6)	3mm以下の灰白色粒を白褐色粒に、1.5mm以下の灰白色粒を多く、1mm以下の黒色光沢粒を白褐色粒をぐくわざかに、複数の透明光沢粒を少々含む		
56	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		縦・斜方向の条痕	縦方向のナデ	にぶい黄褐(10YR7/4)	灰黃褐(10YR6/2)	5mm以下の灰白色粒をぐくわざかに、2mm以下の透明光沢粒を少し含む		
57	5-25		深鉢	胴部		斜方向のナデ(風化が著しい)	横方向のナデ	浅黄褐(7.5YR6/6)	黒(7.5YR7/6)	3mm以下の灰白色粒を白褐色粒に、3mm以下の黒色光沢粒・透明光沢粒・黑色光沢粒を白褐色粒をぐくわざかに含む		
58	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		斜方向のナデ後縦方向	ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	にぶい黄褐(10YR6/3)	6mm以下の灰白色粒を白褐色粒に、1mm以下の透明光沢粒を少し含む		
59	5-25		深鉢	胴部		縦方向のミガキ	ナデ	にぶい褐(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR6/4)	5mm以下の灰白色粒・3mm以下の角型石を少し、3mm以下の明赤褐色・褐色光沢粒・1mm以下の透明光沢粒に白い光沢粒を白褐色粒に、2mm以下の黒色粒をぐくわざかに含む	SP5より出土	
60	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向のナデ	横方向のナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	2mm以下の灰白色粒・褐色光沢粒・白色透明光沢粒をぐくわざかに、1mm以下の透明光沢粒を少し、1mm以下の白色光沢粒・黑色光沢粒を白褐色粒に含む		
61	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向の丁寧なナデ、ミガキ	風化しやすく調整不明	灰白(2.5YR2/)	灰黃(2.5YR7/2)	2mm以下の灰白色粒を白褐色粒に、1mm以下の透明光沢粒を白褐色粒に含む		
62	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		横方向のナデ	ナデ	にぶい褐(7.5YR6/4)	にぶい褐(7.5YR6/4)	2mm以下の灰白色粒・1mm以下の角型石を白褐色粒に、1mm以下の透明光沢粒を白褐色粒に含む	穿孔(未通過)あり	
63	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		横円押型文	ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	赤褐(2.5YR4/8)	4mm以下の明赤褐色を白褐色に、4mm以下の灰白色・2mm以下の灰白色粒・1mm以下の褐色光沢粒を白褐色粒に、1mm以下の透明光沢粒を白褐色粒に含む		
64	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		山形押型文	ナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	黑褐(10YR3/2)	3mm以下の灰白色・2mm以下の黑色に白い光沢粒・透明光沢粒に白い光沢粒を白褐色粒に含む		
65	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		山形押型文	ナデ	にぶい黄褐(10YR7/3)	にぶい黄褐(10YR7/3)	4mm以下の褐色光沢粒を白褐色粒に、1mm以下の透明光沢粒を白褐色粒に含む		
66	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		ナデ後、横方向の羽状網目線文	縦方向のミガキ	黒(5YR6/6)	にぶい黄褐(10YR6/3)	2mm以下の灰白色光沢粒を多く、2mm以下の褐色光沢粒を白褐色粒に、1mm以下の透明光沢粒を白褐色粒に含む		
67	5-25	I	深鉢	胴部		ナデ、短柱目線文	ナデ	にぶい黄褐(10YR7/3)	灰黃褐(10YR6/2)	2mm以下の灰白色粒に白褐色粒を白褐色粒に含む	SP30より出土	
68	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		菱形押型文	横方向のナデ	黒(5YR6/6)	黒(5YR6/6)	3mm以下の灰白色粒・2mm以下の褐色光沢粒を白褐色粒に含む		
69	5-25	Ⅲ	深鉢	胴部		山形押型文 刻目突部 ナデ	斜方向のナデ	明赤褐(5YR5/6)	灰黃褐(10YR5/2)	4mm以下の褐色光沢粒・2mm以下の透明光沢粒に白い光沢粒を白褐色粒に含む		
70	5-25		深鉢	胴部		横方向のナデ 刻目突部文 山形押型文	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	灰黃褐(7.5YR6/2)	3mm以下の灰白色・褐色光沢粒・2mm以下の半透明の白い光沢粒・白色光沢粒・1mm以下の透明光沢粒・黑色光沢粒を白褐色粒に含む		
71	5-25	Ⅲ	深鉢	底部	口径(4.6)	貝殻条文、ナデ	ナデ	浅黄褐(2.5YR8/3)	灰黃(2.5YR7/2)	3mm以下の灰白色・黑色光沢粒を白褐色粒に含む		
72	5-25	Ⅲ	深鉢	底部	口径(8.2)	丁寧なナデ	風化しやすく調整不明	浅黄褐(7.5YR8/6)	灰褐(10YR6/1)	2mm以下の灰白色粒を白褐色粒に含む		
73	5-25	Ⅲ	深鉢	底部	口径(9.0)	貝殻条文、縦・横代底	ナデ	浅黄褐(7.5YR8/6)	浅黄褐(7.5YR8/6)	1mm以下の灰白色粒を白褐色粒に含む		
74	5-25	Ⅲ	深鉢	底部	口径(4.8)	縦方向のナデ 網目線文?	ナデ	黒(5YR6/8)	黒(5YR6/6)	4mm以下の灰白色粒を多く、1mm以下の透明光沢粒を白褐色粒に含む		
75	5-25	Ⅲ	深鉢	底部	口径(7.0)	斜方向のナデ 網目線文?	横方向の貝殻条文?	横方向のナデ	明赤褐(2.5YR5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	3mm以下の灰白色粒・黑色光沢粒を白褐色粒に含む	

石器（第41～50図・第19～21表）

縄文時代早期の石器は第2地点N区・S区あわせ、約800点が出土している。そのうち、33点を図化した。出土層位はⅢ層上面からⅢ層中の下部にかけてであるが、一部IV層中上面で出土したものも含まれている。分布の中心はS区中央、B10～11・C11グリッドで、確認された器種は、石鑿・楔形石器・スクレイパー・石核・石斧・粗製剥片石器・剥片・磨石・敲石・台石である。以下、器種ごとに報告する。

石鑿（第41図76～84）

石鑿は14点出土し、9点を図化した。平面形態からほぼ正三角形を呈するもの（I類）と二等辺三角形を呈するもの（II類）に大別できる。使用石材は黒曜石1点、チャート8点である。

76・77・83はI類に相当する。基部はほぼ直線的である。76は正面右脚側に節理がみられる。石材は黒曜石。77は正面に多く調整を施し裏面の調整は最小限である。ややずんぐりした形状である。チャート製。83は基部がやや外に膨らみ丸みがある。81・82はチャート製、片脚を欠損している。

78～80・84はII類である。78は基部に浅い抉りを有する。中央部に斜め方向に節理がみられる。79・80・84はU字状の抉りをもつ。79は両側縁が外に膨らむ。84は先端部を欠損しているが、現存最大長3.35cmの大型品である。石材はチャート製、正面・裏面とも節理のためか不規則な剥離が多い。

楔形石器（第41図85）

楔形石器は1点のみ出土している。チャートのやや厚手の剥片を素材としている。左側縁にはつぶれ状の交互剥離が認められる。

スクレイパー（第41図86～93）

86は珪質頁岩製である。円盤から作出了した剥片を利用し、左右両側縁を加工し鋸歯状の刃部を形成している。87・89は両側縁および下縁に粗い剥離を施している。ともに自然面を残す。断面形は打点から下縁に向かいやすや銳利になる。形態上は粗製剥片石器とも分類できるが、刃部の付き方からスクレイパーとした。90はチャート製で、刃部は両面から調整される。91は全周にわたり粗い剥

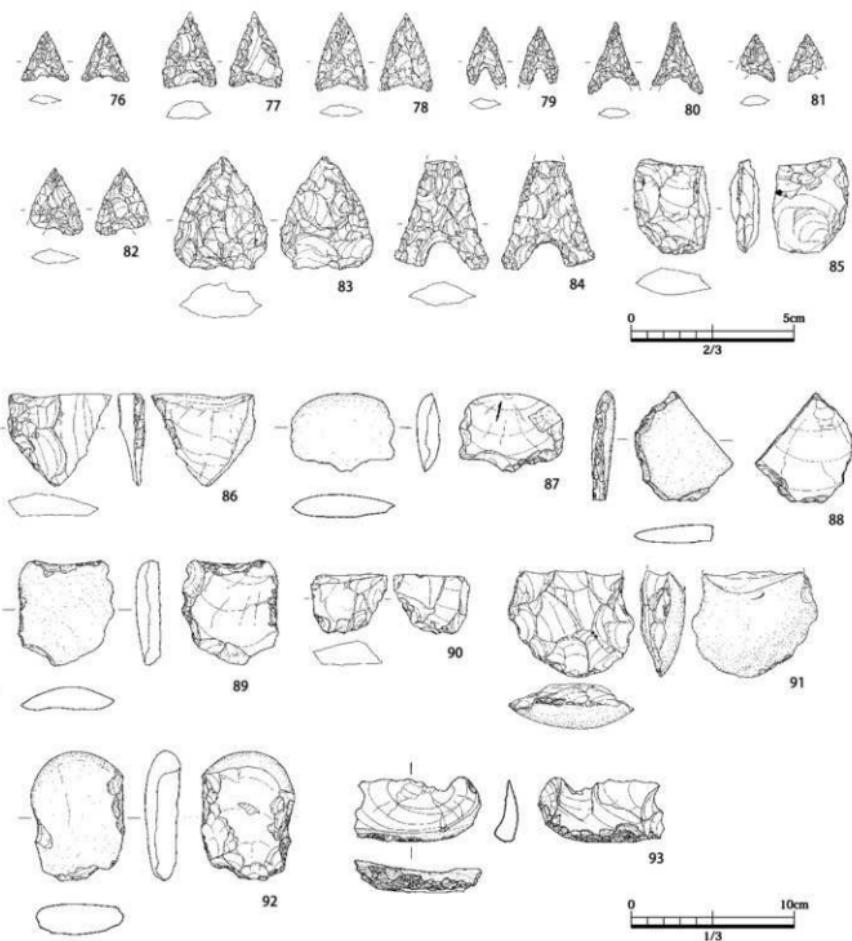
離を施し、下縁はさらに礫面側から細かな剥離が施されている。石材はホルンフェルス。92は砂岩製である。両側縁に粗い剥離が施され刃部を形成している。上縁には自然面が残る。石斧の未製品の可能性もある。93は背面が円盤面から剥離されたまま調整が施されていない。意図した形状ではなかった可能性があるが、横長に薄い剥片となつたホルンフェルスの下縁を細かく剥離し刃部を作り出している。

石核（第42・43図94～106）

石核は13点図化した。本遺跡内の石核は主として粗製剥片石器の素材を獲得するため使用された可能性がある。特に94～100までは円盤を素材とし、粗製剥片石器を削出した残核と考えられる。一方、剥片を削出後、本体も核上面に残る鋭角な剥離を刃部としスクレイパーとしての機能を有していた可能性もある。いずれも自然面を残し、連続した剥離作業を行っていたとみられる。95は下位に向かって階段状に剥離がみられる。99の石材はホルンフェルスである。下位の刃部になるにつれ剥離が小さくなる。100は大きく粗い剥離を行つた後、側縁に細かな剥離を連続して施している。101の上部は大きな剥離、下縁には小さな剥離がみられる。102は小型の頁岩の円盤を素材としている。上面には両側縁から剥離を施し刃部を形成している。103の側縁には階段状の剥離が多く認められる。104はホルンフェルス製の石核である。打面を変えながら連続して剥片を削出している。105は拳大的円盤を素材としている。106は頁岩製である。105・106ともに大ぶりな剥片剥離が認められる。

石斧（第44図107～115）

9点確認され、すべてS区より出土した打製石斧である。107は砂岩を素材とした扁平な石斧である。粗い剥離の後、両側面から細かな剥離により刃部が形成されている。108～112は裏面に大きく自然面を残す。礫面側から粗い加工を行い、両側縁が直線的になるよう調整される。109～115は断面形が台形状となる。108は裏面中央部の両側縁に明瞭な抉りが認められる。109・110は厚みのある礫を分割し、両側縁に急角度での剥離がみられる。また、縱方向の断面形状が舟底形を呈する。

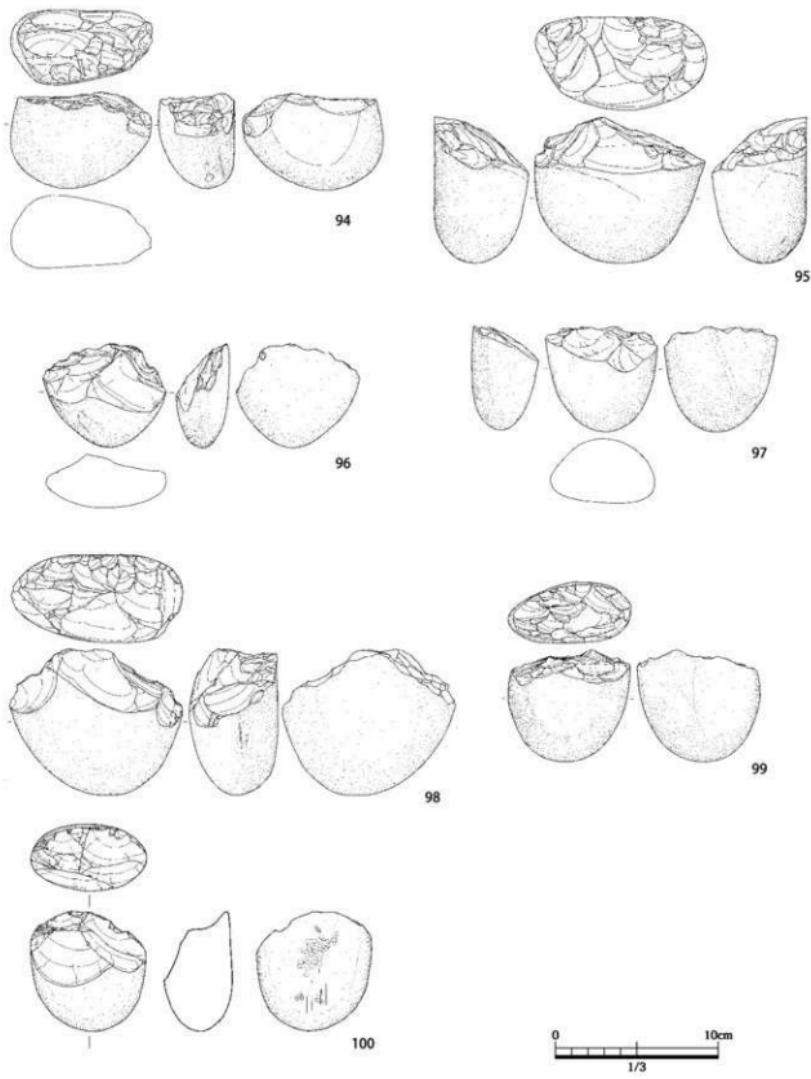


第41図 縄文時代早期出土遺物実測図(4)

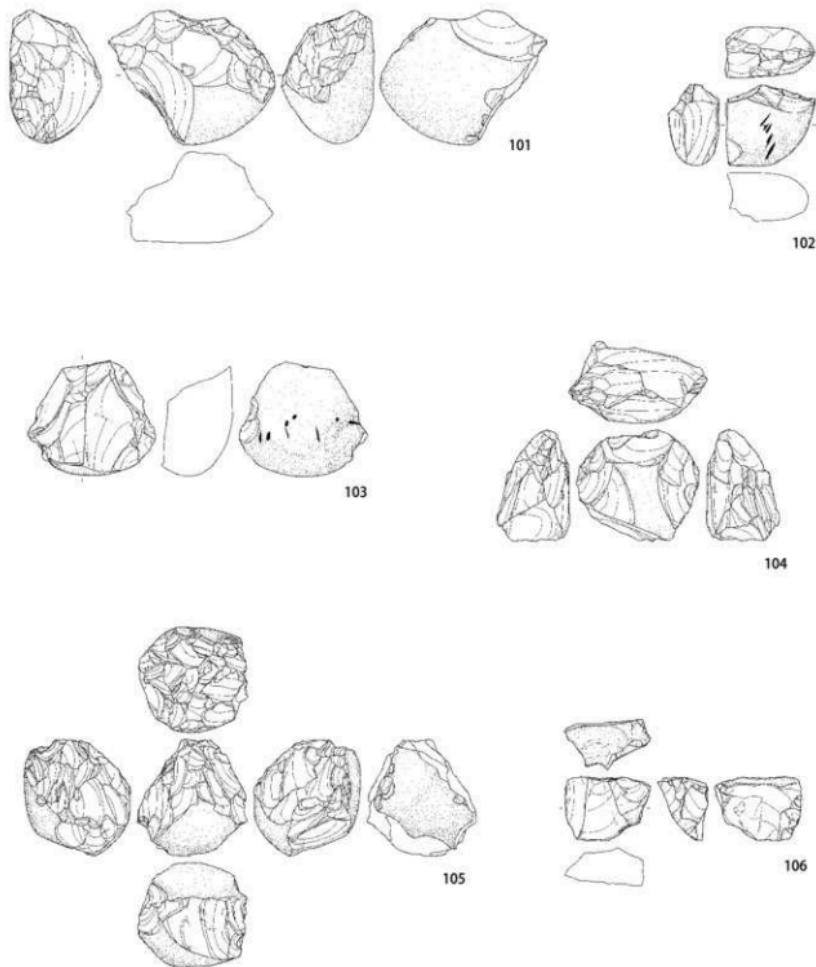
日向市の岡遺跡（第15次調査）で類似の資料（第72図115）が出土している。111はリダクションされている。石材はホルンフェルス。113・114は砂岩製の石斧未製品である。112・115は刃部を欠損している。ともに石材はホルンフェルスである。

粗製剥片石器（第45・46図116～145）

粗製剥片石器は29点を図化した。本遺跡で最も主体となる器種と考えられる。出土した粗製剥片石器はすべて、何らかの二次的な加工が施されている。断面形は打点から下線に向かい鋭利になるものと半月状になるものがある。形態と刃部の剥離によりI～V類の5類に細分した。

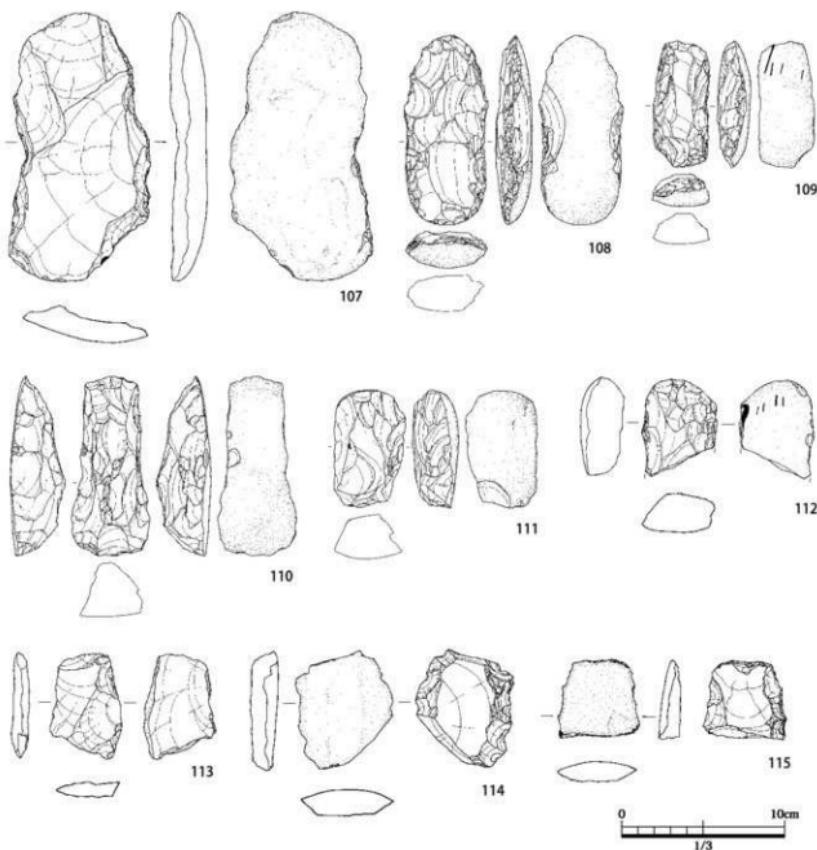


第42図 繩文時代早期出土遺物実測図(5)



0 10cm
1/3

第43図 繩文時代早期出土遺物実測図(6)



第44図 繩文時代早期出土遺物実測図(7)

I類（第45図116～124）

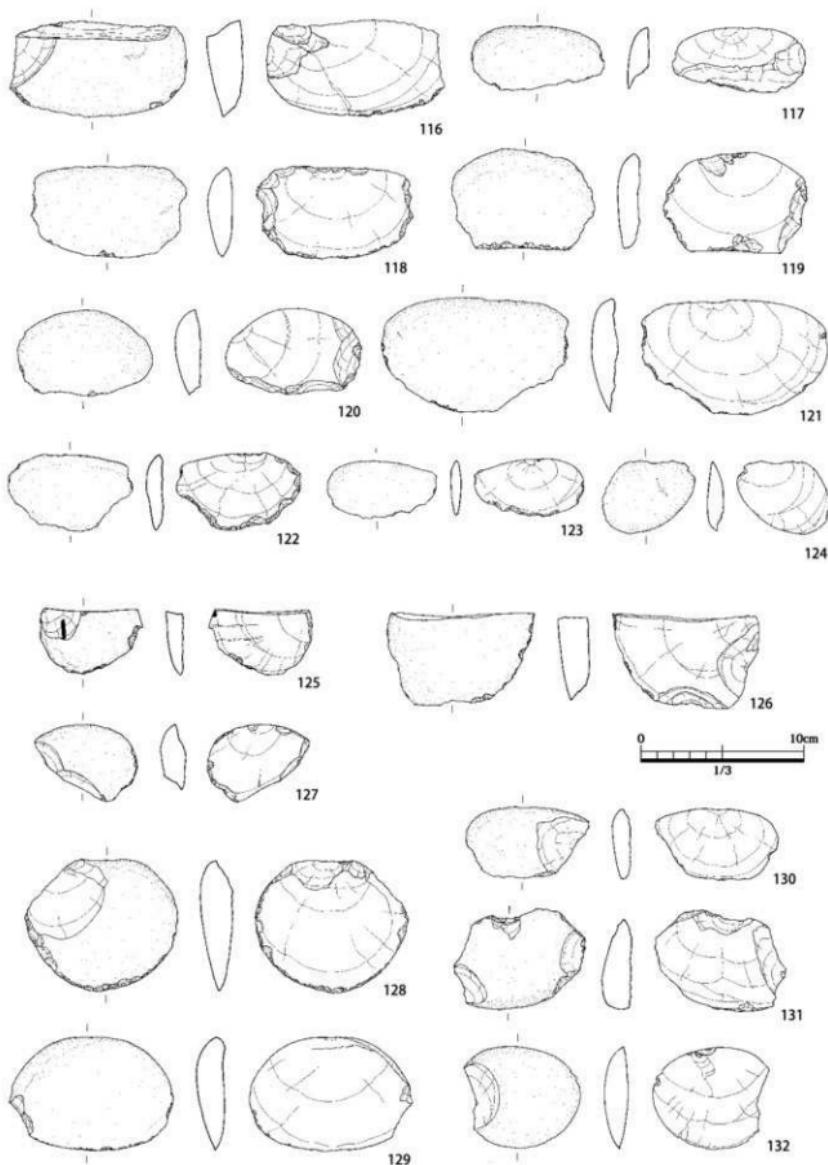
背面に自然面を残す横長の剥片を素材として下縁や側縁に二次的な粗い加工がみられる。断面形は打点側と下縁の厚みにあまり差がみられない。116～122は砂岩、123・124はホルンフェルス製である。

II類（第45図125・126）

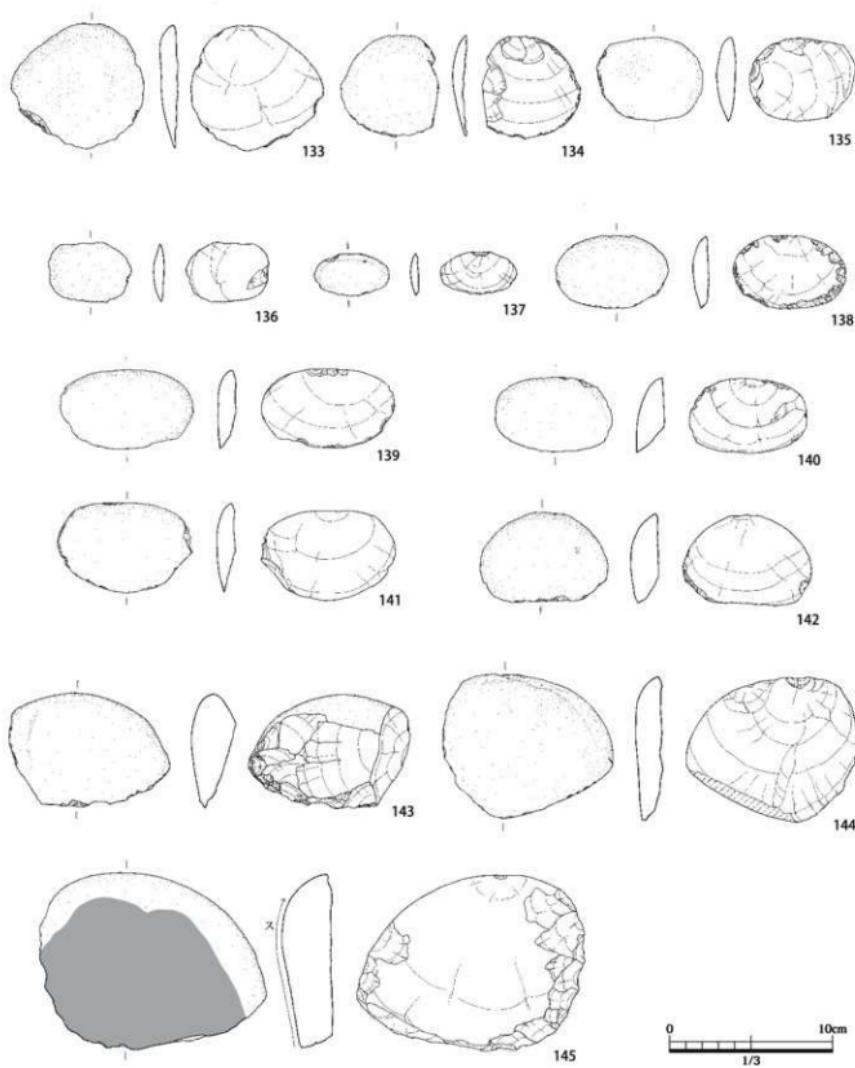
背面に自然面を残し平面形が半月状を呈する。125・126ともにホルンフェルス製であり、右側縁と下縁に細かな剥離が認められる。

III類（第45・46図128・129・131～135）

背面に自然面を残し平面形が円形を呈する。下縁に微細な剥離痕跡が認められる。スクレイバー的な機能をもっていたと考えられる。131・132は側縁に粗い剥離がみられる。128・129・131・132の断面形は打点側と下縁の厚みにあまり差がないレンズ状であり、133～135は下縁に向かい鋭利な形状である。128・131・133は砂岩製、129・132・134・135はホルンフェルス製である。



第45図 繩文時代早期出土遺物実測図(8)



第46図 繩文時代早期出土遺物実測図(9)

IV類（第46図136～142）

背面に自然面を残し、楕円形を基本とする。下縁部に向かい鋭利な断面形状である。136～137は小型で下縁に微細な剥離がみられる。ともにホルンフェルス製。138の外周には連続する剥離が認められる。石材は砂岩である。139は裏面の上端には連続した、右側縁から下縁にかけては不連続な剥離がみられる。

140の腹面は1回の打撃で大きな剥離面を形成し、その後、側面を調整している。141の腹面には左側縁から下縁にかけて連続する微細な剥離が認められる。139～141はホルンフェルス製である。142は砂岩製の粗製剥片石器である。

V類（第45・46図127・130・143～145）

I～IV類以外のものを一括した。127・144はホルンフェルス製、130・143は砂岩製である。143の腹面には粗い剥離がみられる。144の下面には節理がみられる。145は重量623gと遺跡内最大の粗製剥片石器である。腹面に大きな連続した剥離が認められる。向原中尾第5遺跡で出土した粗製剥片石器の中でこの1点のみ石材が尾鈴山溶結凝灰岩である。

剥片（第47～49図146～180）

剥片はⅢ層上部からⅣ層上面にかけて出土がみられる。Ⅳ層上面から出土した剥片の中には繩文時代早期以前のものが含まれている可能性もある。146～148・150～161は円盤を素材とする剥片であり、一部に礫面が残されている。すべてホルンフェルス製である。146・147・155・156は幅広の剥片である。148は石核の剥片である。150は95と同一個体の可能性もある。154は下縁に礫面側から粗い連続した剥離がみられる。157は石斧の未製品の可能性もある。158は裏面の大部分に節理が観察される。161は左右両側縁に連続する粗い剥離が施されている。打製石斧を再利用した剥片か。149・162・163はチャート製の剥片である。149は赤色を呈する。164～166は黒曜石製である。164・165はN区から出土し、桑ノ木津留産である。透明度が高く、一部気泡を含んでいる。166の正面には古い段階と考えられる剥離が認められる。細石刃を削出するためのプランクの可能性も

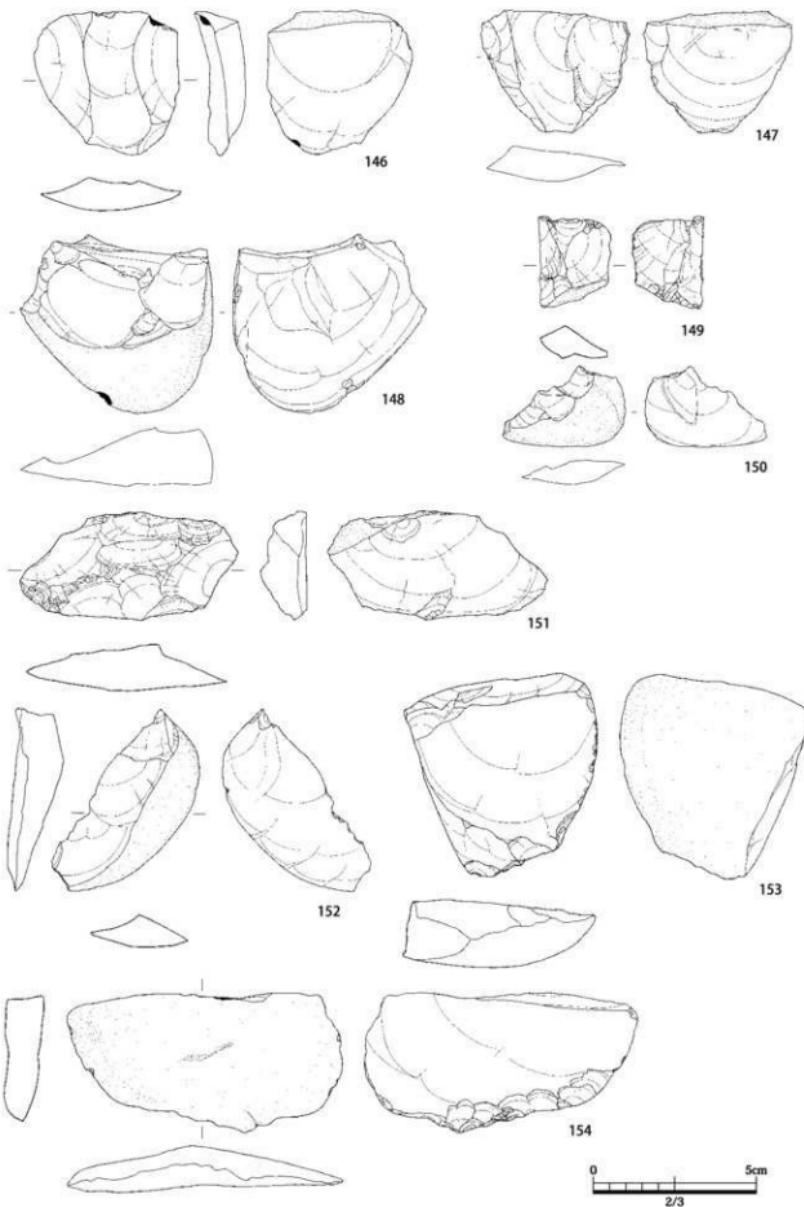
ある。167・171・173はホルンフェルス製である。167は幅広の剥片である。裏面に自然面を残す。169は左側縁および下縁に微細な二次加工が施されている。168・172は頁岩製である。168は上縁側縁および下縁に微細な剥離痕跡が認められる。右側縁には粗い剥離が認められる。172は不定形な薄い剥片である。表面に粗い剥離がみられる。170は白色の流紋岩製である。174～176・179は二次加工ある剥片である。174～176はチャート製、179は赤色の頁岩製である。175は左右両側縁に微細な剥離が認められる。176は乳白色を呈する無光沢のチャート製である。上面には節理がみられる。177・178・180の上面には自然面が残る。石材はホルンフェルスである。178の下縁には微細な剥離が認められる。

磨石（第50図181～184）

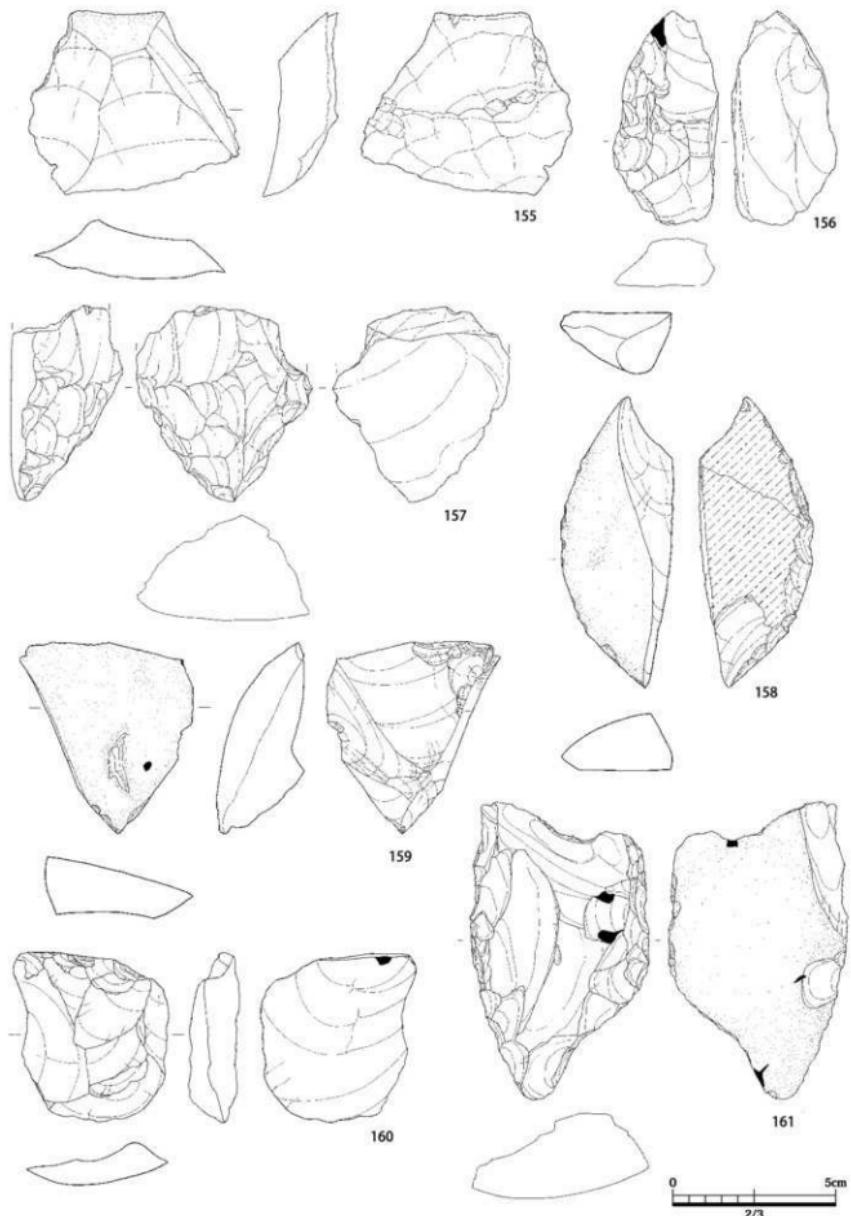
4点すべてが尾鈴山溶結凝灰岩の円盤を素材としている。181は表裏両面に顯著な磨面がみられる。182は表裏両側面の4面に磨痕が認められる。183・184は大型の磨石である。183はS区の7号集石遺構（S I 7）から出土している。被熱のために全面に赤化が認められる。上部を欠損するが、最大長12.1cm、重量約700gを計る。184の右側縁には敲打痕が残る。重量は1,423g。

敲石（第50図185～188）

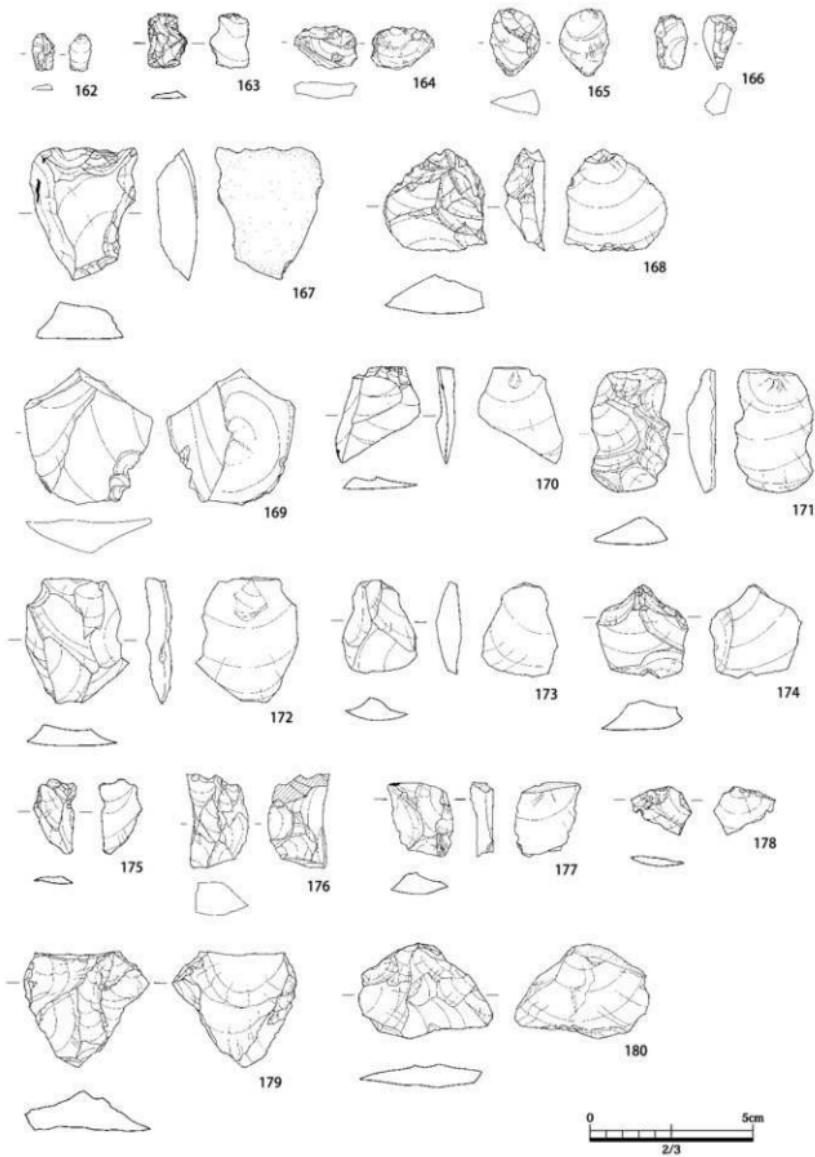
4点すべてが欠損している。185・186は尾鈴山溶結凝灰岩の円盤を素材としている。185は左右両側縁に平坦面を形成するほど明瞭な磨面が認められる。右側縁下部は磨痕の後、敲打がみられる。敲打痕は下面にも認められる。186は表裏両面および右側面下部に磨面が観察される。下面には顯著な敲打痕がみられる。187はN区の3号集石遺構（S I 3）より出土している。楕円形を呈する尾鈴山溶結凝灰岩を素材としている。表裏両面、特に表面に磨痕が認められる。下部に敲打痕が残る。188は砂岩製の敲石である。下縁部と左右両側縁の3面に顯著な敲打痕が観察される。上部および右側縁に粗く大きな剥離が認められる。欠損した石核を再利用したものか。



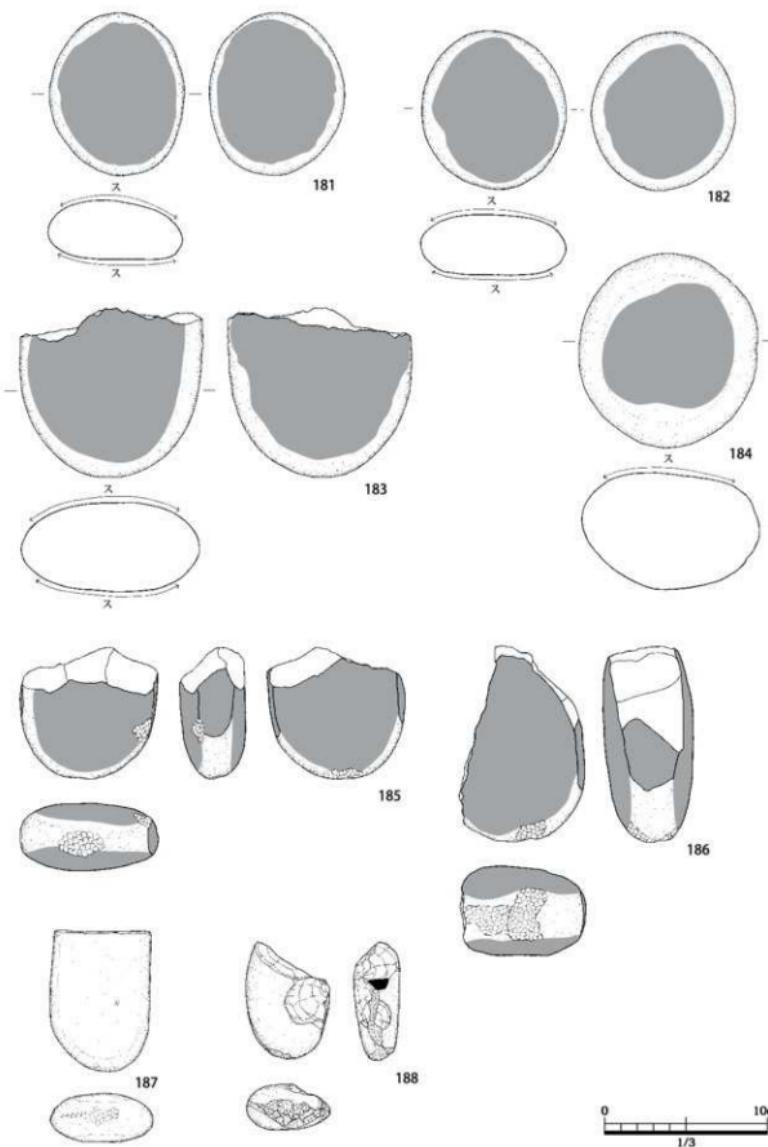
第47図 繩文時代早期出土遺物実測図(10)



第48図 繩文時代早期出土遺物実測図(11)



第49図 繩文時代早期出土遺物実測図(12)



第50図 繩文時代早期出土遺物実測図(13)

第19表 織文時代早期石器計測表(1)

測定 番号	調査区	出土層位	器種	石材	法面(cm.g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
76	5-2S	IV	石器	黒曜石	1.5	1.5	0.2	0.4	(黒・露島産?)正面右脚側に節理
77	5-2S	III	石器	チャート	2.2	1.7	0.6	1.7	(赤茶色チャート)正面に多く剥離を施し、裏面はサイドに最小限の調整で終わるぎりぎりした形状である
78	5-2S	III	石器	チャート	2.3	1.6	0.4	1.1	(黒灰色チャート)正面右脚側欠損、ほぼ中央を斜めに節理が走るが良質、調整はやや右肩側
79	5-2N	III	石器	チャート	1.8	1.2	0.3	0.5	(灰緑色チャート)正面右脚欠損。調整は、サイドは規則的
80	5-2S	III	石器	チャート	2.2	1.5	0.3	0.6	(透白色系チャート)正面右脚欠損良質で不純物が少ないため、リングが明瞭 S P Sより出土
81	5-2S	III	石器	チャート	1.4	1.0	0.3	0.3	(透白色系チャート)正面左脚欠損、正面側の断面はふくれる
82	5-2N	III	石器	チャート	2.1	1.6	0.5	1.3	(透白色系チャート)正面左脚欠損
83	5-2S	III	石器	無光沢チャート	3.5	2.9	1.1	10.4	(黒色チャート)石材自体に多くの節理があり、それに沿って剥離する部分もある。正面中央に調整が多い
84	5-2S	III	石器	チャート	3.4	2.9	0.7	4.8	(灰緑色チャート)正面・裏面ともに、節理により剥離が不規則になる部分が多い
85	5-2S	III	器種	チャート	2.8	2.3	0.8	6.4	(灰白チャート)左側縁は交互に剥離、やや部厚めの剥片を使用
86	5-2S	III	器種	流紋岩	5.6	6.2	1.4	47.4	(珪質岩)円錐核の大きな剥片を、左右の側縁を加工
87	5-2S	III	スクレイバー	ホルンフェルス	4.8	6.4	1.4	54.7	
88	5-2S	III	スクレイバー	ホルンフェルス	6.8	6.0	1.2	50.8	
89	5-2S		スクレイバー	ホルンフェルス	6.5	5.9	1.5	70.4	S 18より出土
90	5-2S	IV	器種	無光沢チャート	3.6	4.7	1.7	28.3	刃部は両面から調整され、交互剥離状剥離のリングが明瞭
91	5-2S	III	器種	ホルンフェルス	6.5	7.2	2.8	144.0	裏面にはほとんど調整はみられない
92	5-2S	III	石斧	砂岩	8.3	5.7	1.9	128.3	
93	5-2S	Ⅲ下	剥片	ホルンフェルス	4.0	7.8	1.4	42.9	
94	5-2S	III	石核	ホルンフェルス	5.7	8.6	4.5	333.0	(真岩)裏面中央は平滑に仕上げられる
95	5-2S	III	石核	ホルンフェルス?	9.0	10.5	5.8	707.5	(真岩)下位に向い、階段状剥離が著しい
96	5-2S	II	器種	ホルンフェルス	6.4	7.4	3.2	169.0	大剥離の後、小剥離作業を片面に行う
97	5-2S	III	石核	ホルンフェルス	6.4	6.4	4.1	229.0	(真岩)スクレイバーの可能性あり
98	5-2S	III	器種	尾鷲山溶結凝灰岩	9.0	10.6	5.4	635.0	上面側には大きな剥離が残る。円錐の2/3程度の成品
99	5-2S	III	器種	ホルンフェルス	6.5	7.4	3.8	269.5	下位の刃部になるほど、剥離は小さい
100	5-2S	III	石核	ホルンフェルス	7.4	7.1	4.2	261.7	
101	5-2S	IV	石核	ホルンフェルス	7.9	8.6	5.6	470.5	上部は大きな剥離であり、下位の核には小剥離が認められる。
102	5-2S	Ⅲ下部-Ⅲ上部	石核	ホルンフェルス	5.0	5.5	3.1	110.5	(真岩)上面の一部に刃部かと考えられる部分あり。小形の円錐を利用
103	5-2S	III	石核	ホルンフェルス	7.0	8.0	4.1	237.5	大ぶりな剥離痕が残るが、側縁は階段状剥離も多い
104	5-2S	III	石核	ホルンフェルス	6.7	7.5	4.0	233.0	裏面に大きな剥離がみられる。
105	5-2S	III	石核	ホルンフェルス	7.2	6.7	6.5	352.0	拳小程度の円錐。大きな剥離は底面の一枚
106	5-2S	IV上	石核	真岩	3.9	5.2	1.8	60.8	(正面には大ぶりな剥離片採取がうがえ、上面には転石時の剥離痕が残る)
107	5-2S	III	石斧	砂岩	15.6	8.7	1.7	340.0	
108	5-2S	III	石斧	ホルンフェルス	11.7	5.2	2.2	175.5	中央には浅い抉りを施す。円錐を利用
109	5-2S	III	石斧	ホルンフェルス	7.8	3.4	1.9	7.0	側縁の調整が著しい
110	5-2S	III	石斧	ホルンフェルス	11.0	4.8	3.3	180.0	

第20表 繩文時代早期石器計測表(2)

標図 番号	調査区	出土層位	器種	石材	法量(cm.g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
111	5-2S	III	石斧	ホルンフェルス	7.2	4.3	2.7	117.5	風化が甚しい。リダクションしている
112	5-2S	III	石斧	ホルンフェルス	6.1	4.6	2.4	84.9	
113	5-2S	III	石斧	砂岩	6.5	4.4	1.2	32.2	
114	5-2S	III	剥片	砂岩	7.3	6.0	1.7	90.4	
115	5-2S	II	剥片	ホルンフェルス	4.9	5.1	1.2	36.6	
116	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	5.9	10.9	2.2	179.0	
117	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	4.0	8.1	1.7	44.4	
118	5-2S	IV上	粗製剥片石器	砂岩	5.7	9.6	1.5	109.0	
119	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	6.2	8.8	1.8	103.3	
120	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	5.3	8.3	1.6	84.0	
121	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	7.1	11.4	1.6	153.8	S18より出土
122	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	4.8	7.6	1.0	40.4	
123	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	3.5	6.7	0.6	19.0	
124	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.5	5.7	1.0	29.0	
125	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.0	6.3	1.0	33.4	
126	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.7	9.0	2.0	123.9	
127	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.8	6.3	1.6	46.7	
128	5-2S	III	スクレイパー	砂岩	8.2	9.4	1.9	159.3	
129	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	7.0	10.5	1.8	155.2	
130	5-2N		粗製剥片石器	砂岩	4.4	7.5	1.1	40.6	
131	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	6.2	8.0	1.8	96.8	
132	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	6.3	7.1	1.5	20.0	
133	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	7.7	8.1	1.2	71.8	
134	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	6.3	6.0	1.0	34.6	
135	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	6.5	5.1	1.2	49.4	
136	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	3.7	5.1	0.7	14.9	
137	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	2.6	4.6	0.5	6.9	
138	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	4.5	6.9	1.0	37.2	
139	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.9	8.2	1.1	64.4	
140	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	4.6	7.2	1.7	64.3	
141	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	5.5	8.3	1.1	62.7	
142	5-2S	III	粗製剥片石器	砂岩	5.5	8.8	1.8	97.0	
143	5-2S	IV上	粗製剥片石器	砂岩	7.0	9.9	2.8	232.0	S14より出土
144	5-2S	III	粗製剥片石器	ホルンフェルス	8.9	10.5	2.1	231.9	
145	5-2S	III	粗製剥片石器	尾崎山溶結凝灰岩	10.9	13.9	3.2	622.5	
146	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	4.4	4.5	1.0	22.3	
147	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	3.7	4.6	0.9	14.9	やや幅広の剥片
148	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	5.0	5.8	1.8	62.2	石核の剥片
149	5-2S	III	剥片	チャート	2.9	2.2	1.0	6.2	

第21表 繩文時代早期石器計測表(3)

測定 番号	調査区	出土層位	器種	石材	法線(cm.g)				備 考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
150	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	2.5	3.6	0.9	6.1	
151	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	3.4	6.7	1.4	28.2	
152	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	5.6	4.5	1.0	17.9	
153	5-2S	IV	剥片	ホルンフェルス	6.3	5.9	2.1	83.8	
154	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	4.3	8.4	1.2	45.7	
155	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	5.7	6.5	2.3	50.0	
156	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	6.6	3.1	1.6	32.9	幅広の剥片
157	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	5.9	5.3	3.4	92.4	石斧の欠損品か
158	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	9.0	3.5	1.8	54.1	
159	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	5.9	5.3	1.9	52.8	
160	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	5.2	4.8	1.3	34.0	
161	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	8.8	5.5	2.5	131.5	打製石斧折損後の転用?
162	5-2N	IV	剥片	チャート	1.1	0.7	0.2	0.2	
163	5-2S	III	二次加工剥片	チャート	1.7	1.2	0.2	0.5	
164	5-2N	IV	剥片	黒曜石	1.3	1.9	0.5	1.2	桑ノ木津留産?(透度高く、気泡含む)
165	5-2N	III	剥片	黒曜石	2.1	1.5	0.7	1.9	桑ノ木津留産?(透度高く、気泡含む)
166	5-2N	III	剥片	黒曜石	1.7	1.0	1.0	1.4	(鹿島産?)正面には古い段階の剥離が残る
167	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	4.1	3.3	1.2	16.6	
168	5-2S	III	剥片	頁岩	3.2	3.2	1.2	10.4	
169	5-2S	III	剥片	頁岩	4.2	3.9	0.9	12.8	使用剥片か
170	5-2S	III	剥片	流紋岩	3.0	2.6	0.4	2.9	
171	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	3.3	2.4	0.8	7.9	
172	5-2S	III	剥片	頁岩	3.9	3.2	0.7	8.3	
173	5-2S	IV	剥片	ホルンフェルス	2.9	2.3	0.8	3.9	
174	5-2S	III	二次加工剥片	頁岩	2.9	2.8	1.0	0.7	
175	5-2S	III	二次加工剥片	チャート	2.3	1.3	0.3	0.7	
176	5-2S	III	剥片	無光沢チャート	2.9	1.7	1.2	7.4	裏面に節理面が残る
177	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	2.3	2.0	0.7	2.9	
178	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	1.5	1.9	0.3	0.7	
179	5-2S	III	二次加工剥片	頁岩	3.6	3.8	1.2	14.5	
180	5-2S	III	剥片	ホルンフェルス	3.0	4.1	0.8	9.1	
181	5-2S	III	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	10.0	8.3	3.6	450.9	
182	5-2S	III	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	9.7	8.9	3.7	481.4	
183	5-2S	III	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	10.4	10.4	5.5	967.3	S 17より出土
184	5-2S	III	磨石	尾鈴山溶結凝灰岩	12.0	11.1	7.2	1423.9	
185	5-2S	III	磨・敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	8.1	8.4	4.2	388.6	
186	5-2S	III	磨・敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	12.1	7.7	5.5	699.5	
187	5-2N	III	磨・敲石	尾鈴山溶結凝灰岩	8.8	6.2	3.0	263.6	S 13より出土
188	5-2S	III	敲石	砂岩	7.3	5.2	2.9	121.6	

第4節 弥生～古墳時代の遺構と遺物

第2地点S区の東側の調査区境界付近で竪穴建物跡の一部を確認した。また、S区C11グリッド東壁土層断面（第27図）で竪穴建物跡とみられる掘り込みが確認された。調査区のII層中から弥生土器および土師器が少量出土しているものの当該時期の遺構に伴う遺物は確認できなかった。建物跡は集石造構の広がりを確認するため東側の境界付近まで拡張した際、検出された。造成のためII層下部まで削平されていたため、床面付近での検出となつた。

1 遺構

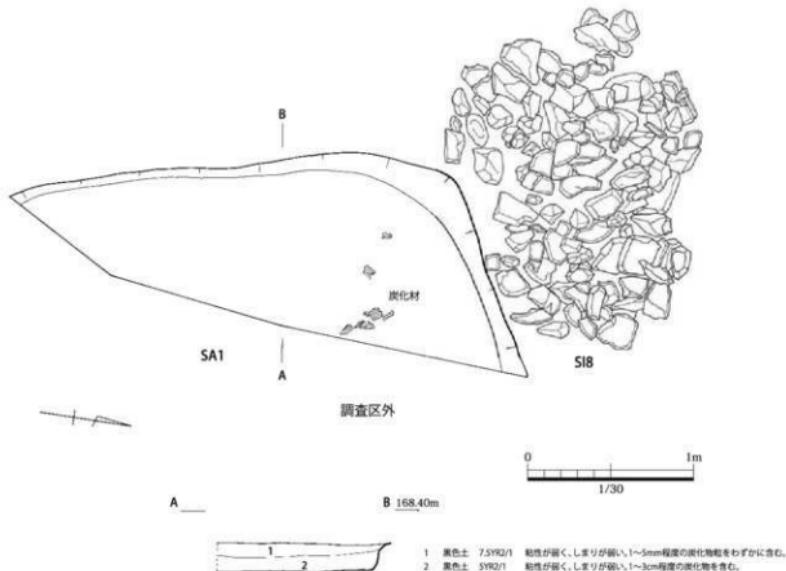
1号竪穴建物跡（SA1）（第31図）

第2地点S区、調査区東側で、焼失竪穴建物跡の一部とみられるコーナーが確認された。建物跡は縄文時代早期の集石造構（S18）を切って構築

されている。床面北側には大きめの炭化物片がまとまって出土しており、放射性炭素年代測定および樹種同定を行っている。測定年代は $1,820 \pm 20$ 年BPを示す。炭化材の樹種はクリであることが確認された。分析の詳細は第5節に記載している。竪穴建物跡の大部分は調査区外へ広がっていると考えられる。現存規模は、長軸約1.2m、短軸約0.7m、検出面からの深さ約0.1mを測る。遺構は調査区境界の壁面の土層に段差が確認される箇所があったことから花弁状住居跡の可能性も考えられる。

2号竪穴建物跡（SA2）（第27図）

竪穴建物跡はトレンチと搅乱のため、消失しており詳細は不明である。現存長約3.3m、深さ約0.4mを測る。貼床と考えられる埋土堆積状況や焼土粒の残存が認められた。

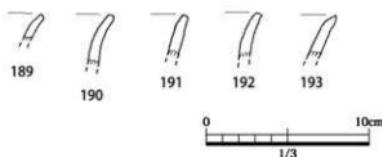


第51図 S区SA1実測図

2 遺物

土器 (第52図・第22表 189~193)

弥生時代～古墳時代と考えられる土器5点を図化した。すべて縫ないし壺の口縁部である。189・192の端部は面取りされる。189・191は外面にススの付着が認められる。190はやや外反気味である。191の口縁は丸くおさめられる。193はやや尖り気味である。



第52図 出出土器実測図

第22表 出出土器観察表

検査番号	調査区	出土層位	器種	部位	文様・調整等		色調	胎土	備考
					外 面	内 面			
189	5-25	Ⅲ層	壺or壺	口縁	横ナデ	横ナデ	にふり相 (10YR7/4)	浅黄緑 (10YR8/4)	1mm以下の灰白色粒をごくわずかに含む 外面スス付着
190	5-25	Ⅲ層	壺or壺	口縁	横ナデ	横ナデ	黒褐色 (7,5YR5/1)	明赤褐色 (SYR5/6)	2mm以下の灰白色粒、1mm以下の半透明 光沢粒を含む
191	5-25	Ⅲ層	壺or壺	口縁	横ナデ・スス付着	横ナデ	黒褐色 (5YR2/1)	にふり黄緑 (10YR7/4)	3mm以下の灰白色粒をわずかに含む 1mm以下の赤褐色粒、微細な透明粒を含む
192	5-25	Ⅲ層	壺or壺	口縁	横ナデ	横ナデ	暗 (7,5YR6/8)	暗 (7,5YR6/8)	2mm以下の灰白色粒をわずかに含む、1mm 以下の黒色・半透明光沢粒を含む
193	5-25	Ⅲ層	壺or壺	口縁	横ナデ	横ナデ	暗 (5YR7/8)	暗 (5YR7/8)	2mm以下の灰白色粒をわずかに含む、1mm 以下の黒色・半透明光沢粒を含む

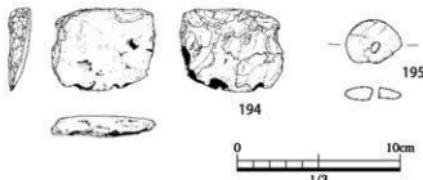
石器 (第53図・第23表)

石庖丁 (194)

石材は頁岩である。左側縁に抉りの可能性がある
る剥離が認められ、下縁に擦痕が観察される。裏
面の大部分は欠損している。断定はできないが、
石斧様の石器を再利用した石庖丁の可能性が考
えられたためここに掲載した。

不明石器 (第53図195)

先行するトレンチ調査の際、出土したものであ
る。調査者は穿孔のある石器と報告していたもの
であるが、人為的な加工痕跡が認められないことなど
からノジュールの核である可能性も考えられる。



第53図 出出土器実測図

第23表 出出土石器計測表

検査番号	調査区	出土層位	器種	石材	法量(cm,g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
194	5-25	Ⅲ	石庖丁	頁岩	5.1	6.4	1.3	54.3	
195	5-25	Ⅲ	不明石器	チャート	2.7	3.4	0.9	12.2	ノジュールの核か

第5節 自然科学分析の結果

向原中尾第5遺跡では、放射性炭素年代測定、樹種・種実同定を実施した。

放射性炭素年代測定は遺構の年代の確認を目的とし、炉穴・集石遺構・竪穴建物跡から出土した炭化材を対象とした。また、木材の利用を検討するための樹種同定および炉穴から出土した種実遺体を対象とし、植物利用や古植生を検討するため、種実同定を実施した。

1. 炭化材の放射性炭素年代測定・樹種同定

(1) 試料

試料は、炉穴（S P 5, 8, 32）、集石遺構（S I 6）、竪穴建物跡（S A 1）から出土した炭化材5点（試料番号4～8）である。いずれの試料も炭化材の小片が複数認められる。1片での年代測定が難しいことから、先に樹種同定を実施し、複数種類の有無を確認した上で、同じ種類を集めて年代測定試料とする。

(2) 分析方法

①放射性炭素年代測定

試料に土壤や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット・超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国

国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、曆年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

曆年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正することである。曆年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に曆年較正プログラムや曆年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。曆年較正は、測定誤差σ、2σ（σは統計的に真の値が68%、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

②樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・桿目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

第24表 放射性炭素年代測定結果

番号 遺構	材質 (種類)	処理 方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (%)	補正年代 (曆年較正用) BP	曆年較正結果			Code No.	
						誤差	cal BC/AD	cal BP		
No.4 SP5 焼土集中区	炭化材 (クリ)	AAA	9,210±30	-27.04 ± 0.51	9,180±40 (9,180±35)	σ	cal BC 8,436 - cal BC 8,368	cal BP 10,385 - 10,317	0.557	IAAA- 130202
						2σ	cal BC 8,352 - cal BC 8,304	cal BP 10,301 - 10,253	0.443	
							cal BC 8,533 - cal BC 8,516	cal BP 10,482 - 10,465	0.032	
							cal BC 8,479 - cal BC 8,294	cal BP 10,428 - 10,243	0.968	
No.5 SP8 Ⅲ層	炭化材 (クリ)	AAA	9,180±40	-26.16 ± 0.58	9,160±40 (9,161±36)	σ	cal BC 8,426 - cal BC 8,402	cal BP 10,375 - 10,351	0.200	IAAA- 130203
						2σ	cal BC 8,394 - cal BC 8,371	cal BP 10,343 - 10,320	0.185	
							cal BC 8,351 - cal BC 8,296	cal BP 10,300 - 10,245	0.614	
							cal BC 8,526 - cal BC 8,521	cal BP 10,475 - 10,470	0.006	
No.6 SP32	炭化材 (コナラ部)	AAA	8,050±30	-27.11 ± 0.57	8,020±30 (8,018±34)	σ	cal BC 8,468 - cal BC 8,286	cal BP 10,417 - 10,235	0.994	IAAA- 130204
						2σ	cal BC 7,057 - cal BC 7,022	cal BP 9,006 - 8,971	0.292	
							cal BC 7,012 - cal BC 7,006	cal BP 8,961 - 8,955	0.031	
							cal BC 6,969 - cal BC 6,945	cal BP 8,918 - 8,894	0.155	
No.7 SI6	炭化材 (コナラ部)	AAA	9,480±40	-25.87 ± 0.52	9,460±40 (9,463±37)	σ	cal BC 6,936 - cal BC 6,914	cal BP 8,885 - 8,863	0.165	IAAA- 130205
						2σ	cal BC 6,882 - cal BC 6,834	cal BP 8,831 - 8,783	0.357	
							cal BC 7,063 - cal BC 6,821	cal BP 9,012 - 8,770	1.000	
							cal BC 8,801 - cal BC 8,707	cal BP 10,750 - 10,656	0.930	
No.8 SA1	炭化材 (クリ)	AAA	1,820±20	-26.83 ± 0.51	1,790±30 (1,792±25)	σ	cal BC 8,668 - cal BC 8,657	cal BP 10,617 - 10,606	0.070	IAAA- 130206
						2σ	cal BC 9,112 - cal BC 9,085	cal BP 11,061 - 11,034	0.028	
							cal BC 9,049 - cal BC 9,025	cal BP 10,998 - 10,974	0.023	
							cal BC 8,839 - cal BC 8,632	cal BP 10,788 - 10,581	0.950	
						σ	cal AD 142 - cal AD 150	cal BP 1,808 - 1,800	0.048	
						2σ	cal AD 170 - cal AD 193	cal BP 1,780 - 1,757	0.181	
							cal AD 210 - cal AD 257	cal BP 1,740 - 1,693	0.631	
							cal AD 301 - cal AD 317	cal BP 1,649 - 1,633	0.139	
						σ	cal AD 134 - cal AD 260	cal BP 1,816 - 1,690	0.822	
						2σ	cal AD 282 - cal AD 324	cal BP 1,668 - 1,626	0.178	

1) 処理方法はAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。

2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

3) 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

5) 曆年の計算には、RADIO CARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer) を使用した。

6) 曆年の計算には、補正年代に()で曆年較正年代として示した。1桁目を丸める前の値を使用している。

7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、曆年較正曲線や曆年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、曆年較正用年代値は1桁目を丸めていい。

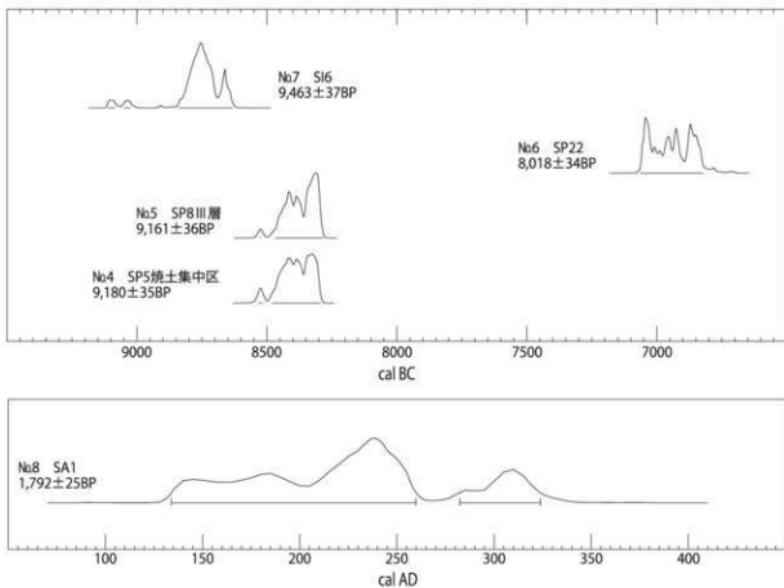
8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である。9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(3) 結果

①放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定および曆年較正結果を表24、第54図に示す。同位体効果の補正を行った補正年代は、試料番号4が9,180±40BP、試料番号5が9,160±40BP、試料番号6が8,020±30BP、試料番号7が9,460±40BP、試料番号8が1,790±30BPを示す。

また、測定誤差を 2σ で計算した曆年較正結果(確率1)は、試料番号4がcalBC8,479~8,294、試料番号5がcalBC8,468~8,286、試料番号6がcalBC7,063~6,821、試料番号7がcalBC8,839~8,632、試料番号8がcalAD134~260である。



第 54 図 歴年較正結果

②樹種同定

樹種同定結果を表25に示す。各試料は、いずれも数mm角の炭化材が複数片認められる状態であった。この中から、相対的に大きく、状態の良い炭化材から順に各5点を抽出して樹種同定を実施した。これらの炭化材は、広葉樹2分類群（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ）に同定された。基本的に、各試料で単一の種類構成となるが、試料番号6では炭化材の他に樹皮が認められた。同定された各種類の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Quercus sect. Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

- ・クリ (*Castanea crenata Sieb. et Zucc.*) ブナ科
クリ属

環孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に

管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1～15細胞高。

第 25 表 樹種同定結果

番号	遺構	位置・層位	点数	状態	種類	備考
4	SP5(炉穴)	焼土集中区	5	小破片	クリ(5)	年代測定資料
5	SP8(炉穴)	Ⅲ層	5	小破片	クリ(5)	年代測定資料
6	SP32(炉穴)		5	小破片	コナラ属コナラ属 コナラ節(2) 樹皮(3)	年代測定資料
7	S16(集石遺構)		5	小破片	コナラ属コナラ属 コナラ節(2)	年代測定資料
8	SA1(穴壁建物跡)		5	小破片	クリ(5)	年代測定資料

1) 種類名の()内の数字は同定点数を示す。

(4) 考察

①遺構の年代

炉穴3基、集石遺構1基、竪穴建物跡1軒から出土した炭化材を対象として放射性年代測定を実施した。縄文時代早期の遺構と考えられる炉穴と集石遺構は、補正年代が9,460±40BP～8,020±30BPを示しており、発掘調査所見とも矛盾しない。

遺構別にみると、炉穴3基のうち、SP5焼土集中区の炭化材の補正年代は9,180±40BP、BP8Ⅲ

層の炭化材の補正年代は9,160±40BPで近接している。暦年較正の結果も考慮すれば、SP 5とSP 8はほぼ同時期の炉穴と考えられる。一方、SP32の炭化材の補正年代は8,020±30BPであり、SP 5およびSP 8よりも約1100~1200年ほど新しい時期の炉穴の可能性がある。また、集石遺構SI 6の炭化材は、補正年代が9,460±40BPであり、暦年較正結果をみても、SP 5やSP 8よりも若干古い時期の遺構と考えられる。

竪穴建物跡SA 1は、アカホヤを含んだ貼り床を持ち、炭化材は床面から出土している。平面プランから弥生時代～古墳時代の住居と考えられる。炭化材の補正年代は1,730±30BPで、暦年較正結果は2～3世紀頃の年代を示しており、調査所見とも調和的である。九州地方の年代測定の事例（西本,2006）と比較すると、住居跡は弥生時代後期～古墳時代前期頃の可能性がある。

②木材利用

炭化材は、コナラ節とクリに同定された。いずれも二次林等を構成する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い。

遺構別に見ると、炉穴ではSP 5とSP 8がクリ、SP32がコナラ節と樹皮であり、いずれも周辺で入手可能な木材を利用したと考えられる。年代測定の結果を考慮すると、同時期と考えられるSP 5とSP 8がいずれもクリで、それよりも新しい時期と考えられるSP32がコナラ節となることから、時期によって木材利用が異なった可能性がある。

集石遺構SI 6は、年代測定の結果からSP 5やSP 8よりも若干古い時期の可能性がある。コナラ節が利用されており、クリが利用されるSP 5やSP 8とは木材利用が異なる。この違いが炉穴と集石遺構での違いを示すのか、時期による違いを示すのかは、今後の資料蓄積が課題である。

竪穴建物跡SA 1の炭化材は、床面から出土していることから、構築部材の可能性がある。全て小破片のため、本来の形状は不明であるが、全てクリに同定されており、強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。

宮崎県内では、薄糸平遺跡、熊野原遺跡、前原北遺跡で弥生時代後期～古墳時代前期頃の住居跡

出土炭化材の樹種同定が実施されている（伊東・山田,2012）。その結果をみると、薄糸平遺跡ではカエデ属やヤマボウシを中心にケヤキ、シデ類、ヤブニッケイ、熊野原遺跡ではクヌギを中心にカシ属（アカガシ亜属）、コナラ、クリ、タブ、ハイノキ、モッコク、前原北遺跡ではカシ属、イスノキ、タブが確認されており、今回確認されたクリも報告されている。全体的に強度の高い木材が多く利用される傾向があり、その点は本遺跡の結果も調和的といえる。

2 種実同定

（1）試料

試料は、炉穴SP5の埋土中（試料番号1：3個）、焼土集中区（試料番号2：1個）と、炉穴SP 8の埋土中（試料番号3：9個）より出土した種実遺体3試料13個である（表S）。種実遺体は、土壤の水洗選別（フローテーション）により回収されており、乾燥した状態で容器に入っている。

（2）分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。種実遺体の同定は、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等を参考に実施し、結果を一覧表に示す。分析後は、種実遺体を容器に入れて返却する。

（3）結果

木本2分類群（落葉広葉樹のカラスザンショウ、イヌザンショウ）2個、草本のキンバイザサ

第26表 種実同定結果

番号	対象遺構	分類群	部位	個数	長さ			備考
					幅	厚さ		
1	SP5埋土中	カラスザンショウ	種子	1	2.7	2.3	2.1	
		キンバイザサ	種子	1	2.8	2.1	1.6	
		種実ではない	芽？	1	7.1	3.7	2.5	
2	SP5焼土集中区	種実ではない	芽？	1	5.9	2.0	1.8	
		イヌザンショウ	種子	1	2.9	2.1+	2.3	鱗片
3	SP8埋土中	イヌザンショウ	種子	8				

1個、計3個の種実が同定された（表3）。種実以外では、SP 5の埋土中（番号1）、焼土集中区（番号2）から、芽と考えられる植物遺体が各1個と、SP 8の埋土中（番号3）から、菌核が8個確認された。

種実遺体は、SP 5の埋土中（番号1）から、高木のカラスザンショウの種子が1個、多年草のキンバイザサの種子が1個と、SP 8の埋土中（番号

3)から、低木のイヌザンショウの種子が1個確認された。なお、SP 5の焼土集中区（番号2）からは、同定が可能な種実は確認されなかった。

種実遺体の写真を図版1に示し、形態的特徴等を以下に述べる。

- ・カラスザンショウ (*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.) ミカン科サンショウ属

種子は黒色、長さ2.7mm、幅2.3mm、厚さ2.1mmのやや偏平な非対称広倒卵形。腹面正中線上に広線形の臍がある。種皮は厚く硬く、表面に深く大きな網目模様がある。

- ・イヌザンショウ (*Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc.) ミカン科サンショウ属

種子は黒色、長さ2.9mm、残存幅2.1mm、厚さ2.3mmのやや偏平な非対称広倒卵形。腹面正中線上にある広線形の臍を欠損する。種皮は厚く硬く、表面にはカラスザンショウよりも細かく、サンショウよりも粗い網目模様がある。

- ・キンバイザサ (*Curculigo orchoides* Gaertn.) キンバイザサ科キンバイザサ属

種子は黒色、長さ2.8mm、幅2.1mm、厚さ1.6mmの楕円体。基部の片側から、長さ0.9mmの鉤状の太い突起が出る。種皮は硬く、断面は柵状。突起以外の表面には、多数の細い縦隆条が配列し、まばらに縱長の網目模様が形成される。

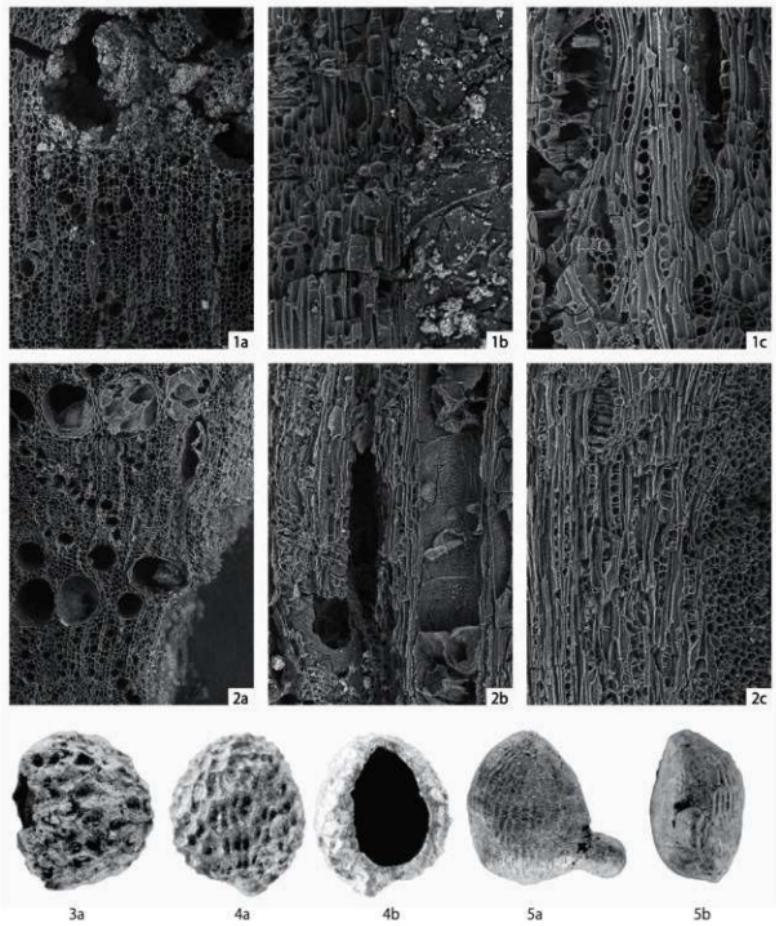
(4) 考察

種実遺体は、炉穴SP 5の埋土中からカラスザンショウ、キンバイザサと、炉穴SP 8の埋土中からイヌザンショウが各1個確認された。高木のカラスザンショウや低木のイヌザンショウは、伐採地や崩壊地、林縁等の明るく開けた場所に先駆的に侵入する陽樹で、キンバイザサは、暖地の山林内に生育する多年草である。

SP 5とSP 8は同時期の遺構と考えられ、これらの種実遺体は当時の遺跡周辺に生育していたことが推定される。種子が小型で各1個のみであることから、意図的に燃料などに利用したのではなく、周間に生育していた樹木から炉穴内に落ちた種実が燃焼時に炭化・残存したものと考えられる。

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- 西本豈弘(編),2006,弥生時代の新年代・新弥生時代のはじまり第1巻,雄山閣,143p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号6:SP32) a:木口, b:粋目, c:板目
2. クリ(試料番号5:SP8Ⅲ層) a:木口, b:粋目, c:板目
3. カラスザンショウ 種子(試料番号1:SP5 埋土中)
4. イヌザンショウ 種子(試料番号3:SP8 埋土中)
5. キンバイザサ 種子(試料番号1:SP5 埋土中)

— 100 μ m:1-2a
— 100 μ m:1-2b,c
— 1mm:3-5

第55図 炭化材・炭化種実

第6節 小結

向原中尾第5遺跡第2地点（N・S区）では、後期旧石器時代から古墳時代までの遺構・遺物が確認された。本節では（1）後期旧石器時代、（2）縄文時代早期、（3）弥生時時代～古墳時代について若干の検討を加えていくことでまとめとしたい。

1 後期旧石器時代

遺物の分布 第5遺跡第2地点ではS区においてIV層の褐色土（第1地点Ⅲ層・向原中尾第6遺跡II層相当）中から後期旧石器時代の可能性がある遺物が確認された。縄文時代早期の遺物包含層Ⅲ層下部との間に遺物が混在する状況にあり、型式・形態から後期旧石器時代の可能性が考えられるものを抽出した。

北向き緩斜面に位置するN区では、縄文時代早期の集石遺構の調査を終了後、調査区内の25%程度までトレンチ掘削作業を行い、また、北側（向原中尾第3遺跡側）（第30図）への拡張を行ったものの基盤層にあたるⅦ層までの間に旧石器時代の遺構・遺物は確認されなかった。向原中尾第4遺跡に隣接するS区は傾斜地のため、土層の堆積状況が良好とはいえず、AT（始良Tn火山灰層）の堆積も確認されなかつた。第2地点では後期旧石器時代の遺構は検出されていない。

石器について 第2地点で確認された器種は製品として、ナイフ形石器2、剥片尖頭器1、角錐状石器1、台形様石器1である。その他は、剥片・碎片である。整理作業の際、隣接する向原中尾第4遺跡出土の石器との接合を試みたが、接合関係は認められなかつた。利用石材はホルンフェルスを主体とし、頁岩、流紋岩、チャートと続く。主として調査区南側の向原中尾第4遺跡隣接地での出土でありキャンプサイト的な性格がうかがえる。

2 縄文時代早期

遺構について 向原中尾第5遺跡の主体となる時期である。Ⅲ層中の上部から下部にかけて集石遺構13基（N区6基、S区7基）ならびに炉穴33基（すべてS区）が検出されている。調査区の東西両壁で遺構の一部が確認されていることから、集石遺構も炉穴も周辺に分布域が広がっていくものと考えられる。

N区で調査区北側の緩やかな北斜面に集石遺構5基（S I 1～5）と南東のB 2～B 3グリッドにIV類のS I 6が構築されている。構成礫はすべて尾鈴山溶結凝灰岩であり、遺跡近隣で採取が容易な石材を利用したものと推定される。S I 1～5は掘込みをもたないI類に分類され、構成礫の大部分は小円礫や破碎礫、1個のみ大型の焼礫である。集石遺構使用後廃棄されたもの、集石の準備礫の可能性が考えられる。

S区の集石遺構7基の分布はS区で検出された7基の集石遺構のうち5基（S I 7～11）は炉穴の分布域と重なる。標高約169m付近の傾斜が緩やかな南斜面に立地している。S I 12・13は炉穴の分布域からは、はずれるが、等高線が密になる手前の傾斜変化点に構築されている。S区の11号集石遺構（S I 11）は27号炉穴（S P 27）が埋没した後に構築されていることが切り合い関係から確認された。

N区・S区ともに集石遺構を構成する礫は尾鈴山溶結凝灰岩であり遺跡周辺の露頭でも採取できる手近なものである。

炉穴はS区のみで検出され、33基を数える。調査区の最高所（標高169m）付近を囲むように分布し、調査区北端の等高線のゆるやかな南斜面、B 9・C 9グリッドにその大半が広がっている。現地での調査所見から少なくとも2群以上（①S P 1～4・6～20・22・23、②S P 8・18・24～28・32）のまとまりがみられる。①は調査区内の標高所に位置し、ほぼ等高線に平行して分布する。東西とも調査区外へ広がりが確認され、現状で21基が検出されている。

平面形態は細長く検出面からの深さも浅い。埋土には焼土粒が混じる程度であり、明瞭な炭化物も認められなかつた。②は①の南西に位置する。先行トレンチで消失した炉穴もあり、8基の切り合いが確認された。炉穴は等高線に直交して分布している。①の炉穴と比較し平面形の最大幅が大きく、検出面からの深さが深くなるものが多い。また、炭化物の残存が良好である。S P 5・8・21・33はほぼ単独で構築された炉穴である。平面形は①②と比べ大きく梢円もしくは隅丸方形を呈する。検出面か

らの深さが約30~80cmと深く、焼土の堆積も厚く2~10cmを測る。焼土部分の埋土は堅くしまる。S P 8 の埋土中から貝殻条痕文系土器やチャート製の石器が出土している。

出土土器・石器について 繩文土器の大部分はS区の遺物包含層であるⅢ層からⅣ層上部にかけて出土している。大きは貝殻文円筒形土器と回転施文の土器群が出土している。I類とした前平式系土器、II類の知覧式系土器、III類の貝殻条痕文系土器、IV類中原式系土器、VII類の回転施文系の土器などおよそ縄文時代早期前葉から中葉にかけての土器群とみられる。VII類の中には短枝回転文土器や梢円押型文と山形押型文土器、短沈線が施される辻タイプ、手向山式土器の出土もみられ、また田村式とみられる破片の出土も確認されたほか、VI類とした無文土器の出土も一定量みられる。

石器はホルンフェルスや砂岩といった遺跡近隣の丘陵地帯に数多く派生する小河川の転石にみられる石材を利用し主として粗製剥片石器や、剥片を作出したものと考えられる。なかでも、向原中尾第5遺跡の特徴な石器は、粗製剥片石器（蛤形石器）といえる。製品としての出土量が遺跡内で最も多くみられる石器である。I~V類に分類を行っているが、剥離の位置や形状および石器そのものの大きさによりスクレイパー的な使用や石斧的な使用などさまざまな用途に用いられた可能性がある。遺跡内で粗製剥片石器の製作活動があったものと考えられる。その一端を示すのは自然面を残し大型の剥片を削出した残核としての石核と素材剥片を獲得する過程で生じた剥片が多數出土している点である。このほかにも14点の石器の出土には狩猟活動の一断片、打製石斧や楔形石器の存在は樹木の伐採や加工、磨石・敲石からは食料加工といった生業活動が遺跡内で行われた可能性が考えられる。

自然科学分析からの位置づけ 第2地点ではN区6号集石遺構（S I 6）、S区5号・8号・32号炉穴（S P 5・8・32）の4基について埋土中より出土した炭化材の放射性炭素年代測定および樹種同定を行った。

炉穴に関しての補正年代は5号炉穴（S P 5）： $9,180 \pm 40$ 年B P、8号炉穴（S P 8）： $9,160 \pm 40$ 年B Pと近接している。32号炉穴（S P 32）は、

$8,020 \pm 30$ 年B Pと2つの炉穴より新しい時期を示している。炭化材の樹種同定の結果からはS P 5・S P 8がクリ、S P 32がコナラ節と木材利用の違いが読みとれる。集石遺構に関して、S区の12号・13号集石遺構（S I 12・13）から炭化物の出土が認められたものの、ごく少量のため分析にはいたらなかった。分布域が重なるS区での年代測定は行えなかった。そのため、N区の6号集石遺構（S I 6）の配石上面に残存していた炭化物についての分析を行った。分析結果は放射性炭素年代測定値： $9,460 \pm 40$ 年B Pと層年較正結果からはS P 5・S P 8よりやや古い数値を示している。

3 弥生時代～古墳時代

弥生時代から古墳時代ではS区で竪穴建物跡（S A 1）1軒とS区C 11グリッド東壁土層断面での確認（第27図）1軒が確認された。S A 1は縄文時代早期の8号集石遺構（S I 8）を切って構築されている。建物跡の大部分は調査区外へ延びており、規模や形状は不明である。調査区壁面の土層観察から床面に段差とみられる箇所が認められたため、花弁状住居跡の可能性もある。炭化材は床面から出土していることから建築部材の可能性がある。

【参考・引用文献】

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012「向原中尾第1・2遺跡 向原中尾第4遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集
宮崎県埋蔵文化財センター 2013「長野遺跡 舟川第2遺跡（第3次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第226集
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会
山下大輔・柴畠光博 2007「南九州貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係－宮崎県における遺構内出土資料の検討から－」『縄文時代』第18号 縄文時代文化研究会

第V章 向原中尾第6遺跡

第1節 発掘調査の概要と方法、経過

向原中尾第6遺跡は、向原中尾第5遺跡第1地点から続く尾根上の端部に位置する。心見川支流の征矢原川を挟む対岸には長野遺跡が立地する。

調査区は尾根端部の平坦部分をA区、谷に向かう斜面をB区とし、平成24年6月11日から9月10日までの期間で調査を実施した。今回の調査では、A区、B区ともに人力掘削によるトレンチ調査を行い遺構・遺物の広がりを確認した。その結果、A区の一部分でI層より後期旧石器時代の遺構・遺物が確認されたことから、その範囲を中心にトレンチを拡張し調査を行った。B区については表土直下で疊層が広がりを見せたが、遺構・遺物は残存していなかった。

なお、遺構等の図化に際しては、ネクスコ西日本が設置した座標杭の値を踏襲した。

整理作業は平成24年11月から宮崎県埋蔵文化財セ

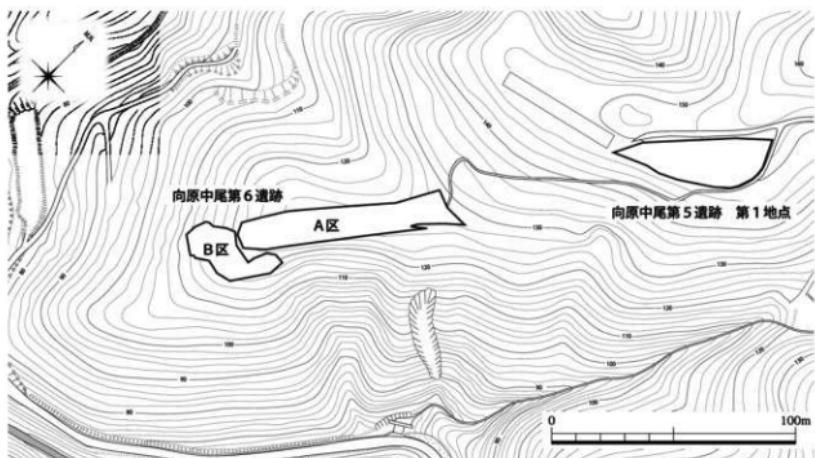
ンター本館内で開始し、平成25年3月に終了した。

石材分類は、向原中尾遺跡群内で統一をはかり、凡例の基準で分類を行った。

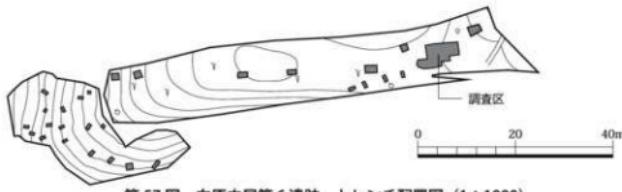
第2節 基本層序

基本層序を設定するにあたり、A区北東壁面を利用し図化を行った（第58図）。

調査着手の段階では、本調査区及びその周辺は山林及びミカン畠であり、それを造成する際に地形の改変を受けていた。そのため、A区とB区の大半のトレンチでは表土直下から尾鈴山溶結凝灰岩を中心とする疊層の堆積が確認される状況であった。しかし、A区では調査区内の北東側に当たる尾根の付け根部分周辺のトレンチで後期旧石器時代に相当する層（II層）が一部残存していた。後期旧石器時代遺物包含層以下は、粘質土層（III層）であったが、同層中では遺構・遺物は確認されなかった。



第56図 遺跡の周辺地形図（1:2000）



第57図 向原中尾第6遺跡 トレンチ配置図（1:1000）

第3節 後期旧石器時代の遺構と遺物

後期旧石器時代の遺構は、礫群が2基検出された。遺物はスクレイパー、剥片等が出土した。後期旧石器時代遺物包含層（I層）以下は、粘質土層（II層）であったが、遺構・遺物は確認されなかった。

1 遺構（第60・62図）

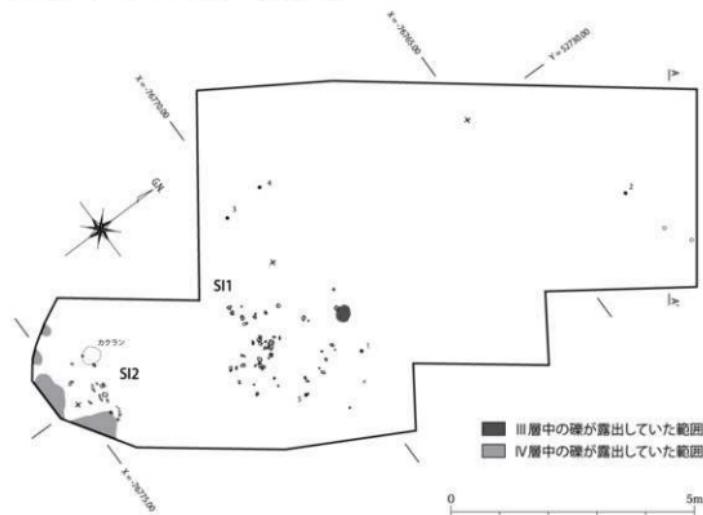
礫群は調査区南東側のトレンチ5で検出され、南側に拡張した部分でも確認された。遺構が検出された面は比較的平坦であったが、調査区北側から南東方向に向かって傾斜がみられる。SI1、SI2共に尾鈴山溶結凝灰岩で構成されており、ほとんどの礫が赤化していた。SI2の南側はⅢ層由来の礫

が降起しており、礫群構成礫と考えられる赤化している礫を中心に記録した。2基ともにタールのような付着物も確認できなかった。礫群周辺からは1のホルンフェルス製のスクレイパーと、5の磨石の2点が出土している。

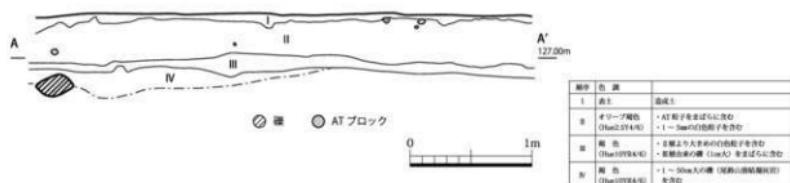
2 遺物（第61・63図）

遺物は6点出土し、5点図化した。全て異なる石材であったため、接合関係は見られなかった。図化しなかった1点はトレンチ4から出土した。

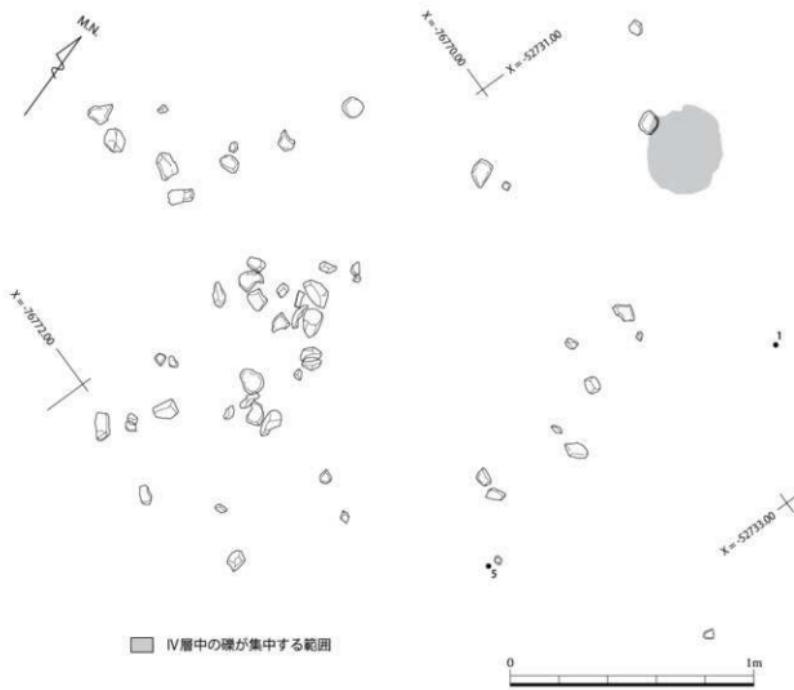
1・2はスクレイパー、3は使用痕剥片、4は剥片である。4は上部に打面調整を行っていることが確認できる。



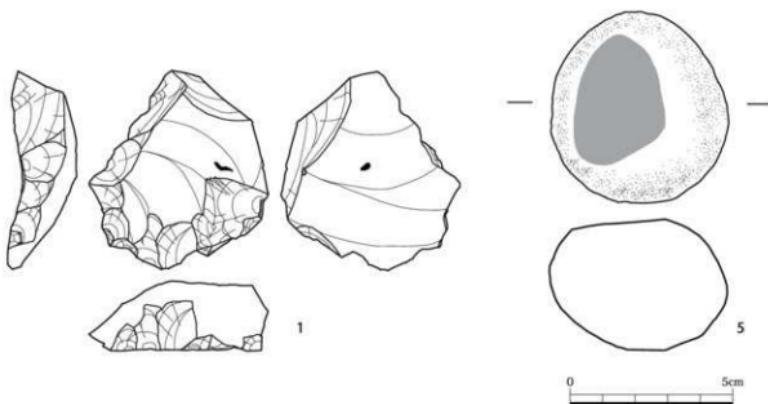
第58図 向原中尾第6遺跡 旧石器時代の遺構・遺物分布図 (1/100)



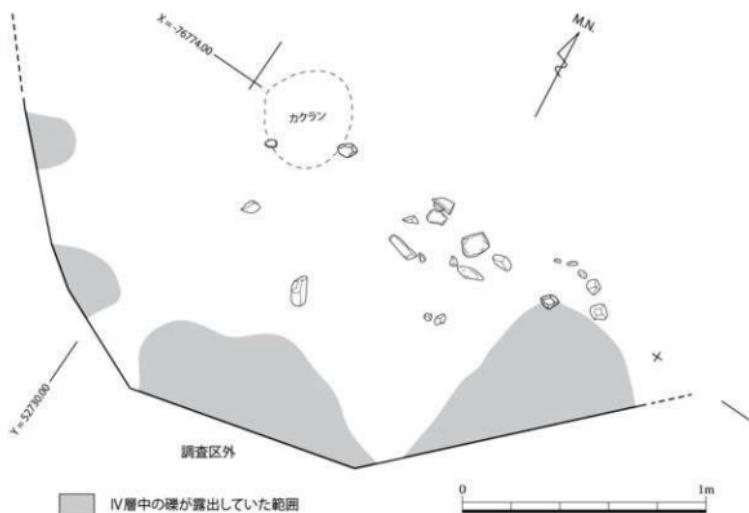
第59図 向原中尾第6遺跡 土層断面図 (1/40 第58図 A-A' section)



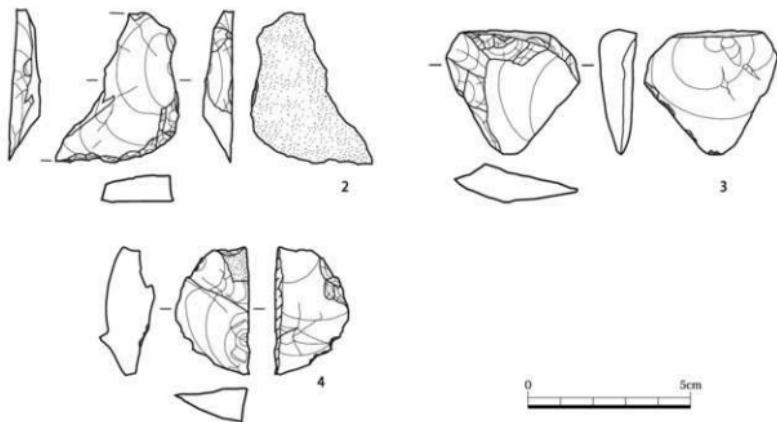
第60図 向原中尾第6遺跡 1号礫群実測図 (S=1/20)



第61図 向原中尾第6遺跡 出土遺物実測図(1) (S=2/3)



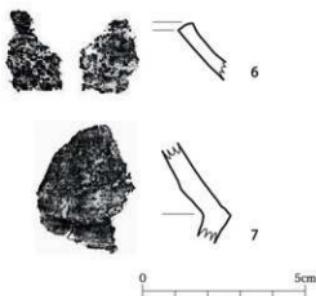
第62図 向原中尾第6遺跡 2号砾群実測図 ($S=1/20$)



第63図 向原中尾第6遺跡 遺物実測図(2) ($S=2/3$)

第4節 その他の時代の遺物

その他の時代の遺物は、表土下層から弥生時代から古墳時代の土器片が出土している（第64図）。いずれも小片で詳しい時期については特定できないが、6、7は複合口縁壺の口縁部と考えられる。



第64図 向原中尾第6遺跡 遺物実測図(3) (S=2/3)

第5節 小結

今回の調査では後期旧石器時代の遺構及び遺物が確認された。遺構は礫群2基が検出され、礫の赤化もみられた。遺物はスクレイパー等の石器が数点出土し、当時の人々の生活の断片を知ることができた。本遺跡は残念なことに、その多くが削平をうけており、遺跡の全容を明らかにすることはできなかった。しかし、近隣の向原中尾第4・5遺跡、征矢原川対岸の長野遺跡には、良好な後期旧石器時代の遺構・遺物が残っており、征矢原川周辺が狩場に向かうためのキャンプサイト的性格を有する遺跡が集中している。本遺跡も近隣の遺跡同様にその可能性が高い。

参考文献

宮崎県埋蔵文化財センター 2012「向原中尾第1・2遺跡 向原中尾第4遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集

第27表 向原中尾第6遺跡 後期旧石器時代遺構一覧表

遺構名	検出層	振り込み	石 材	礫個数	赤化礫数	重量(kg)	結合状況	付岩物
SI 1	II	なし	尾鷲山溶結凝灰岩	56	43	約18	8個体4箇所	なし
SI 2	II	なし	尾鷲山溶結凝灰岩	21	14	約8	6個体4箇所	なし

第28表 向原中尾第6遺跡 後期旧石器時代石器計測表

遺物番号	出土層位	器種	石 材	最大長(cm)		最大幅(cm)		最大厚(cm)		重量(g)
				内面	外側	内面	外側	内面	外側	
1	I	スクレイパー	ホルンフェルス	6.1		5.5		2.1		64.4
2	I	スクレイパー	チャート	4.6		4.7		0.9		12.7
3	I	剥片	ホルンフェルス	3.8		4.1		1.1		15.7
4	I	使用痕剥片	淡駿岩	3.9		2.2		1.7		7.8
5	I	磨石	尾鷲山溶結凝灰岩	5.9		5.5		4.0		16.3

第29表 向原中尾第6遺跡 その他の時代の土器観察表

遺物番号	出土層位	器種	部位	文様・調整		色 調		胎 土	備考	
				内面	外側	焼成	内面	外側		
6	I	壺	口縁部	ナデ	ナデ	良好	褐色(Hue7.5YR6/6)	褐色(Hue7.5YR6/6)	1mm大の白色粒子を好み	
7	I	壺	口縁部	ナデ	櫛擦波紋	良好	褐色(Hue5YR6/6)	褐色(Hue5YR6/6)	1mm大の白色粒子を好み	複合口縁

第VI章 総括

本章では、向原中尾第2遺跡第3次調査、向原中尾第5遺跡、第6遺跡の発掘成果と、以前報告された向原中尾第2遺跡第2次調査および向原中尾第1遺跡・第4遺跡の成果（宮崎県埋蔵文化財センター2012）を含め報告していく。前述した調査は、いずれも近接しており、これらを総称して向原中尾遺跡群とし、現状の成果における各時代の様相について述べていきたい。なお、名称の重複を避けるため、以下、向原中尾第2遺跡第3次調査は「第2遺跡（3次）」のように略称をもって記載したい。

第1節 後期旧石器時代

A T下位の遺構と石器 向原中尾遺跡群では、A T下位で出土した石器は多くはない。第2遺跡（3次）でわずかに確認できるものの、その遺物の大半は第4遺跡より出土している。そのため、おのずと第4遺跡への理解が当遺跡群におけるA T下位段階の評価となるが、あくまでも遺跡群内の一端であることをここで留意しておく。当該期の石器の分布は、報告者によると遺跡の所在する台地北西側の傾斜地に多く残存していたようである。その中でも、頂部付近と傾斜の低位平坦部に遺物の出土が顕著である。これらの関係は、縄文時代早期と後期旧石器時代の混在する遺物包含層の存在や、或いはそれ以降の遺物包含層の堆積の不安定さ、A T上位石器群における接合資料の分布等を鑑みると、遺跡の所在する尾根の頂部付近より傾斜に伴い流出した遺物である可能性が高い。しかしながら、A Tが比較的良好に堆積していることと、A T上位石器群との接合関係が見出せないことから、これらをA T下位石器として考えていきたい。遺構としては、低位にある1区で検出された礫群が挙げられるが、赤化や付着物があるものの、礫のサイズに齊一性はなく散漫な出土状況からも、その扱いには慎重を要する。

石器の評価 A T下位の石器は、第4遺跡で101点、第2遺跡（3次）で1点の計102点である。その内訳は、ナイフ形石器2点、スクレイバー2点、石核が4点、それ以外は素材剥片ないし、剥片、碎片で構成される。明確なトゥールの数は少な

いものの、長軸5～15cm程度の素材剥片が多くみられる。石核はいずれも残核に近く、剥片剥離が進行し寸詰まっているものが多い。しかしながら、石核には礫面を有するものが多く存在しており、遺跡には拳大小の円礫若しくは亜円礫の状態で搬入してきていることが想定される。ただ、石器製作に関わる剥片類が希薄であり、比較的大型の剥片類が多いことなどを考慮すると、遺跡への搬入形態は、前述した円、亜円礫だけではなく、素材剥片としても搬入されていたと考えられる。また、希薄ながらも石器製作に関わる剥片、碎片類が少量存在していることから、搬入された円礫ないし素材を都度、整形或いは調整していたと考えられる。

石材について 石器石材に関しては、ホルンフェルス、頁岩を主体としながら、一部客体的に白色に風化する流紋岩、チャートを含む。主体となるホルンフェルス、頁岩は、転盤の場合、半径5km前後範囲内の小丸川及び耳川流域において採取可能な石材である。これらは現在でも採取可能であり、量的に充実している石材であったといえよう。白色に風化する流紋岩は、祖母山・鈴山・火山岩類の産出する県北端部において露頭或いは五ヶ瀬川治いに転盤として採取できる石材である。元々は黒色ないし、紫がかかる黒色をしているが、特徴的に白色に風化する。遺跡近隣では縞状の流離構造がみとめられる流紋岩も存在するが、今のところ石器石材に適したもののは確認できていない。そのため、流紋岩に関しては、消去法的に県北域のものであることが想定される。チャートは県内では秩父帯の通る県北西部において良好な石材が採取できる。現在では県北西部に限局的であるものの、元々は当岩帶が県央、一部日南域にまで達していたことを考えると、台地上や河川に転盤として混入していてもおかしくない石材のため、現状では交流、直接・近隣採取であるかの判断はできない。これらを踏まえると、石材資源の獲得は、比較的容易に獲得できる近隣石材を基盤としていることが分かる。剥片石器類にはホルンフェルスや頁岩、重量・礫石器類には尾鈴山溶結凝灰岩や砂岩を選択している。限定的ながら流紋岩などの搬

入石材は、小円錐や素材剥片として遺跡内に持ち込まれている。これらは、大半を占める近隣石材とは別に、交流或いは移動を介した際に獲得したことが考えられる。

A T下位の向原中尾遺跡群 A T下位の向原中尾遺跡群では、1次的な石器製作がみとめられず、遺構の存在も希薄である。そのため、出土石器の時間幅は計りかねるもの、中長期的に生活していたとは考えにくく、短期的に形成された遺跡であると評価できる。搬入石材は量的に乏しく、在地色の強い顔つきは、集団の在地石材への適応を示唆しているといえる。

A T上位の遺構と石器 後期旧石器時代の向原中尾遺跡群ではA T上位の石器群が主体となる。その分布は、第1遺跡、第2遺跡（2次・3次）、第4遺跡、第5遺跡、第6遺跡全てが該当する。当該期の遺構としては、第4遺跡で縄群4基と土坑が2基、第6遺跡で縄群2基が報告されている。第4遺跡の土坑は、石器の分布状況と位置を同じくするが、縄文時代早期の遺物とも平面的に分化できない。加えて縄文時代早期遺物とA T上位石器群の混在もみられることや、遺構埋土が新相である階層状遺構のそれと類似していることからも、A T上位に帰属させるには慎重を期す遺構であるといえる。これは縄群に関しても同様である。また、第6遺跡では、時期決定できる遺物が出土しておらず、層位の相似、対比でもって時期決定に至っている部分もあり、当遺跡群の中では、明確に後期旧石器時代の遺構と積極的にいえるものはないといえる。石器の分布は、第1遺跡を除く全ての遺跡で確認できており、第4遺跡、第2遺跡、第5遺跡、第6遺跡の順に多く分布している。これらの石器は、多くが縄文時代早期の遺物包含層とA T上位の遺物包含層の中に両者の遺物が混在している状況で出土している。

石器の評価 上述した状況により、層位的に石器に時期が与えられない以上、石器型式により時期の評価を与えることとする。時期決定には宮崎県旧石器文化談話会が作成した「宮崎10段階編年」を用いることにする（宮崎県旧石器談話会2005）。これによると、向原中尾遺跡群のA T上位石器群は、

剥片尖頭器およびその周辺に代表される第5段階、次に基部加工および小型の縦長剥片に代表される第6・7段階、船野型細石刃核に代表される第9・10段階の、おおよそ三期に大区分することができる。これらは、明確なトゥールでもってのみの時期決定であり、編年に対応できる器種に当てはまらないものは含んでいない。また、第4遺跡において一部接合資料が確認されている。これらは石器製作に伴う調整剥片類であるが、その接合関係は、高位から低位への接合関係にあり、傾斜に伴う遺物の移動が大きいことが分かる。A T下位と比較しても接合資料を含め、同様な剥片類が増加しているように思われるが、遺物の混在やA T上位に含まれる時間幅が広すぎるため、いずれもどの段階に帰属でき、量的に増減しているかは現状で判断できない。

石材について 石器石材については、A T下位とほぼ同様な在地色の強い顔つきとなっている。その中で、A T上位より変化する点としては、流紋岩の量的な増加や砂岩などの石材が剥片石器として用いられてくることが挙げられる。近隣に位置する舟川第2遺跡や、俵石第1・第2遺跡等では、A T上位より桑ノ木津留産黒曜石や日東産黒曜石がみられるが、向原中尾遺跡群では現在のところ当該期に帰属できる黒曜石製石器は確認できていない。

A T上位の向原中尾遺跡群 向原中尾遺跡群におけるA T上位石器群は、大きく三期に大区分できる。それらは、A T下位の石器とは石材の選択にして若干の差異がある。A T下位では限定的であった石材の使用が若干幅くなり、搬入石材も量的には増加していく。この点では石材資源の獲得を目指す集団の在りようがA T下位段階と変化しているといえる。遺跡の様相としては、A T下位段階と大きくは変わらないといえるが、接合資料の存在や、遺物の展開の粗密により第4遺跡周辺が向原中尾遺跡群の主体となる場であったことが想定できる。

（沖野）

【参考・引用文献】

宮崎県旧石器談話会 2005 「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66 旧石器文化談話会

第2節 繩文時代

向原中尾遺跡群を構成する遺跡（向原中尾第1～第6遺跡）の中で南西端に位置する第6遺跡を除く5遺跡で縄文時代の遺構・遺物が確認されている。

遺構について 向原中尾遺跡群内では縄文時代早期の遺構として、石斧埋納遺構1基（向原中尾第2遺跡2次調査）・集石遺構31基（向原中尾第2遺跡：17基、3次調査：1基、向原中尾第5遺跡第2地点N・S区：13基）・炉穴33基（向原中尾第5遺跡第2地点S区）が確認されている。また、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層上面で底面に杭状の小穴を有するタイプの陥し穴状遺構7基が検出されている。遺跡群内の各遺跡の立地は第5図の横断図が示すとおり標高が高く平坦もしくは緩やかな斜面地である第2遺跡と第5遺跡S区で集石遺構や炉穴が検出されている。

第2遺跡が集石遺構のみが検出されているのに対し、第5遺跡S区では炉穴と集石遺構が切り合った状況が確認されている。向原中尾遺跡群内の集石遺構は第5遺跡での分類に照らすとI類8基、II類2基、III類11基、IV類10基となる。掘り込みを有するタイプが、第2遺跡と第5遺跡の検出総数31基のうち21基を占め、構成要素は被熱のため赤化が認められた。なかには掘り込みの埋土が全体に黒色化するほど多量に炭化物が含まれている集石遺構も確認された。向原中尾遺跡群内で検出された集石遺構31基はすべて尾鈴山溶結凝灰岩で構築されている。第5遺跡S区で確認された炉穴群の立地は集石遺構と同様、調査区内でもっとも標高の高い地点の平坦部分にあり単体で存在する炉穴や検出面からの深さが深くやや大型の炉穴と分布域が重なっている状況が看取できる。2遺跡ともに調査区外にも遺構が広がるものと報告されており、一定期間の居住域であった可能性が考えられる。

第2遺跡と第5遺跡の間の丘陵尾根筋と低地部分に位置する第4遺跡ではK-Ah上面で7基の陥し穴状遺構が検出されており、等高線が大きく湾曲する浅い谷地形に沿って、等高線に直交するように一定間隔をおいて分布している。丘陵頂部から水場方向にのびる「けもの道」上に配置されたと考えられる。第4遺跡で確認されたK-Ah降灰以降の陥し穴

状遺構の検出例は宮崎県下で約20例を数える。周辺では日向市板平遺跡や都農町俵石第1遺跡で確認されている。平面形態や規模に類似点がみられる一方時期幅の相違も認められる。第4遺跡で確認された7基は、ほぼ同規模な土坑で平面形は梢円を呈している。すべての土坑の底面に小穴が認められる。船元式土器の出土から縄文時代中期前後・後期代と報告されている。

遺物について

縄文土器 向原中尾遺跡群内では縄文時代草創期・早期・中期・後期・晚期の土器が出土している。中でも主体となるのは縄文時代早期に属する土器群である。なかでも第5遺跡の出土量がもっとも多い。概観すると第2遺跡（2次）で遺構が検出されたIV層からV層上面では梢円押型文と山形押型文の2種類の押型文のほか手向山式土器、前平式系土器、無文土器と早期前葉から中葉に位置づけられる土器群の出土が認められる。第2遺跡（3次）でも少量ながら田村式土器の大型の破片が出土している。第2遺跡の中でも第3次調査B区出土のミミズバレ状の微隆起突帯を有する土器（39・40）はその形態上は縄文時代草創期的な様相を呈している。第4遺跡の縄文時代早期に属する土器は、貝殻条痕文系土器と山形押型文系土器、別府原式、中原式、手向山式の出土が認められ、早期前葉から中葉頃の一群である。第2遺跡（2次・3次）と第4遺跡においては早期前葉から中葉の各型式の土器群の中で出土量全体からみると手向山式土器が主体である点が類似している。第5遺跡では縄文時代早期では出土量だけでなく遺跡群内ではバリエーションに富んでいる。縄文時代早期土器の大部分は第2地点S区の遺物包含層であるⅢ層からⅣ層上部にかけての出土である。第4章第6節で述べたように大きくは貝殻文圓筒形土器と回転施文の土器群が出土している。I類とした前平式系土器、II類の知覧式系土器、III類の貝殻条痕文系土器、IV類中原式系土器、V類の回転施文系の土器などおよそ縄文時代早期前葉から中葉にかけての土器群とみられる。または短枝回転文土器や梢円押型文と山形押型文土器、短沈線が施される辻タイプ、手向山式土器の出土のほか無文土器の出土も一定量みられる。向原中尾遺跡群内では

縄文時代早期前葉から中葉を主体とする時期の土器群の出土が大半を占めるが、第2遺跡と第4遺跡において手向山式土器の出土が多いという共通点がある。一方、第2遺跡（2次）で草創期に位置づけられる土器が確認される点、第2遺跡（3次）の器壁が厚く大型の円筒形となると考えられる器形に、大粒の楕円押型文が施文される土器など遺跡群内でも古手の様相を見て取れる。第4遺跡では手向山式土器のほか、中期の船元式土器の出土が認められる。縄文早期の土器が出土した遺跡の中でもっとも南に位置する第5遺跡では第2遺跡や第4遺跡とやや様相が異なり一定量の手向山式土器の出土はみられるものの遺跡内での主体となるものではない。土器のバリエーションからみても、遺跡群内で本遺跡のみで検出された炉穴の存在から考えても、出土した土器の顔つきからみても早期の様相には相違が認められる。

第4遺跡ではK-Ah以降の出土土器として5点の出土が確認されている。なかでも244～246は頸部から口縁にかけてキャリバー状に内湾する船元式に比定される土器とみられる。胴部に赤色顔料が付着するものも認められる。縄文時代後期後半から晩期にかけての無刻目直帶文土器や刻目直帶文土器の深鉢が第1遺跡で出土している。

遺跡群内で最も北に位置し隣接する第2遺跡と比高差約30mと低い地点に立地する第1遺跡では縄文時代後期後半から晩期にかけての土器の出土が認められている。

石器について

向原中尾遺跡群内では縄文時代草創期の石器をはじめ早期に属する石器の出土が認められる。なかでも第4遺跡出土の有舌尖頭器と向原中尾遺跡群をとおして出土量の多い粗製剥片石器（蛤形石器）が遺跡群内を代表する石器と位置づけられる。遺跡群内の各遺跡を概観すると第2遺跡（2次）では石鏃、石槍、石斧、石錘、石核、剥片、敲石、磨石、凹石に加えて28点もの粗製剥片石器の出土が認められている。第4遺跡はK-Ah以前のⅢ層より白色無光沢チャート製の柳又型有舌尖頭器の出土がみられ型式から草創期に位置づけられているが、Ⅲ層中からは縄文時代早期の土器・石器の出土のみがみら

れる。斜行剥離がみられる点や石材が流紋岩である点、型式分類上草創期的であるが、遺跡内の層位中から草創期の土器や遺構の出土が認められないことから位置づけには慎重さを要すると考えられる。早期の石器としては石鏃・石匙・石錘・石斧・砾器のほか石核や剥片などの素材が遺物の大多数を占めている。第5遺跡での出土層位は、Ⅲ層上面かⅣ層中上面で出土している。石鏃・楔形石器・スクレイバー・石核・石斧・粗製剥片石器・剥片・磨石・敲石・台石などの出土が認められる。

向原中尾遺跡群内では尾鈴山溶結凝灰岩、ホルンフェルス、砂岩、頁岩が主体的に使用されている。大型の石器は尾鈴山溶結凝灰岩と砂岩製のものが大部分である。それに加えてチャートや黒曜石・安山岩・水晶などの出土は少量であるが狩猟具や剥片、チップ等に見受けられる。尾鈴山溶結凝灰岩や砂岩については円礫に近い母岩であったと想定できる素材を用い、調理や加工など多用途に使用したと推測される粗製剥片石器を作出したものと考えられる。

（橋本）

粗製剥片石器類の評価 向原中尾遺跡群では、縄文時代早期を主体として粗製剥片石器類が頻繁に見受けられる。これらは、藏座村遺跡の報告に際して「蛤形剥片石器」として呼称された石器の範疇に収まるものがある（宮崎県埋蔵文化財センター2002）。報告者は、藏座村遺跡に限定した呼称しているが、同様の石器が出土した場合、以後粗製剥片・蛤形石器等広く用いられる石器名称となっている。

蛤形剥片石器の定義としては、「幅4.3cm～8.9cm（平均5.9cm）・長さ3.0～5.7cm（平均4.0cm）、平面楕円形・断面細柳葉形で、蛤のような形態を呈すること…」とある。向原中尾遺跡群周辺の粗製剥片類は、この定義に包括されないものも見受けられるが長幅比率において類似していることを鑑み、その形状を優先して、以後は蛤形剥片石器と呼称する。

藏座村遺跡では、砾群の構成材とは異にして堆積岩系の石材に人為的な選択が介在しているとあるが、向原中尾遺跡群では状況に違いが見出せる。当遺跡群の蛤形剥片石器の主要石材は、砾群や集石遺構を構成する尾鈴山溶結凝灰岩、砂岩の他に、珪質

頁岩、黒色の頁岩が含まれる。特に上述した尾鈴山溶結凝灰岩と砂岩に結びつくようで、これらは、礫器や石斧にも素材として利用されている。当遺跡群及びその周辺域では、蛤形剥片石器を剥離したと考えられる石核や、分割過程で作出された剥片、石器類も多く出土していることにより、その剥片剥離工程や石器群内の在りようがみえてきたといえる。当遺跡群内では、自然面を有する楕円および亜円形の転搬採取を基本としているが、これは遺跡近傍で採取できる石材であることの他に、その殆どに自然面を有することから、自然面或いはそれの保有する形状に嗜好したからであると考えられる。また、刃部調整の頻度は多くはなく、刃部調整を有するものはしばしば主要剥離面が滑らかなものにみられる。このことから、石器としての主な用途には主要石材に特徴的な剥離面の凹凸が関与していることが想定され、剥片石器でありつつも必ずしも刃器として包括解釈できるものではないといえる。しかしながら、珪質頁岩製のものなどは、剥離面は滑らかで刃部も鋭角であることから、刃器的な顔つきをみせるものもあるため、蛤形剥片石器と呼称するものの、石材や形状によってその利用目的が異なっている可能性が指摘できる。

採取した礫は、その一端を剥離面とし蛤形剥片石器の作出を行うが、石核の3分の1から半分程度剥離作業が進行した剥片剥離面に対して、粗雑な調整を施し礫器などの重量石器として転用している。また、当遺跡群内で出土している石斧は背面に自然面を有することが多く、馬込遺跡第2地点（宮崎県埋蔵文化財センター2014）の様に礫の全周にわたって剥離作業をおこなった石核や、上述した一端部剥離によりリダクションした石核は、最終的には石斧や礫器として使用されているようである。

このことを鑑みると、当遺跡群の蛤形剥片石器は目的剥片として作出されるが、それを作出する過程で発生した石核や礫器、石斧類もその工程の延長線上に含まれており、当遺跡群における一連の剥片剥離工程の産物としてとらえることができる。

時期的には縄文時代早期を主体としながらもその前後に広くまたがってみられることから、通時に選択された技術であったといえ、地域的にも当遺跡

群の南北に広く分布しており、かなり普遍的な技術であったことが推測される。これらのことを踏まえると、量的に充実し、広く選択された技術として該期の生活実態の一部を強く投影している可能性があるといえる。今後、使用痕分析等の研究に加え、時期、地域的な粗密が明らかになれば蛤形剥片石器を携えた人々の生活の在りようをより明確に知ることができるといえる。（沖野）

【参考・引用文献】

- 宮崎県埋蔵文化財センター 2002「別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第61集
宮崎県埋蔵文化財センター 2002「蔵座村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第53集
宮崎県埋蔵文化財センター 2011「板平遺跡（第3・4次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集
宮崎県埋蔵文化財センター 2011「内野々遺跡 内野々第2・第3遺跡 内野々第4遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第202集
宮崎県埋蔵文化財センター 2012「向原中尾第1・第2遺跡 向原中尾第4遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集
宮崎県埋蔵文化財センター 2012「舟川第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第214集
宮崎県埋蔵文化財センター 2012「俵石第1遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第216集
宮崎県埋蔵文化財センター 2013「長野遺跡 舟川第2遺跡（第3次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第226集
宮崎県埋蔵文化財センター 2014「岡遺跡（第17次調査）・馬込遺跡第2地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第230集

第3節 弥生時代以降

弥生時代の遺構 向原中尾遺跡群では、第2遺跡（2次・3次）と第5遺跡において弥生時代の堅穴建物跡が検出されている。第2遺跡では8軒、第5遺跡では2軒の計10軒確認されている。第5遺跡の堅穴建物跡は、2軒とも出土遺物がなく、掘り込み層位、検出プラン、建物主軸、放射性炭素年代測定法によっての位置づけとなる。前回の第2遺跡（2次）の報告では、検出した堅穴建物跡の時期について、切り合い関係、分布状況、建物主軸の差により、遺跡内の比較的大型のものから小型のものへの変遷を提示している。以下ではそれに今回の成果を加味して再検討を行うこととする。

堅穴建物跡の比較と再検討 向原中尾遺跡群の堅穴建物跡は、規模を基準にすると、①群…3～4m前後のもの（第2遺跡2次SA1～3, 5～7）と②群…5m前後（第2遺跡2次SA4、3次SA1、第5遺跡SA1）の大きく2つに分けられる。①群の特徴としては、楕円及び閉丸方形のプランを呈し、明確な主柱穴を持たない建物跡であることに対し、②群は方形プランを呈し、その中に明確な主柱穴をもった堅穴建物跡である。また、①群は焼失建物であるのに対し、②群は焼失建物ではない。次に建物主軸についてみてみると、第2遺跡の堅穴建物跡は、概ね北東を向いているが、第2遺跡（2次）の成果のみで判断すると前報告のような小差がみとめられる。しかし、第2遺跡（3次）の成果を加味した場合、両者を主軸によって区分することは難しい。また、分布状況としても、調査区を市道により大きく削平されており、現状では分布的に両者を切り離せない。

遺物に関しては、甕の形状や組成、第2次調査の報告や小結で述べられたように向原中尾遺跡群の堅穴建物跡はおむね弥生時代終末期から古墳時代初期段階に位置づけられるものである。遺物への見解として、近隣遺跡である都農町所在俵石第2遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2012）に詳しくふれられているので参考としたい。①、②群とともに、口縁部が「く」の字状に屈曲し、胴部最大径が口径より大きい甕（2次134・192、3次21他）が伴うが、②群の遺物としては、甕の頸部の屈曲がゆるや

かなものがみられ、これらは平底で底部も接地面が小さくなりつつある（2次172、3次20・22）。これらは、上述した甕と型式的対比により後出するものとされており、また小鉢が伴うことでも共通している。加えて布留式の系譜上にあると考えられる胎土の質が異なる甕（29）もみられる。この甕を積極的に評価し、搬入品であるか在地模倣とするかで以後の判断が分かれるところであるが、少なくとも現状では板平編年（松田・今塩屋2011）でいうところのI期b段階～II期a段階ないしIIa段階であると位置づけられる。

建物主軸では①群と②群を区別することは難しいが、堅穴建物の規模、プランの形状および構築方法、遺物の様相等から総合的に判断すると、①群から②群への移行が考えられる。これらの考察は自然科学分析の結果においても肯定的である。①群では概ね較正年代が1860±20年BP前後という年代が算出されているのに対し、②群である第2遺跡（3次）のSA1は、1770±20年BP、第5遺跡SA1では1790±30年BPという年代が算出されている。算出年代の差程、両者に大きな時期差は感じられないものの、この結果は、上記の所見に加味できるものである。

弥生時代の向原中尾遺跡群 弥生時代の向原中尾遺跡群は、概して弥生時代終末期から古墳時代初期段階の範疇に位置づけられる。当段階における周辺の様相としては、台地上では川南町尾花A遺跡のような長期継続かつ拠点の大集落が成立し、その短距離圏内に衛星的或いは小規模集落の分布がみられる。これらは、生産活動の増大や向上による人口圧の上昇、他地域からの物的・人的交流などから集落遺跡は山あいにも集落の分布が拡大するという（徳留・今塩屋2012）。向原中尾遺跡群も後者として同様の脈絡もって位置づけられよう。当遺跡群は、中央に第3遺跡が立地する谷を大きく挟んだ丘陵上であることから同一の集落と考えるのは難しい。地形の変化により、飛び地のように展開する狹小な丘陵地に点所在する小規模集落群を調査区により横断したようなかたちであるといえる。これらの小規模集落は、拠点的集落などとの結びつきを保持しながら、鉄を持ち、他地域の文化を取り入れていてい

く。向原中尾遺跡群の成果は、こうした山あいの集落の変容を把握できるものである。また、①群建物跡からは、石庖丁が確認されている。これらは同じく検出された炭化種実にもイネがみられるように、栽培作物として想定しうるものであるが、遺構の展開する丘陵には、住環境の他に、耕作できるスペースと水利が伴わないので、第3遺跡のような水利を保持する湿地性の谷部を利用して耕作をおこなっていたと想定できる。

近代以降の遺構・遺物 向原中尾遺跡群では近代の遺構・遺物が確認されている。詳細は補遺にて記載するが、遺跡群がとりまく谷は向原中尾第3遺跡（以下第3遺跡）として平成20年度に東九州自動車道建設に伴い発掘調査された経緯がある。その調査時に確認できた棚田石垣、および第1遺跡南に位置する寺迫溜池は、碑文の内容から、明治後半から昭和初頭の遺構であると調査担当者は述べている。それを裏付けるものが『東郷町誌』に詳しい（東郷町誌編さん委員会1979）。明治初頭には主要物産として米があげられていることから、近世より水稻を基盤とした生活スタイルが確立されていたようである。明治30年代に入り耕地整理、土地改良等が奨励され、向原中尾遺跡群の所在する東郷町でも大規模に土地の改良が進められたことから、前述した遺構の所見ともほぼ一致する。また、第2遺跡（3次）では表土より掘り込む土坑がいくつか存在した。近隣の作業員に聴き取りを行うと、遺構の形状・検出位置等により誘蛾灯を設置した際の掘り込みであるとのことであった。この誘蛾灯は、昭和49年～51年の第2次農業構造改善事業の際にみかん畑に設置したものである。第2遺跡は、調査前はカシやハゼ、スギ等生活に密接に関係する樹木が植林された山林であったが、それ以前は、極めて短期間柑橘類として利用されていたようである。遺物としては、瓦質の移動式カマドが採集されている（第65図2）。この遺物に関しては鷗田の論文に詳しい（鷗田2007）。採集された移動式カマドは、燃焼部である個体と米を入れ炊飯する釜部の個体とを組合せて使用する組合せ式のカマドである。鷗田の紹介遺物は、新富町所在の永牟田第2遺跡より出土し

た陶器製のカマドであるが、第3遺跡で採集されたカマドは瓦質ではあるが、形態的には極めて類似しており、この範疇でとらえられる遺物といえる。昭和30年代のガス普及以前までよく利用されたようである。

近代以降の向原中尾遺跡群 近代の向原中尾遺跡群は、初期には水稻耕作や木炭、椎茸等を栽培していたが、社会情勢の変化と共に、徐々に米の生産向上のため耕地整理に伴う土地の改変を試みていく。昭和に入り農業構造改善事業に伴い果実栽培を行うが、長期には根付かず、作物の生産農業は終わりを迎える。以後は生産と離れ、生活に根ざす山林への改変をおこなっていったようである。

以上が近代以降の向原中尾遺跡群における土地利用の経過である。明治にはいり大きく土地を改変したため、弥生時代終末期以降から近世までの土地利用は発掘成果としては明らかにされていない。しかしながら、当遺跡群が後期旧石器時代から近現代まで脈々と利用してきたことは間違いのない事実である。時代により生活の在りようは異なりながらも、人々が根ざす環境であったといえようか。（沖野）

【参考・引用参考文献】

- 東郷町誌編さん委員会1979『東郷町誌（昭和54年修正増補印刷発行）』
鷗田史子2007『宮崎県永牟田第2遺跡出土のカマド』
『民具マンスリー』第40巻1号
吉本正典1995『宮崎平野出土の土師器に関する編年的考察－須恵器出現以前の資料を中心として－』『宮崎考古』第14号
松田博幸・今垣屋穀行 2011『第VII章総括』『板平遺跡（第3・4次調査）』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第199集
宮崎県埋蔵文化財センター 2011『俵石第1遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第200集
宮崎県埋蔵文化財センター 2012『向原中尾第1・2遺跡 向原中尾第4遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第213集
徳留洋志・今垣屋穀行2012『第VI章総括』『木戸平第2遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第215集
宮崎県埋蔵文化財センター 2012『俵石第1遺跡 俵石第2遺跡』『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第216集

補遺

向原中尾第3遺跡

調査に至る経緯

本発掘調査は、平成20年度に実施した東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い遺跡の一部が影響を受けるため、事業者の依頼に基づき工事着手前に記録保存の措置を講じたものである。後述するが、結果として遺構の存在が希薄であり遺物も少量であるため、自動車道建設費縮減と相まって広域を調査するにいたらなかった経緯がある。しかしながら、少量とはいっても遺跡の状況を把握する上で貴重な資料も存在することから、ここではその説明責任を果たすうえでも補遺として報告したい。

なお本文は、平成20年度の調査担当者による終了報告をもとに加筆・修正したものである。

調査の組織

本書掲載の遺跡調査・整理報告の実施にあたり、以下の体制が組織された（平成20・25年度）。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 福永 展幸（平成20年度）

向井 大蔵（平成25年度）

副所長 加藤 悟郎（平成20年度）

副所長兼調査第一課長

長津 宗重（平成25年度）

総務課長 長友 英詞（平成20年度）

坂上 恒俊（平成25年度）

同課主幹兼総務担当リーダー

高山 正信（平成20年度）

副主幹兼総務担当リーダー

高園 寿恵（平成25年度）

調査第一課長 長津 宗重（平成20年度）

同課主幹兼調査第二担当リーダー

菅付 和樹（平成20年度）

副主幹兼調査第二担当リーダー

福田 泰典（平成25年度）

調査担当

調査第一課調査第二担当

（主任）主 事 小船井 順（平成20年度）

主 査 島木 良浩（平成20年度）

主任主事 嶋田 史子（平成20年度）

整理・報告書担当

調査第一課調査第二担当

副主幹兼調査第二担当リーダー

福田 泰典（平成25年度）

主 事 沖野 誠（平成25年度）

調査協力・助言

日向市教育委員会

東九州自動車道用地事務所

調査区の概要

本年度の調査対象地は斜面に挟まれた谷筋に所在し、石垣によって区画された棚田が存在する（第66図）。調査区北側の斜面裾に水路が通っており、表土面の広い範囲で湧水が確認できる。調査の便宜上、調査区内に存在する未買収地から西側をA区、北東側をB区とした（第67図）。

A区

A区は7枚の棚田から構成され、各段の境に石垣が南北方向に積まれていた。人力による掘削調査の結果、棚田を造成する際に両側の斜面を大幅に削平し、谷筋を埋めていることが確認された。また、この造成土の下により古い歴の残存が確認できたことから、A区の棚田は大きく2時期に分けられる。そして古い棚田の下層に低湿地にみられる黒色泥炭層（VI層）が残存していることから、この層に遺物が含まれている可能性があると判断した。そのため、遺構や遺物の検出とVI層の残存範囲を把握することを目的として、重機によりV層まで掘削した後、人力での遺構検出・掘削を行った。なお、VI層以下は人頭大の礫を多量に含む層であり良好なアカホヤ火山灰層（VII層）の堆積がみられないことから、層が安定的に堆積するような地形ではなかつたと考えられる。

B区

B区は調査範囲内に4枚の棚田が確認でき、石垣が東西方向に積まれている。造成土の堆積はみとめられず、V層以下の黒色土の堆積状況が良好である

ことから、旧地形は現地形に比較的近い形状であり、造成土には地形を削って耕作面を造っていると考えられる。しかし、T29で黒色土の下層にⅧ層が僅かに確認できたものの直下に礫層が検出されることから、A区と同様にⅧ層の降灰以前は礫が露出しているような場所であったと考えられる。

遺構

今回の調査では明確な遺構は検出されなかった。なお、石垣に関しては明確な年代を特定するに至らなかったが、造成土の上面から積まれており、新しい棚田に伴うものである。遺跡南東側に存在する溜池の碑文から読み取れる開田事業の時期や、周辺住民からの聞き取り調査で70歳代の方が幼少の頃にはすでに存在していたとのことから、石垣はおそらく明治後半から昭和初頭までに築かれたものであろう。

遺物（第65図、第30・31表、図版4）

遺物は弥生から古墳時代と考えられる土器片1点、いずれも時期不明の剥片2点、磨石1点、石錐1点（第65図1）が出土した。現代の耕作土及び攪乱土の中から出土しているものが殆どで、図化に耐えうる遺物は少ない。剥片1点についてはVI層中で出

たしたが土の堆積状況から原位置を留めていない可能性が高い。また、周辺からは近世の移動式カマドが表探されている（第65図2）。

石錐（第65図1、図版4）

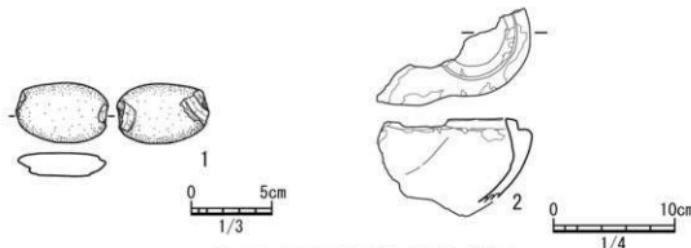
小樽円錐を素材とした石錐である。両端部に粗雑な割離により抉りを施している。

移動式カマド（第65図2、図版4）

移動式カマドの煙突取り付け口である。元来は上部・下部を組み合わせて使用するタイプで、この取り付け口は上部構造にあたる。

まとめ

調査の結果、現地形は2回の造成により形成されたものであり、その過程で低湿地の泥炭層が削平を受けていることが判明した。そして、この泥炭層中では遺構・遺物は確認できず、アカホヤ火山灰の降灰以前は礫が露出している状況であった。これらを考慮すると、調査対象地内に明治時代以前の遺構・遺物が残存している可能性は低いと考えられる。また確認できた遺物は、単独であったり原位置を留めていなかつたりするため、これらは谷地形の傾斜に伴い流入してきたものだと考えられる。



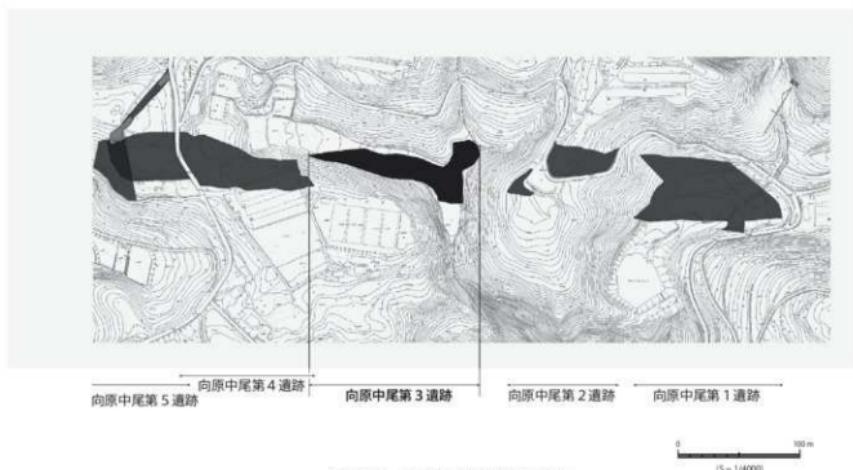
第65図 向原中尾第3遺跡出土遺物実測図

第30表 向原中尾第3遺跡石器計測表

挿図番号	図版番号	出土層位	器種	石材	法量(cm, g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
1	図版4	—	石錐	砂岩	3.8	5.3	3.8	86.2	

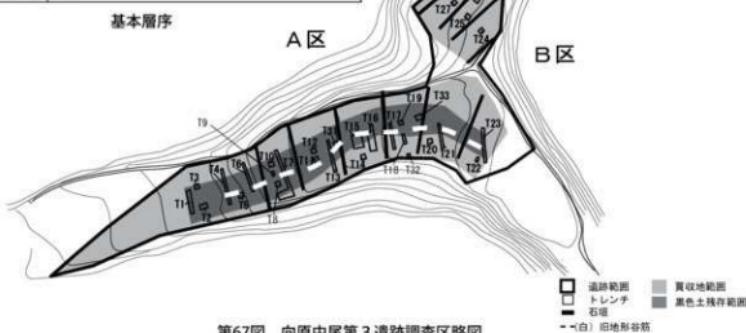
第31表 向原中尾第3遺跡土器観察表

挿図番号	図版番号	出土位置	出土層位	器種	部位	残存高(cm)	文様・調整等		色調		胎土	備考
							外面	内面	外面	内面		
2	図版4	周辺	表探	移動式竈	煙突部	8.0	ナデ	ナデ	オリーブ黒(5Y3/1)	黒(N1.5/)	1mm程度の灰色粒を多く含む	内煤付着



第66図 向原中尾第3遺跡位置図

層位	色調	備考
I	黒色	表土
II a	暗褐色	耕作土
II b	暗褐色	耕作土床土、しまり強く黄褐色ブロック混じる
III	黄褐色	造成土
IV a	暗褐色	粘質、旧耕作土
IV b	黒色	砂質、しまりやや強い、旧耕作土床土
V	黒色	砂質、しまりやや強い
VI	黒色	砂質、IV層に比べ粒子が細かい。泥炭層
VII	暗褐色	砂質、人頭大の礫を多く含む
VIII	黄褐色	K-Ah
IX	橙色	砂質、しまり強い
X	灰白色	礫層



第67図 向原中尾第3遺跡調査区略図

向原中尾第2遺跡（第2次調査）

ここでは前回の調査である向原中尾第2遺跡第2次調査の報告書刊行の際、報告できなかった資料の追加報告をおこなう（第68図）。

二次加工剥片（第68図227、図版4）

やや大ぶりの剥片を素材とし、右側縁下部に粗雑な二次加工を施す。スクレイパーの未製品の可能性もある。

剥片（第68図228、図版4）

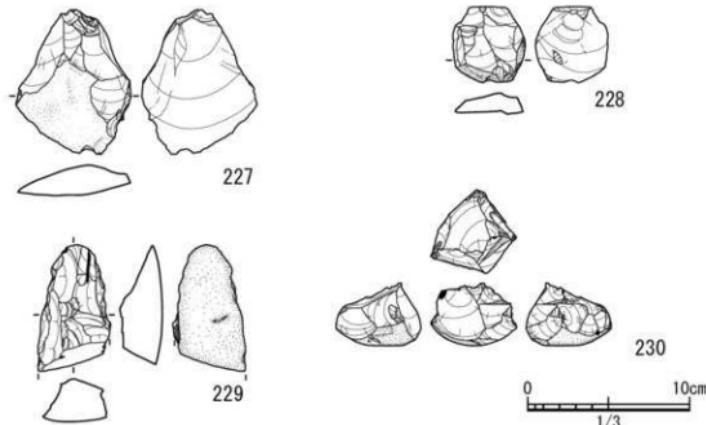
ホルンフェルス製の剥片である。背面には連続した剥離痕がみとめられる。

石斧（第68図229、図版4）

ホルンフェルス製の石斧である。刃部を含む下半を欠損する。

石核（第68図230、図版4）

珪質頁岩製の石核である。拳程度の円盤を素材とし、打面転移を繰り返しながら剥片剥離を行っている。



第68図 向原中尾第2遺跡（第2次調査）追加報告石器実測図

第32表 向原中尾第2遺跡（第2次調査）追加報告石器計測表

挿図 番号	図版 番号	出土 層位	器種	石材	法量(cm, g)				備考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
227	図版4	—	二次加工剥片	珪質頁岩	8.8	7.0	1.9	113.3	
228	図版4	—	剥片	ホルンフェルス	4.6	4.4	1.3	29.0	
229	図版4	—	石斧	ホルンフェルス	7.7	4.4	2.6	87.9	下半欠損
230	図版4	—	石核	珪質頁岩	3.8	5.3	3.8	86.2	

経費削減による未調査箇所の報告

向原中尾遺跡群は、東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴い発掘調査が行われた。本項では、本来遺跡包蔵地として認識されているものの、発掘調査対象地外となった未調査箇所の提示およびそれに至る経緯を報告し、今後の発掘調査の必要性を明示するものである。

未調査箇所①（向原中尾第2遺跡）

用地取得面積としては780m²であるが、土取り箇所を含むので、発掘調査面積としては500m²となっている。調査区南側の本線側道部において発掘調査対象地が存在するが、側道部は収用されないこととなり発掘調査対象とならなかった。200m程度の残存部ではあるが、SA1の一部を残存し、尾根の頂部付近であるため、遺構の展開が想定される。

未調査箇所②（向原中尾第4遺跡）

平成20年度～22年度にかけて総面積5,680m²の発掘調査をおこなっている。暫定2車線化に伴い一部調査面積が縮小することになり、200m程度の未調査箇所が残存する。未調査箇所は発掘調査において遺物が集中した高位部分にあたり、後期旧石器時代から縄文時代早期の遺構、遺物が良好に残存していることが想定される。

未調査箇所③（向原中尾第5遺跡）

第5遺跡第1地点は、東九州道本線工事施工に係る工事用迂回道路部分の発掘調査である。最も近接するのは第4遺跡だが、既に調査が終了しているために、第5遺跡の飛び地的な扱いとして第5遺跡の調査に含めるものとした。第5遺跡第2地点も第4遺跡と同様に、暫定2車線化に伴い、調査対象地の一部が200m程度縮小した。第5遺跡は、当遺跡群において縄文時代早期の集石遺構や炉穴、遺物が良好に残存する地区でもあるので、未調査箇所において良好に遺構、遺物が展開していることが想定される。

（沖野）



第69図 向原中尾遺跡群未調査箇所位置図

図 版

図版 1



向原中尾第2遺跡より日向灘を望む



第3次調査区から第2次調査区を望む



向原中尾第2遺跡調査前



向原中尾第2遺跡A-Tおよび砾出土状況



向原中尾第2遺跡S-II検出状況（南より）



向原中尾第2遺跡S-II配石検出状況（南より）



向原中尾第2遺跡S-A1遺物出土状況（西より）



向原中尾第2遺跡S-A1貼床検出状況（西より）



向原中尾第2遺跡 S A-1 焼土および炭化材出土状況



向原中尾第2遺跡 S A-1 完掘状況（西より）



向原中尾第2遺跡 A-A' 土層堆積状況



向原中尾第2遺跡 B-B' 土層堆積状況



向原中尾第2遺跡 C-C' 土層堆積状況



向原中尾第2遺跡 D-D' 土層堆積状況

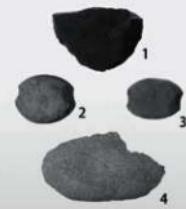


向原中尾第2遺跡調査風景（1）



向原中尾第2遺跡記録風景（2）

図版 3



向原中尾第3遺跡群の石器



向原中尾第2遺跡 後期旧石器時代の石器



向原中尾第2遺跡 縄文時代早期の土器



向原中尾第2遺跡 弥生時代以降の石器



20



41

42

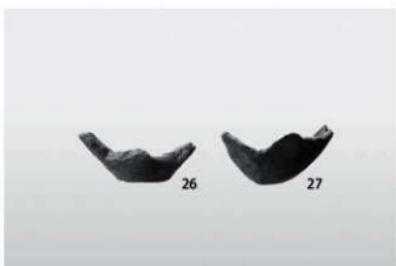


21

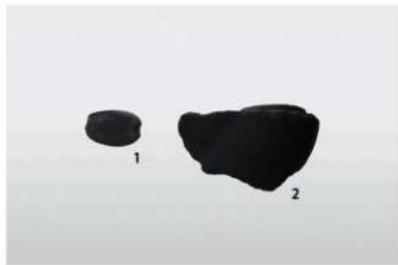
向原中尾第2遺跡 SA 1出土遺物（1）



25



向原中尾第2遺跡 S A 1出土遺物（2）



向原中尾第3遺跡の出土遺物



向原中尾第2遺跡（第2次調査）の追加報告遺物

図版 5



向原中尾第5遺跡N区集石遺構検出状況（南より）



N区2号集石遺構（S I 2）（南東より）



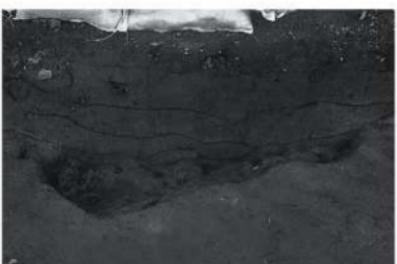
S区炉穴検出状況（南西より）



S区炉穴完掘状況（西より）



S区炉穴完掘状況（北西より）



32号炉穴（S P 32）半截状況（東より）



8号炉穴（S P 8）検出状況（南西より）



号炉穴（S P 8）完掘状況（南西より）



5号炉穴（S P 5）完掘状況（東より）



21号炉穴（S P 21）完掘状況（東より）



S区集石遺構検出状況（東より）



13号集石遺構（S I 13）（東より）



12号集石遺構（S I 12）（南より）



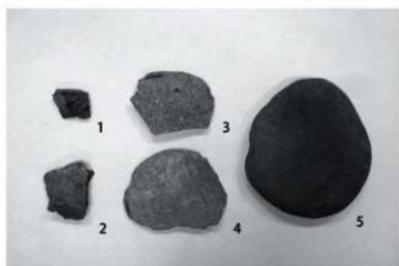
12号集石遺構石（南より）



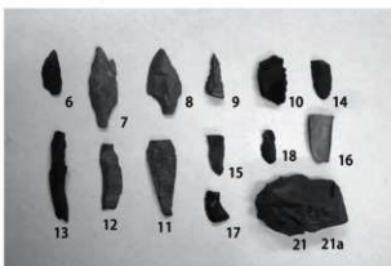
1号竪穴建物跡（S A 1）検出状況（西より）



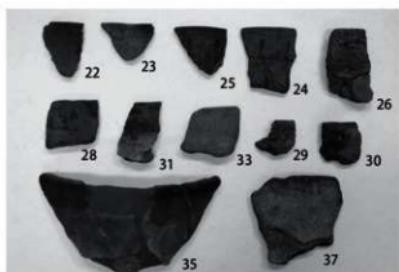
1号竪穴建物跡（S A 1）完掘状況（北西より）



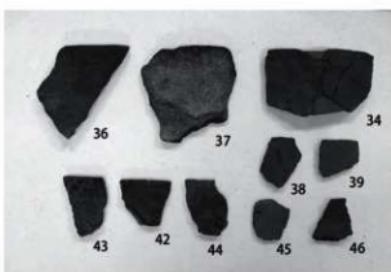
向原中尾第5遺跡第1地点出土遺物



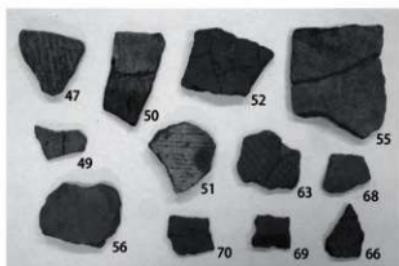
向原中尾第5遺跡第2地点出土後期旧石器



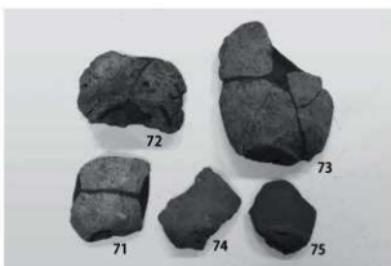
第2地点出土縄文時代早期土器（1）



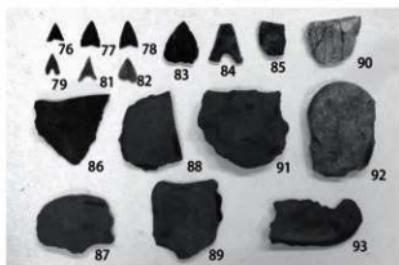
第2地点出土縄文時代早期土器（2）



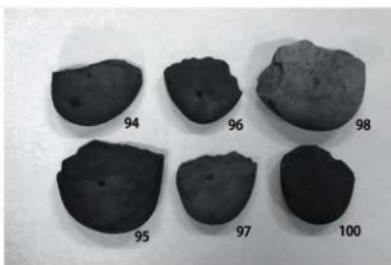
第2地点出土縄文時代早期土器（3）



第2地点出土縄文時代早期土器（4）



第2地点出土縄文時代早期石器（1）



第2地点出土縄文時代早期石器（2）

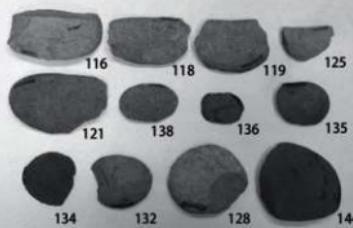
向原中尾第5遺跡

向原中尾第6遺跡

第2地点出土縄文時代早期石器（3）



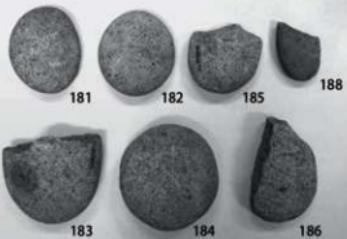
第2地点出土縄文時代早期石器（4）



第2地点出土縄文時代早期石器（5）



第2地点出土縄文時代早期石器（6）



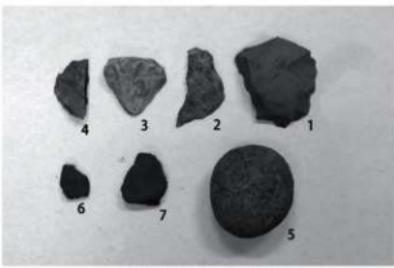
第2地点出土縄文時代早期石器（7）



第2地点出土弥生時代～古墳時代出土遺物



向原中尾第6遺跡疊群（SI2）検出状況（北西より）



向原中尾第6遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	むこうばるなかおだいにいせき（だいさんじょうさ）。むこうばるなかおだいごいせき。むこうばるなかおだいらくいせき							
書名	向原中尾第2遺跡（第3次調査）、向原中尾第5遺跡、向原中尾第6遺跡							
副書名	東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第229集							
編著者名	沖野 誠・山本 光俊・橋本 英俊・谷口 めぐみ・福田 泰典							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那田4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2014年 3月 7日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
むこうばるなかおだいにいせき 向原中尾第2遺跡 (第3次調査)	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうこうちゅうとうやまげ 東郷町山隠 あざとちのうち 字山ノ口	45206	32度 18分 39秒 付 近	131度 34分 0秒 付 近	2012.6.11～ 2012.9.11	500m ²	記録保存調査	
むこうばるなかおだいごいせき 向原中尾第5遺跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうこうちゅうとうやまげ 東郷町山隠 あざとちのうち 字山ノ原	A05	32度 18分 34秒 付 近	131度 33分 43秒 付 近	2012.6.27～ 2012.10.5	430m ²		
むこうばるなかおだいいせき 向原中尾第6遺跡	みやざきけんひゅうがし 宮崎県日向市 とうこうちゅうとうやまげ 東郷町山隠 あざとちのうち 字山ノ原	A05	32度 18分 26秒 付 近	131度 33分 36秒 付 近	2012.6.11～ 2012.9.10	200m ²		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
向原中尾第2遺跡 (第3次調査)	集落	旧石器時代	集石遺構	スクレイパー、剥片、石核	縄文時代早期の集石遺構、弥生時代終末期以降の堅穴建物跡を各1軒検出。			
向原中尾第5遺跡		縄文時代 弥生～古墳時代	堅穴建物跡	1軒				
向原中尾第6遺跡	散布地	旧石器時代	礫群	ナウフ形石器、剥片尖頭器、スクレイパー、剥片、石核	縄文時代早期の集石遺構13基・炉が33基、弥生時代～古墳時代の堅穴建物跡を各1軒検出。			
要約		・向原中尾第2遺跡は、後期旧石器時代から近代までの複合遺跡である。後期旧石器時代の遺物では、剥片石器が散漫ながら出土した。縄文時代早期の集石遺構が1基検出された。弥生時代～古墳時代の堅穴建物跡が1軒検出された。 ・向原中尾第5遺跡では、縄文時代早期の炉が33基や集石遺構13基が確認され、弥生時代～古墳時代の堅穴建物跡が2軒検出された。 ・向原中尾第6遺跡では、後期旧石器時代の礫群2基とスクレイパー等の石器が確認され、キャンプサイト的な性格が考えられる。	1基	縄文土器				

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第229集

向原中尾第2遺跡（第3次調査）

向原中尾第5遺跡

向原中尾第6遺跡

東九州自動車道（日向～都農間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書11

2014年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985 (36) 1171 FAX 0985 (72) 0660

印刷 北一株式会社

〒880-0903 宮崎市太田3-1-31 TEL 0985 (51) 5100

Hyuga City

MUKOUBARU NO.2 Site
the 3th excavation

MUKOUBARU NO.5 Site
MUKOUBARU NO.6 Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefectural Archaeological Center
vol.229

2014

Miyazaki Prefectural Archaeological Center